

供養香

沈九兩

丁子二兩

蘇合一兩

代甘松

薰陸一兩

白檀一兩

茅香二兩

麝香二分

兩錢重
代黃麝金

右香細搗、着レ蜜和供ニ入ニ鉄臼ニ搗五百杵、如ニ

彈丸ニ供ニ養如來ニ

天宝七載六月師主、景尊、干レ時在ニ

茅山太平觀ニ記レ之十二載八月写

取、日本国使永生府曹參^{軍力}羊●

崔叡祐

金剛頂經香²⁵⁷

沈半斤

蘇合半斤

薰陸半兩

白檀半斤

安息半斤

丁香四兩

龍腦一兩

右七味搗、篩用ニ蜀乾糖●及濕砂糖²⁵⁸ニ和

之合調更入ニ白中ニ搗一千²⁵⁹、此方出ニ西方ニ

┌ 33 丁ウ

┌ 33 丁才

是大悲尊、吉說

觀世音菩薩留濕香

²⁶⁰

伝^テ在^ニ化度²⁶¹寺此方是洛京僧、録弟子

崇知大師伝、與沈香六斤、薰陸二斤、

甲香七兩、零菱香、²⁶²再麝香各四兩、

藿香三兩、丁香七兩、艾納二兩白龍腦

一兩分、²⁶³兩、審^ニ瀆^レ記

┌ 34 丁才

刑部卿範兼卿奉 勅抄集之也

裏²⁶⁵面共校合了²⁶⁴

┌ 34 丁ウ

A

此方同ニ滋宰相并小一条皇后方ニ皇后者與ニ師成ニ無ニ相違ニ
尤可レ然滋宰相又、令レ同ニ其說ニ敷

(A) 裏書

B

小一条皇后并陸奥只合種、⁽²⁾阿數、⁽³⁾同ノミナラス
所レ註之說亦同本誤敷又伝同說敷⁽⁴⁾

(B) 裏書

件女房陸奥者朝元之娘肥前ノ司定成之妹也
弃テ置、上洛仍在ニ鎮西安樂寺・辺ニ云、

C

公任卿和香之伝不レ見但康義公者、八条大将養子也、用之
所習伝也⁽⁶⁾※⁽⁷⁾清模公殊和ニ合薰物一若其伝敷
台嶺有ニ戒源法橋者⁽⁸⁾※⁽⁹⁾法ニ曰戒ニ源ニ母者故四條太后之侍女也
仍成ニ人於彼宮中ニ太后曰、我和合薰物而誤テ入、過薰陸之
分數ニ者、于時公任卿參入、太后示給云、所合之薰物無ニ⁽¹⁰⁾
被試ニ者、取レ火於ニ薰炉ニ燒之被申云薰陸頗過、太后⁽¹¹⁾
殊褒美ス然則納言長ニ此道ニ尤可レ謂ニ至極ニ敷⁽¹²⁾

「35丁才

「35丁ウ

鶴⁽¹⁾西⁽²⁾香⁽³⁾岩⁽⁴⁾羣⁽⁵⁾「以下裏書」
古⁽⁶⁾「裏書云(參議師成の侍従方横に書入)」

A 西⁽¹⁾神無し

(1) 古⁽¹⁾ 鶴⁽²⁾ 香⁽³⁾ 岩⁽⁴⁾ 羣⁽⁵⁾ 其

(A) 古⁽¹⁾のみ有り(「裏書云(滋宰相の侍従方横に書入)」)

B 西⁽¹⁾ 神 裏書無し

(2) 古⁽¹⁾ 鶴⁽²⁾ 羣⁽³⁾ (ノ)

香⁽¹⁾ 岩⁽²⁾ 羣⁽³⁾ (無し)

(3) 古⁽¹⁾ 鶴⁽²⁾ 香⁽³⁾ 岩⁽⁴⁾ 同⁽⁵⁾ 羣⁽⁶⁾ 問

(4) 古⁽¹⁾ 鶴⁽²⁾ 羣⁽³⁾ 説⁽⁴⁾ 香⁽⁵⁾ 岩⁽⁶⁾ 伎⁽⁷⁾

(B) 古⁽¹⁾のみ有り(「裏書云(小一条皇后の梅花方横に書入)」)

C 西⁽¹⁾ 神(無し)

(5) 古⁽¹⁾ 合⁽²⁾ 鶴⁽³⁾ 香⁽⁴⁾ 岩⁽⁵⁾ 羣⁽⁶⁾ 香

(6) 古⁽¹⁾ 香⁽²⁾ 岩⁽³⁾ 羣⁽⁴⁾ 敷⁽⁵⁾ 鶴⁽⁶⁾ 也⁽⁷⁾ 敷

D

(C)

裏書

貞主渡唐、習_レ伝和合_ニ雜香方等_ニ云、但見_ニ家伝_一不_レ任₍₁₅₎
 遣_ニ唐使_一可尋之

36 丁才

(7) 古 羣 亦 鶴 之 杏 岩 恐

(8) 古 杏 羣 談 岩 談 鶴

(9) 古 鶴 杏 羣 母者

岩 母_者

(10) 古 鶴 杏 岩 合 羣 香

(11) 古 与 鶴 杏 岩 羣 而

(12) 古 無 可 鶴 杏 羣 可

岩 せ。(頭書「無」)

(13) 古 鶴 類 杏 岩 羣 於

(14) 古 五 鶴 謂 至 岩 謂 至 羣 謂 至 杏 相 至

(C) 古 のみ有り(「裏書云(滋宰相の梅花方横に書入)」)

D 西 神 羣 (無し)

(15) 古 鶴 任 杏 岩 仕

(D) 他本無し(古は以下2項目の裏書を伝えず)

(D) ※裏書

E

聖德太子伝^(E) 略カ 曆云推古天皇三年乙卯 春土左

南海夜有火光亦、有レ声、如レ雷經ニ卅箇日一矣、

夏四月着ニ淡路嶋南岸一嶋人、不知ニ沈水一以

交薪燒於窟太子遣レ使令レ獻ニ其木一^{(16)※} 大^{(17)※} 一^{(17)※}

長八尺其香異薰、太子觀而大悦奏曰是

為沈水香者也、亦名ニ梅檀香一木ニ生南天竺

國一、而^{(F)※} 海之岸夏月、諸蛇相^{カッ} 繞^ツ 此木冷故也、人以

矢射^{(18)※} レ之冬月蛇^{(19)※} 蟄^{カラル}、即折而探^{(20)※} レ之其实鷄雞舌^{ナリ}

其花丁子^{(21)ナリ} 其脂薰陸沈水久者為ニ沈香一不^{(22)※}

久者為ニ淺香一而^{(G)※} 今階下興^ク 釋教一肇ニ造佛

像一故釋梵、感レ德漂^テ 送ニ此木一 即有勅、命百濟

工一刻^ニ 造檀像一^ニ 觀音菩薩一高数尺安^ニ 置

吉野比蘇寺一時^ニ 放レ光云^ク

37 丁才

37 丁ウ

E 古 西 神 杏 岩 (無し)

(E) 他本無し

(16) 鶴 火 羣 大

(17) 鶴 用 羣 圍

(F) 他本「南」

(18) 鶴 天 羣 矢

(19) 鶴 蟄^{カラル} 羣^{カクル} 蟄

(20) 鶴 折而 羣 折析而

(21) 鶴 子^{ナリ} 羣 子

(22) 鶴 久者 羣 久^{シキ} 者^{ヲハ}

(G) 他本「隆」

F

凡合香法管窺輩多、稱其能然頗得二其道一者⁽²³⁾
 公忠朝臣、隨時朝臣等也、公忠者伝二典侍直子一説一稱レ雄⁽²⁴⁾
 隨時者以二八条李部王之孫一得レ名、此兩人、其流雖レ
 同其派猶異、口説●相違、手方相乖、公忠先搗洗レ⁽²⁵⁾
 香、作レ散和合後、以麝羅篩、号曰、※飛入⁽²⁶⁾
 更○和合良久、研黏取二入鉄臼一搗三千許杵搗⁽²⁷⁾
 了、斤定和二蜜欠數一取出如丸レ入三盜壺一埋七⁽²⁸⁾
 日、隨時亦春洗香和蜜了、春無教以レ多為レ能、⁽²⁹⁾
 埋如前⁽³⁰⁾ 亦公忠熟麝金、代用二麝香一隨時へ以二黄⁽³¹⁾
 麝金一通用其説非レ一其論難レ定、今見二拾遺本⁽³²⁾
 草一隨時所レ陳⁽³³⁾ 以相違、亦大唐僧長秀云、熟⁽³⁴⁾
 搗⁽³⁵⁾ 麝金花、和二白蜜一所レ作之物也、云、見二此兩⁽³⁶⁾
 種其不同也非可通用云⁽³⁷⁾

38 丁ウ

38 丁オ

- (33) 羣杏鶴 「亦(五)」有り
 羣 有(「ウ」)
 無し
- (32) 羣杏鶴 為羣而
- (31) 羣先杏 洗羣諸
- (30) 羣欠杏 欠。羣員
- (29) 羣鶴 杏 和羣 知
- (28) 羣鶴 杏 擣羣 搗
- (27) 羣杏鶴 「○」有り
 羣 無し
- (26) 羣鶴 説 杏 終羣 訖
- (25) 羣鶴 杏 洗羣 諸
- (24) 羣鶴 有 杏 羣 「等」無し
- (23) 羣杏鶴 「其」有り
 羣 無し
- F 古 西 神 (無し) 羣
 下卷裏
 書として
 有り

右以寂蓮法師真跡本写畢

延享二年九月日

※ (H)

「 39 丁才

「 39 丁ウ

(34) 鶴 〃 杏 〃 岩 〃 羣 己

(35) 鶴 本無此字 爵 杏 爵 稿 ろ 爵

岩 任本無此字 爵 稿 爵 羣 稿 摘 爵

(36) 鶴 羣 「之」 有 〃 杏 岩 無 〃 〃

(37) 鶴 羣 「亦」 無 〃 杏 岩 有 〃 〃

(38) 鶴 岩 羣 其 杏 丹

(39) 鶴 〃 (云) 杏 岩 之、 羣 之

(H) 鶴 ここに「清茂」有り

L
薰※
集類抄

下

「
表紙

L
鶴西神杏
て無し古下
岩羣外題無し
下卷無し
上下卷合本に

「
遊
紙
才
」



薰集
園林抄
和合時節
庫下

炮甲香

篩絹

合篩

合和

埋日數

267

付埋所

煎甘葛

春香

篩後斤定

和香次第

合春

諸香

「 1 (38) 丁ウ

「 1 (38) 丁才

和合時節

賀陽宮

正月十日作之

山田尼

春むめのはなさかり二三月秋蘭菊

のかうはしき八九月

煎甘葛

姚家

取ニ白油蜜一斤四兩煎沫解即熟²⁶⁸ 和香²⁶⁹

長宣公主

蜜去レ沫和

²⁷⁰

音寶 邠王家

以蜜合占唐香微々火煎

賀陽宮

蜜能煎拾レ沫用之

公忠朝臣

以ニ文武火一煎訖、去レ沫整ニ寒温ニ和²⁷³ 誰香²⁷⁵ ヲ又^N田[※]考^等ソ²⁷⁶
能程煎テ未固程ニ以レ²⁷⁷綿テ絞テ可レ合レ之

「 2 (39) 丁ウ

「 2 (39) 丁オ

269 西 神 羣 取 鶴 發 乳

杏 岩 發 孔

M 他本「寧」

270 西 羣 邠 王家 鶴 邠 王家

杏 岩 邠 王家 神 邠 王家

N 他本「日」

白石英方云、煮以陰陽鼎煎²⁸⁰。以文武火

出、ニ於草木ニ為文武火、出ニ於金石ニ為武火、

春夏鑄為陽鼎、秋冬鑄為陰鼎、

或書云下猛火、上以灰埋也、下猛則武也、

上埋則文也、謂之文武火也

經信卿云非²⁸²非微²⁸²以之為文武火也、以微

火²⁸³為文以猛火²⁸³為武也、伴²⁸³卿、公忠之末流也、

若有²⁸³所聞敷、但非微者已、離文非猛者亦

離武、何以中火稱文武一乎

師成卿云、先以猛火煎²⁸⁴後以微火煎²⁸⁴謂之

文武火也、伴²⁸⁴卿、小²⁸⁵一條大將濟時之孫也、定有²⁸⁶

所聞敷

雅志朝臣勸文云文伏武之道也、政理和則

武道不²⁸⁷與、故煎練之處、以²⁸⁸為文武火

於刀反敷²⁹⁰、於刀反東宮切韻云埋²⁹¹中令熱也、唐韻云、伏埋²⁹²煖

又云陰陽釜秋冬鑄、為²⁹³陰、春夏鑄為²⁹⁴陽

或隨²⁹⁵所²⁹⁵出定²⁹⁵陰陽、以²⁹⁶北方²⁹⁶為²⁹⁶陰、以²⁹⁶南方²⁹⁶為²⁹⁶陽

歟、凡煮レ藥其釜、覆レ蓋謂ニ之陰陽鼎如本

居297 飯イモ并覆レ蓋以之レ陰陽鼎

八条宮 凡蜜煎去ア、ラ沫ア、ラ唐蘇合等、入レ蜜煎

八条大将 以甘葛入子封子口入湯三日許、煎之如蜂蜜300

隨時朝臣 和ニ合蜜ニ與ニ干葛ニ汁混、合用之甘葛也

国幣302 以蜜入土器中燒ウツムムヲ埋火居其上微火煎之沫立ニテ

之後、去沫以指深蜜適寒温欲冷也 熱則失香云々

山田尼

蜜はかうはしけれど、むしのいてくる304

ときありあまつらハよし、かなくさか305

らす、さかくさからぬ307か、蜜のことくかた306

からむを、火よくうつみて、しろかね308

のものして煎せよ、火のきハ、三寸はか309

りもちあけよ、かなわをたて、きえぬも310

のからにふくて、ねるなり、いれもの、つら311

「 4 (41) 丁才

「 4 (41) 丁ウ

307

神 西 羣 すねる 鶴 杏 岩 ぬか
すねる ぬか

或説

につきたるを、ハしにかくれハいと、たるほ
 とに煎せよ、かたまらぬさきに、止てさま
 して、ものにしたみいれて、かひして、す
 こしつゝ、くみて、かつくまめして、かたき
 かたなるに、つきもていけはよき

あまつらを、煎することは、ものして、かき
 あくれは、やますけの、やへた、みのやうに、
 た、なはりゐるほとに、煎すへきなり、
 火をうつみて、かなわのうへにすへて、
 煎すへきなり

330
 331
 炮甲香

姚家

333 理甲香取レ甲用レ水刷・洗・蒸
 酒一升一煎三五沸、盡レ酒為レ度更ニ洗フ如レ前
 了用レ酢煎、盡レ酒為レ度
 了用レ水洗、如レ前

「 5 (42) 丁才

「 5 (42) 丁ウ

和ニ小許蜜ニ熬令ニ黄包ニ云々³³⁶
³³⁷

唐僧長秀

浸ニ煖水ニ經ニ三日一夜ニ淨ク洗ヒ炮了ニテ又塗レ蜜ヲ重テ
炮干、取テ春

賀陽宮

甲香漬酒ノ而一宿、其後爆³³⁸レ火搗レ之

八條宮

今日午時、漬レ酒明日同●時、取上炙干シ調レ之³³⁹
³⁴⁰

典侍直子朝臣

漬³⁴¹レ酒一宿、後刷取、後漬³⁴²レ酢後³⁴³洗³⁴⁴レ水ニ云々

今只漬³⁴⁵レ酒一宿、後刷³⁴⁶洗、曝干³⁴⁷レ塗³⁴⁸レ蜜又炙干

令ニ黒黄ニ

公忠朝臣

先漬³⁴⁹ニ古酒一宿ニ割去³⁵⁰ニ肉膜ニ炙³⁵¹ル大唐及、土左

国經●二宿●云々炮³⁵²レ沈塗³⁵³テ蜜ヲ及黒黄ニ干取、細

┌ 6 (43) 丁ウ

┌ 6 (43) 丁オ

346
搗任ニキ※345
隨時朝臣ニキ

漬・酒・經ニ一宿ニ以テ清水ニ洗、和ニ千歳薑汁347一滴348
炙、待レ朝搗用今試、一度以テ千歳薑汁ニ代349
蜜但推ニ尋甚意ニ依蜜非好・蓋相転用乎350

国轉

◆ 擇厚深物漬ニ美酒ニ寒時經ニ一宿ニ温時朝漬
夕出也、清拭不ニ削リ刷352一矣、一唯能割353ニ膜肉ニ以レ蜜354
塗レ之以ニ紙籠355一炮乾356之塗如本蜜如此三
度了、取見ニ其中ニ待レ黄脆、折時取春レ之

東三条院

漬ニ好酒ニ經ニ一夜357之後、以レ刀上358テ垢ヲ割リ落シ359
炮重361ニ干シ離362ヲ炮363スト知ル360

四条大納言

塗ニ甘葛ニ煎若濃コクハ入364水テ頗薄365ク成テ

「 7 (44) 丁ウ

〇 他本「入」無し

345
〔 西 〕 任 由 羣 任 用 神 任 用
〔 任 由 羣 任 用 神 任 用 〕

可^レ塗^レ之濃甘葛煎^ヲ塗^ハ甘葛甘葛煎^ヲ塗^テ
早^ク不^レ被^レ灸^也只薄^ク塗^カ吉也

山田尼

よきさけに、ひとよひたして、きたなく³⁶⁹

ところなく、よくはたけて、あまらの煎³⁷⁰

せぬを、名なしのゆひしてぬりて、火をよ

くおこして、かきひろけて、はひかきう³⁷¹

つみてこのめのこまかなるに、ひろけいれ³⁷²

て、三日はかりあふれ あつきはをしわり

て、あふるへし、こかさぬものから、よくこか

ねいろにあふれ、うすくてひろ³⁷³は、と³⁷⁴こか

くあふるる、あつきをよくあふりたるも

よし

又云

ひろくてうすきを、よきにす、あつきと³⁷⁶

もいふ、まつあちはひ、よくすみたる、さけ³⁷⁷

にひたして、けふの午時にいれたらへ、あす³⁷⁸

「 8 (45) 丁オ

「 8 (45) 丁ウ

の午時にとりいつへし、もろこしのかひ³⁷⁷

かう、土佐のくに、いてくるとは³⁸⁰ こゝろ

すへし、かたなして、うちのかたにつき³⁸¹

たる、たなしこといふものを、よく³⁸² か

くへし、うらのいそすりは、たゝものなと

の、はざまりたらんを、はたけて、³⁸³ た

す³⁸⁵ た

け、きさけたる、よしといふ人もあり、さ

れども、それはわろきなり、さて水してよ

く³⁸⁷ あらひて、又³⁹⁰ ときすにひたして、しハし

おきて、又とりいて、水して、よくあらふ

へし、たゝしすにひたすことは、あまりの

心³⁹² しらひなりさらねどもあしくもあらず、

さてよく、³⁹³ のこひほして、³⁹⁴ こに、かみをし

きて、火を³⁹⁵ よくきほどにして、³⁹⁶ うるへくよ

く³⁹⁷ からくとなるまで、つねにかへし、つゝ、こ

かさ³⁹⁸ ねて、あふりて、のちにせんしたる、あまつ

「 9 (46) 丁オ

「 9 (46) 丁ウ

380 西 鶴 杏 岩 羣 ふたよひた
す 神 二 夜 ふたよひたす

394 西 鶴 杏 岩 こき 羣 籠 に
神 二 籠 くに

らをぬりて、あつくふくむましきかみを、³⁹⁹
 このうへにはりて、⁴⁰¹ハたによくとちつけて、⁴⁰²
 まつうらを、⁴⁰⁴うへにてあふるへし、⁴⁰⁵うらを
 うへにて、⁴⁰⁷あふることは、⁴⁰⁸くほなるかたに、⁴⁰⁹いり
 たるあまつらを、こほさしとてなり、⁴¹⁰その
 あまつら、すこしかはかむのちには、⁴¹¹うらを
 うへにてあふるへし、⁴¹²おしをるにしふ
 ねからぬ、⁴¹⁴やはらかに⁴¹⁵おれてくろみすきす、⁴¹⁶
 きはやかなるほどに、⁴¹⁷あふりてつくへし、⁴¹⁸もし
 しめりて、⁴¹⁹つかれす、⁴²⁰ふるはれすは、⁴²¹火をよ
 きほとにて、⁴²²あふりかはらけつ、⁴²³ふるふへし、⁴²⁴
 ある説には、⁴²⁵せんしたるあまつらして、⁴²⁶あふ
 るは、⁴²⁷あふるまゝに⁴²⁸こかれてあし、⁴²⁹た、⁴³⁰せん
 せぬをぬりて、⁴³¹あふるへし、⁴³²とそいふを⁴³³なま
 しあまつらは、⁴³⁴とみに、⁴³⁵あふりかはらけれ
 す、⁴³⁶いそかむときハ、⁴³⁷せんしたるを、⁴³⁸ぬるへ
 きにやあらん、⁴³⁹あふる時⁴⁴⁰に、⁴⁴¹えつきてあるを
 は、⁴⁴²とりかへさむとては、⁴⁴³火をあつきほとにて

「 10 (47丁ウ)

「 10 (47) 丁オ

「 他本 」と「 き 」

春香

すこし、あふりてはなつへし、おほよそ、あま
つらの、おほく、つきたる443 Q ※ よきなり

444 邠王家

445 衣香、方、六種各別搗、為レ散和合、唯ノ蘇合

446 唐以レ手授リ碎、和447 ※ 亦好シ

448 案之雖梅花鳥方可准知歟

449 姚家

零陵香乾曝淨打却レ土搗ニ甘松一、且乾曝去レ

塵霍香450、同ニ此外451 テ餘者盡搗、可即入袋

云々

公忠朝臣

薰陸 甘松 漸春 凡春香替時、鉄臼ヲ可ニ能

拭一

大和常生452 ナリ

十五歳許453ノ女ノ粉張454ノ衣ヲ着シテ春ムニ其粉

11 (48) 丁ウ

11 (48) 丁オ

Q 他本「か」

447 西 杏 岩 臺 亦 鶴 之 神 夕 亦

不落ル程ニ可春

案之微く可春歟

国幣

所伝諸方説細搗云々

四條大納言

荒

キハ 其香 ト

聞也、細搗

ヒタルハ

只薰物

457

善悪

トコソ 聞

ゆれ

沈丁子

ト 聞

ユル

事ハ

無然則

459

篩 ハ 猶二重許ニテ 可用

知章朝臣

甲香塗

レ 蜜 ヲ

炮 テ

折見 ニ

中きはやかになり

て、さわらかなる時可レ春

山田尼

甲香

ハ 炙

ツ、

可レ春

シ

ねちけたれは

462

463 シ 又云金白杵ハ 香替 コトニ

宇治關白

清掃ハ

麝香

ハ 鉄小鉢同

鉢

シテ

研レ之

465 二条關白

12 (49) 丁ウ

12 (49) 丁オ

節緝

麿香ハ瓷杯ニ入テ
口口ケテ
錘レ之

R

公忠朝臣

以ニ淫羅ニ節

国轉

所伝請方 黒方 細搗以⁴⁶⁷後⁴⁶⁸節之

四条大納言

S※ 節猶二重ニテ可ニ細節也以レ細為レ勝

知章朝臣

490 以レ後^{後カ}可レ節之

山田尼

ふるひはかどりの、⁴⁷¹小^{小カ}葉⁴⁷²をはりて、はしめは⁴⁷³

ゆすりて、のちはやをら、つゝすれ、⁴⁷⁴あらくすれ⁴⁷⁵

はあらし、あまり、⁴⁷⁷こ^{コカ}節⁴⁷⁸かなるは、みめはよ

くて、⁴⁷⁹たくをりにふくれて、いと、くかへし、

かになる、⁴⁸⁰あらくしたるハ、みめはわる⁴⁸¹けて、

はふれかまし、⁴⁸²よきほどなる、⁴⁸³そよき、⁴⁸⁴くさく

「 13 (50) 丁ウ

「 13 (50) 丁オ

R他本ここに「研」有り

468 西鶴以縊節之

杏岩以レ縊テ節レ之フ

羣以縊節之 神以^{縊敷}縊節之

S他本「擣」

ふるひあつめて、ひとつに、いる、おり、かうは
 しきものは、はてに⁴⁸⁶いる、ちむをかきひろけ⁴⁸⁷
 て、こまかに⁴⁹⁰かきあはせつ、よくあまねく、
 せて、⁴⁹³みあはせつきせよ、⁴⁹⁴篩はあたらしかるへ⁴⁹⁵
 し、⁴⁹⁷あかきところにて、よくみよ、⁴⁹⁸つきたる
 もの、⁵⁰²なかには、⁴⁹⁹かならず、⁵⁰⁰かみのふくれおち
 かみ、⁵⁰³ひとのいりたるを、⁵⁰⁴又ふるひてみるなり⁵⁰¹

二条関白

篩者合篩打張薄物小篩ニハ薄キ八丈緞ヲ⁵⁰⁵

張ル

篩後斤定ム

四条大納言

各香⁵¹⁰擣篩了、⁵⁰⁹整ニ懸兩分之間、⁵⁰⁸薄紙以テ⁵⁰⁹裹^{サキ}
 各香⁵¹¹置斤盤⁵¹²テ懸定^{ナリ}
 紙⁵²¹ト云其紙⁵¹⁶ノ⁵¹⁷躰⁵¹⁸ハ⁵¹⁹草⁵²⁰ノ⁵²¹中⁵¹⁹ニ⁵²⁰如紙⁵²¹ナル物ア

知章

惣各春篩又可三斤定一方員⁵²²

14 (51) 丁オ

14 (51) 丁ウ

西神鶴羣又杏岩み

合篩

公忠朝臣

先搗諸香作_レ散和合後以_二産羅_一篩之号曰_※525

合篩又云以_二産紗_一篩_フ 526

国轉

各細搗以_レ後篩_カ之任各阿數斤定後和合 527 528

撥合五六度許、說則合篩二度 529

530
和合次第

賀陽宮

黒方 沈一 甲二 麝三 薰四 白五 丁六 531

滋宰相

先和沈丁子、次合甲香次合白檀最後和 532

麝香云々、尚自少可_レ及_レ多、為令_二快和合_一 533_※

也

染殿宮

諸香合蜜之後可_レ和_レ麝也 此說可秘云々

公忠朝臣 ◆

15 (52) 丁才

15 (52) 丁ウ

533

西 岩

神 少

鶴 可

羣

可

杏

少

可

沈^マ母^{ニテ} 沈⁵³⁴丁⁵³⁴薰⁵³⁴白⁵³⁴ ノアハヒニ 麝香⁵³⁵ ハ 合、次

甲香、又說蜜合了之上、麝香⁵³⁶ヲ振懸云々、

蜜合了以手ニキル也、加手成之ヲ普一^ク

振合為レ能

八条大将 承和秘方同之

沈、甲、麝、薰、白、丁⁵³⁷

朱雀院

沈、丁、甲、薰、麝

東三條院

沈、甲、白、薰、丁、麝

四条大納言 云

合香次第只以三兩數ニ少物先入也、又以兩數

均對、⁵³⁸ 合也、但麝香⁵³⁹ハ最後ニ合レ之

小一条皇后

先沈丁子^マ 合、次甲香^マ 合、次白檀^マ 合、終⁵⁴⁰

麝香^マ 薰陸^マ 合⁵⁴¹テ一度ニ合⁵⁴²スト云リ少ヨリ

多⁵⁴²ニ可⁵⁴²●及⁵⁴²レ快⁵⁴²ヲ為⁵⁴²●合也

16 (53) 丁才

16 (53) 丁ウ

538

神 杏 西

云々 鶴 岩 云云

(對)、(對)ニ 羣對

合和

和以泯⁵⁴³為^レ好

泯⁵⁴⁴ 唐韻云弥忍反、孫賓反滅也又動也

知章朝臣口伝云以⁵⁴⁷指^テ推、合香⁵⁴⁹指^ノ皴⁵⁵⁰ノ文⁵⁵¹ノ

付⁵⁵³程⁵⁵⁴泯⁵⁵⁴ノ程^ト謂也

国麿

和^レ蜜程頗^ル欲^レ堅埋則自、有^ニ湿氣^一云^々

大僧都寛教

丁⁵⁵⁷春⁵⁵⁸丁子夏秋之沈冬薰陸随^レ季三朱

許可^レ加敷

山田尼

先⁵⁵⁷つめをきりて、をあらひて、つかみ

あはせよ、これはことねり、常生か、説なり

てのあかいるとて、もちろぬ人もあり、又

云⁵⁶⁰いまた、かたまらぬに、よくさ⁵⁶¹まして、

ものにしたみ、いれて、か⁵⁶²ひして、すこ

17 (54) 丁オ

17 (54) 丁ウ

552 西 羣 文乃 鶴 文ヲ 杏 文ノ

岩 文之ノ 神 文ヲ

丁他本「之」

561 鶴 のみ「さして」

しつゝ、くみてかつくまめして、かた
きかたなるそ、つきもていけは、よき
煎したるものなから、いるれはたりくる
ほとにいれ、すくすなり

或説

すゝりのはこの、ふたなどに、あつくう

るわしき、かみをしきて、それに香

をしたひに、いれて、まつ、ひとくさいれ

ては、まくりの、かひなとして、よくた

かきかへしつゝ、あまねくあはせて、又

いれくよく、かきあはせて、すこしあらし

ふるひして、ふたゝひ、ふるひ、あはせて、

あまつらには、あはすへし

あはせたるをりは、かうばしとも、お

ほく、丁子などの、か、はやきを、かきな

れたる、ほとなるへし、廿日ハかりわすれて

とりいて、かくにそ、かうはしきものなる、

なつあはするは、かたきよし、しるになる

18 (55) 丁ウ

18 (55) 丁オ

U 他本「に」

573 西 神 羣 たひく 鶴 たき

杏 岩 た化

578 西 神 羣 杏 おほえす
鶴 岩 おほえぬ

なり、⁵⁸⁷ふゆはしるなれとも、⁵⁸⁸またのひは、かた
 まりぬ、⁵⁹¹くさくのもの⁵⁹³ひに、⁵⁹²たきたてかく
 に、⁵⁹⁷くさくか、⁵⁹⁸ゆるをは、⁵⁹⁴いる、⁵⁹⁵かすにすこ
 し、⁵⁹⁷たらさる、⁵⁹⁸かうはしきものを⁵⁹⁹は、⁵⁹⁶ほう
 のことくに、⁶⁰⁰いるへし、⁶⁰¹くさき物のおほくい
 るは、⁶⁰²甲香なり

合春

姚家

諸香調和了、入ニ鉄臼搗、五百杵

公忠朝臣

合和良久、⁶⁰³研黏^{ネハラン}搗三千許杵⁶⁰⁴

隨時朝臣

和蜜^{トヲシ}投ニ鉄臼中一搗数以多為レ好

国^カ翰

先以諸香入ニ大草⁶⁰⁶管盖^ニ和レ蜜能黏⁶⁰⁷合了

入鉄臼搗千杵

19 (56) 丁才

19 (56) 丁ウ

致忠朝臣 東三条院同之

608 合香擣三千杵

知章朝臣

千度之内可春之

山田尼

あはせつきのおりは、かな、⁶⁰⁹うす、⁶¹⁰きね、よく

あらふへし、四両合にハ三千度、二両合にハ

千五百度、一両合にハ千度、すくなき

は、⁶¹¹とくつかる⁶¹²れは、⁶¹³かすをおとす⁶¹⁴り

⁶¹⁵しろき⁶¹⁶こはり、⁶¹⁷きたる⁶¹⁸そ⁶¹⁹ては、⁶²⁰こいりて

⁶²¹あし、⁶²²のり⁶²³ハリきたらん人の、つくへき也

埋日数 付埋所

長寧公主

埋三日

姚家

埋七日

┌ 20 (57) 丁オ

┌ 20 (57) 丁ウ

611 西 羣 とく 鶴 とく 杏 よく

岩 ゃくとく 神 と速く

614 西 神 鶴 杏 羣 なり 岩 かり、

極要方

盛ニ白瓷中ニ掘地、三尺以上、用ニ水辺之地ニ得ニ

朝陽ニ埋レ之卅日

洛陽薰衣香方

入瓷器埋ニ水辺陽氣地ニ深八寸七箇日

之後出レ用之

承和百步香方

盛ニ瓷器瓶中ニ埋經ニ三七日ニ取焼ヲ百步外、

聞レ香

同御時

被埋右近陣御溝辺地、後代相伝不レ變ニ⁶²⁴

其處ニ云々或記云右近陣御溝⁶²⁵下⁶²⁶

壇上云々

賀陽宮

用ニ唐瓷器ニ掘テ露地、深三尺許埋レ之

八条式部卿宮

— 21 (58) 丁才

— 21 (58) 丁ウ

一宿埋馬矢下件方伝ニ得⁶²⁹陽成院書、云々
公忠朝臣

黒方侍従春秋五日、夏三日、冬七日埋^ニ之
梅樹下^一

致忠朝臣

合香^テ後物^ニ入^テ花^カノ木^ノ下^カ乃^カ土中高^ニ
埋^レ之

知章朝臣

五葉ノ松下ニ可埋春秋七日夏五日冬十日

山田尼

茶⁶³¹茶⁶³¹塚のつほもし、は⁶³²つきなど⁶³²に⁶³¹いれて、ふ⁶³³
たよくお⁶³⁴いて、そく⁶³⁵ひして、かみ⁶³⁶を、し

て、よく、みづ⁶³⁷いるましく、封して、梅樹の
もとにうつむへし、それあめなど、いりて

なかる、も、あしかりぬへし、花の木⁶³⁷の、した
のつちを、ものにかき⁶³⁷いれて、うつみたるいと

よし、又水のほとり、みちのつし、むま⁶³⁷のや

のなかにも、のにしたか⁶³⁸ひて、うつむへし、
あるいは十日、もしハ廿日など、うつめ、くろ⁶³⁹

「 22 (59) 丁オ

「 22 (59) 丁ウ

諸香

ほう梅花などは、木のしたにうつみて、
春秋は五日、夏は三日、冬は七日、ありて、と
るへしつちを、ほること、二尺許なり

641 沈

本草也
證類云置ニ水中ニ則シ沈故ニ曰ニ沈香ニ次不沈者曰ニ淺

香ニ似ニ雞骨ニ為ニ雞骨香ニ似ニ馬蹄ニ為ニ馬蹄香ニ枝

条細実為ニ青桂ニ云々

或書云此木出ニ日南ニ欲レ取當ニ先ツ研レ樹著レ地

積外皮自テ朽爛其心至堅者置ニ水ニ則シ沈、名ニ

沈香ニ其次在ニ心皮之間ニ不ニ甚堅ニ置ニ之ヲ水ニ不レ沈

不浮與レ水平者ヲ名テ曰ニ淺香ニ其最ニ小産白者、曰ニ

麝香ニ葉似ニ冬青樹ニ形ヲ崇竦

648

649 麝香ニ葉似ニ冬青樹ニ形ヲ崇竦
ちむの、かうハしき、ひとつは、ちすのかす、

650 二ツ(ツマ)はきくのはなのかす、るゑくれとよし、

651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

665 は、わらあくたのかす、ひとつ沈にもかたく
かうはしきくさきかたあるをよくとり

まはしつゝ、火にたきてみて、よきかた ⁶⁶⁷
 をわりをれ、沈のわるきハ、いとあしきなり、 ⁶⁶⁸
 くち ⁶⁶⁹ 河津三郎行たるところなど、はたけすて、 ⁶⁷⁰ つく ⁶⁷¹
 へし ⁶⁷²

沈ハくろく、おもきを、よきにす、又くろ
 くおもけれと ⁶⁷³ わるきあり、すこし、たき
 て心みるへし、いるへきかす、にいま一二両許、
 くはへてつくへし、 ⁶⁷⁵ かはのやうなるもの、又
 むしのすのやうにて、 ⁶⁷⁶ ちり ⁶⁷⁷ みたるもの、
 ましりたるを、よく ⁶⁷⁸ 煮 ^エ りてかたなして、こ
 まかにわり、くたきて ⁶⁷⁹ つくへし、いとよき
 は、 ⁶⁸⁰ するめき、いミあひて、よくもつかれず、
 さらは、 ⁶⁸² わろき沈をすこし、くはへて、つ ⁶⁸³
 くへし、 ⁶⁸⁴ かなうすに、 ⁶⁸⁵ ふた ⁶⁸⁶ おほひて、 ⁶⁸⁷ や
 をらつくへし、 ⁶⁸⁸ ふるふにも、 ⁶⁸⁹ やをらふ
 るふへし、 ⁶⁹³ すこしつゝ、 ⁶⁹⁴ ふるひて、 ⁶⁹² あま
 た、 ⁶⁹⁵ ひ、 ⁶⁹⁶ つくへし ⁶⁹⁷ まつふるひたるを、 ⁶⁹⁸ よき
 にす、 ⁶⁹⁹

造沈香法

先取ニ香稻米一斗ニ以、ニ六月上旬日ニ淨洗合炊入 ^{カシカ}

— 24 (61) 丁ウ

— 24 (61) 丁オ

673
 西
 杏
 岩
 羣
 も
 鶴
 て
 神 ^シ

女菊六升和三合之入ニ水六升一着ニ新漚中一口封

閉遇三其限濂取ニ其汁酢一也 ⁶⁹⁸ ⁶⁹⁹ ⁷⁰⁰ ⁷⁰² ⁷⁰¹ ⁷⁰³
以粟二升一熬合黑色ニ ⁷⁰⁵ 生絹 裏漚 酢中緩

而用即取入又作、如前法也必至三度一可レ用レ之

然後取ニ青桐木一沈削ニ去泥 ⁷⁰⁴ ⁷⁰⁶ ⁷⁰⁷ 出令レ淨随ニ多少一着ニ

其酢一封ニ閉漚一口埋ニ土中一不レ可レ令レ知每ニ其日レ可レ攪

汁至三度其後出ニ青桐一曝ニ干、了者、亦別取ニ

新漚一随ニ木多少一蜂蜜、淹ニ漚中一随ニ木 ⁷⁰⁸ ⁷⁰⁹ ⁷¹⁰ ⁷¹¹ 厚薄

可用蜜或三周ニ或五周、或七周、也、必成ニ上品

沈香一也

生師口伝

香稻 和名 女菊 和名加 ⁷¹⁴ ⁷¹⁵ ⁷¹⁶ ⁷¹⁷ ⁷¹⁸
香乃 幸多知 過ニ其限 過ニ 救カ 粟

用佐 ⁷¹⁹ 淹粟 期 无出 必至三度 ⁷²⁰ ⁷²¹ ⁷²²
作酢必以初酢汁作レ之、又以其 汁重作如此至三度之後用之

青桐木 ⁷²³ 葉體如例青桐細葉辺花形、深、入耳 不レ花、不レ實、不レ高大
但ニ從横ニ延葉 枝條遠至、以朽老枯槁者為レ好其朽爛之

中、心、⁷²⁷ 傘堅者、及節目 埋土中 ⁷²⁸ ⁷²⁹ ⁷³⁰ ⁷³¹
黒堅者為尤 枕 過漚口上ニ或 至期日 其期也
七八分許 X

換汁至三度 ⁷²⁹ 九十日一度換 經用ニ出木 ⁷³⁰ ⁷³¹
以紙敷ニ籠、盛ニ 青桐一又以紙

張、籠上、之 ⁷³² ⁷³³ ⁷³⁴ ⁷³⁵ ⁷³⁶ ⁷³⁷
随ニ木之厚薄 用蜜欲ニ 不レ可レ令レ知 不レ令ニ人ニ知レ 其之所

楓香木 一斤 沈香一兩 白檀一兩 藿香一兩

一 25 (62) 丁ウ

一 25 (62) 丁オ

697 西 廬 鶴 羣 磁 杏 岩 廬 神 廬 ^瓶

698 西 遇 鶴 遇 ^過 羣 過 神 遇 ^過 ^{下文二見}

702 西 裏 純 鶴 裏 純 杏 裏 純 裏 純 裏 純

705 鶴 のみ 「如」

V 他本「伏」

W 他本「但」

724 西 綵 鶴 從 杏 岩 羣 縱 神 綵 ^綴

X 他本「丈」

梨蘆根一兩 香稻米酢三升 蓴汁二升一合

鉄 糲 一升五合已上用レ糲升但
大定、汁濃煮加ニ淹之

右一餅 淨淹、楓香木切テ以、乍ラニ七種ニ其入之

口封、閉ニ土中ニ埋レ之百日以ニ東流水五升煎減

四升、入レ酢少ク又返入ニ一餅、以ニ三封ニ閉経ニ三七

日ニ取出曝干、而後隨ニ木享薄ニ蜜中淹レ之若

三周、若五周、若七周、即成ニ上品沈香ニ也

三七日 廿一日 曝干 同上 蜜中淹 欲ニ蜜 多過ニ 楓香木

葉體如何但願 蓴汁 搗絞テ 取之 鉄糲 以レ塩盛レ釜若鼎 埋ニ土中ニ其上ニ燃火

745 若埋ニ籠下ニ欲ニ常熱也經ニ一許ニ歳ニ取出見レ之皆悉朽損如ニ土品 形ニ脆破即取レ入水令吐ニ塩氣一如ニ此數ニ度常換水令レ

749 氣ニ取レ者無ニ塩氣ニ即止欲ニ任用ニ即春篩、若乍ニ本體 淹用也 大定汁平、升法無和合ニ云也

右ニ方唐僧長秀所ニ秘藏ニ也以レ方造ニ進ル 宗之沈香ニ其香甚好天曆十一年三月廿

五日伝承之耳

丁子

雷公炮炙論云、丁子有ニ雄雌ニ雄顆小、雌顆大、 似ニ櫻棗核ニ方中多使レ雌力大故膏煎中用レ雄

26 (63) 丁ウ

26 (63) 丁オ

Y他本「瘧」

748 西告鶴杏岩羣去神告

749 西神鶴羣杏岩目

754 西神羣公宗鶴公宗 杏岩土家

若欲レ使レ雄湏レ去ニ丁蓋子ニくくハ⁷⁵⁹ 発三人皆⁷⁶⁰ 癡⁷⁶¹ 也
試^{ニハ}三丁子^ヲニ法^ヲ以^テレ齒嚙^ニ有^レ音辛^ノ物^一是^レ為^レ上^レ不^レ然

者朽古者也

丁子は、えたいと、わるしおほきにて、しと

やかなるを、よきにす、ふるくなりたる、も

しは、にて、⁷⁶⁹しる、つかひたるは、⁷⁷⁰かるくて、⁷⁷¹口に

く、みゝるに、からくもあらず、あたらしく

よきは、く、みゝるに、⁷⁷²からくていとかうはし、

花といひて、⁷⁷⁴まるなるものと、⁷⁷⁵くきとてくる

みたるものとハ、よきなり、⁷⁷⁶しろみてもの

の、⁷⁷⁷すちのやうなる物、⁷⁷⁸ましりたるわろし、

えり⁷⁷⁹すつへきなり、⁷⁸⁰これもやをら、⁷⁸¹つきて、ま

つ、⁷⁸¹ふるはれたらむを、よきにすへし、よき

はさひたる、やうにそある

白檀 ⁷⁸²

内典云、⁷⁸³梅檀^ノ白^ノ謂^ニ三^ノ之^ノ白^ノ檀^一

白檀はかたくて、⁷⁸⁴きなるをよきにす、わかき

木はやはらかにて、⁷⁸⁵かるくそある、うはかは

すこし、⁷⁸⁵けつりすて、⁷⁸⁶つくへし

薰陸 一名膠香 一名白乳 一名乳頭香 出整員方 786

本草云、微温悉。風水毒腫、去惡氣、伏尸、

其形如白膠、出三天竺、單干、二国、一名乳頭

香、一名滴乳香、一名膠香、一名白乳香、一

名雲華、一名沈油、

793 如本 くろくはにたるもの、おほかり、よくみし

795 るへし、わろきは、乳頭といひて、しるきもの

ましりたり、よきはひかり、きまみて、

らふいろにそある、くろみたるもの、や、いし

や、なましりたるを、まうりすて、つくへし

麝香

雷公炮炙論云、麝香多、有偽者、不レ如レ不レ用、

其香有三等一者、名遺香、是麝子、臍閉滿

其廉、自ニ於石上一用レ蹄尖、落者落麝

一黒、草木不レ生並、黄、人若得ニ此香、價与

明珠同也、二名ニ採得其堪レ用三名ニ心估

香、被ニ大獸驚、心被了因、狂走、雜ニ諸群中、

28 (65) 丁ウ

28 (65) 丁オ

遂乱投^レ水被^ニ人収^一得^一 破見心、^{〇〇〇}流在^ニ脚上^一、結

作^ルニ大^{乾カサ} 乾^{カサ}色^{カサ}塊^{カサ}ニ可^{〇〇〇} 隔^テ山潤^一 早^ク関^ニ之香^一 是香中

之次也、⁸¹¹几使^ニ麝香^一 並^ニ用^子日開^レ之、⁸¹³不用^苦 ^{チシロロニ}

納研用云々

さかうハ、⁸¹⁷くしり⁸¹⁵ たるに、はひしれたるや

うなるは、⁸¹⁷わろし、⁸¹⁸くしり、⁸¹⁹あつめて、⁸¹⁶かはや

毛などの、⁸²⁰ましりたるを、⁸²¹よくえりて、⁸²²茶

碗の、⁸²³つきなどに、⁸²⁴いれて、⁸²⁵いしのすりこぎ

なくは、⁸²⁶やなきのきの、⁸²⁷かれたるして、⁸²⁸す

りくたきて、⁸²⁹ふるひて、⁸³⁰香ともみな、⁸³¹あは

せふるひて、⁸³²うへに、⁸³³かきまひる人もあり、

されとも、⁸³⁴ことものとも、⁸³⁵あまつらにひち

くりて、⁸³⁶すこしつきてのちに、⁸³⁷ちあさく

ひきりつ、⁸³⁸まさなきたとひ、⁸³⁹なれ

とも、⁸⁴⁰もちあとてくふもの、⁸⁴¹あれにさす

やうに、⁸⁴²さしあつめて、⁸⁴³おしまろかして、

のちにつき、⁸⁴⁴あはすへし、⁸⁴⁵いたくつき、⁸⁴⁶あら

うすれは、⁸⁴⁷かうすといふ ⁸⁴⁸さし

香なき、⁸⁴⁹さかうをは、⁸⁵⁰水にひたして、⁸⁵¹さし

853

摩糖香

きつ、みて、きよきつちを、ゆ⁸⁴⁸らひて、さか
 うを⁸⁴⁵抄⁸⁴⁶して、そのうへにちひさき、茶碗
 をうつふせて、ところくに火をおきて、ひさ
 しからすして、とりすて、すなはちあた、
 かなる、わたにつゝみて、これを、おさむればか⁸⁴⁹
 をます⁸⁴⁸
 ねちけたれば、⁸⁴⁹くろほうは、さかういれす、
 850
 めたる、といとよし、⁸⁵¹侍従はよくとて、おほく
 852
 れたるハ、なかくあし

30 (67) 丁オ

本草云、微温、其樹似橘矣煎二枝葉ニ為香
 854
 似糖而黒去⁸⁵⁵伏尸病⁸⁵⁶出⁸⁵⁷交廣以南⁸⁵⁸又出⁸⁵⁹晉
 安岑州⁸⁶⁰真淳者、難⁸⁶¹得多以⁸⁶²其皮及柘虫⁸⁶³矢⁸⁶⁴、
 唯、輕者為佳⁸⁶⁵

859
 せむたうは、かたいしほのいろにて、その
 860
 しほの、かはのやうにて、うすひらにそめ⁸⁶¹
 862
 る、まつ煎⁸⁶⁴したる、蜜に和合して、ほ
 865
 しとりてつく、この香はなはた⁸⁶⁶か⁸⁶⁷くたし

此香のなかに、あかきけあるハ、かうはし、い
 ろくろきハ、劣なり

30 (67) 丁ウ

又他本「を」

866

西杏岩神

かきかたし
 羣⁸⁶⁶かきかたし
 「かはき」か⁸⁶⁷くたし
 かわきかたし
 鶴⁸⁶⁸か⁸⁶⁹たし
 かはき

麝金

嶺南者有⁸⁶⁷実似⁸⁶⁸ニ山荳蔻⁸⁶⁸一不堪⁸⁶⁸噉⁸⁶⁸之有⁸⁶⁸ニ青

麝金一又有⁸⁶⁹ニ熟麝金者一其中有⁸⁶⁹下以⁸⁶⁹ニ五種香等一

造⁸⁶⁹下之⁸⁶⁹又只以⁸⁶⁹ニ一種⁸⁶⁹造⁸⁶⁹之

この香は、さまざまあり、熟麝金といふは、

むらさきのりの、くちたるや⁸⁶⁹うにて、いとかう

はし、きなる、麝金は、まろたちて、⁸⁶⁹する

のみのいろなり、青麝金といふハ、⁸⁷⁰くは⁸⁷⁰し

かみを、ほしたるさまにて、わりたれ

は、⁸⁷¹きくち⁸⁷¹はの、ふかくつしみたる、

やうにそある

蘇合香

證類云、梁書云、中天竺国、出⁸⁷²ニ蘇合⁸⁷²一是諸香

汁煎⁸⁷²云、非⁸⁷²ニ自然⁸⁷²一物⁸⁷²一也

又云此香從⁸⁷³ニ西域⁸⁷³及崑崙⁸⁷³來⁸⁷³、紫赤色⁸⁷³重

実、如⁸⁷⁴燒⁸⁷⁴之灰白者好云、⁸⁷⁵師子⁸⁷⁵矢者、⁸⁷⁶此是胡人

誰言、拾遺云、⁸⁷⁷師子⁸⁷⁷矢赤黒色、⁸⁷⁸燒⁸⁷⁸之去⁸⁷⁸ニ鬼氣⁸⁷⁸一

— 31 (68) 丁オ

— 31 (68) 丁ウ

蘇合色、黄白、二物相似而、不同、是西国、草
 881 木皮汁所^レ為、胡人將^ニ來欲費^レ人^ヲ飭^ニ其名^一 882 其^ノ名^一 883 疑^ニ云、似^ニ玉壺^一 9 九年久者、此色、有^ニ赤脉^一、^ニ胡
 人^ニ匿^ニ此法^一不^レ言^ニ其術^一也云々

甘松

其躰種々也、或如^ニ苻安草^一、又如^ニ薺筋^一又苗豆
 884 或本刈
 或本此字

出和香方本草云味甘温、无^レ毒主^ニ惡氣卒
 885 886

心腹脹滿令^ニ人身香^一 叢生葉細一^ニ出^ニ姑藏梵^一
 887 888 889

云^ニ那羅駄^一 890

このかうは、ねを^ニすり^一すて、つちなど、
 891 892

894 895 896 897 898 899 900

しりたるをは、とりすて、やをら
 つくへし、あかみてすきたるは、わかくさ^ハは
 しるくてかはらけたちたるぞ、よかりける

雞香 901

證類云、令^ニ人身香^一 療^ニ齩齒^一 煮^レ汁含^レ之
 902 ※

本草云、其樹葉、似^ニ栗花^一如^ニ梅花^一子似^ニ棗
 903

核^一此雌樹也、雄樹者、花不^レ実採^レ花釀^レ之
 904 カモンシテ

以^テ成^レ香、出^ニ崑崙^一及^ニ交愛^一以南
 905

32 (69) 丁オ

32 (69) 丁ウ

880 西 神 羣 云々 鶴 狄 杏 岩 云

902 西 神 杏 岩 含 鶴 食 羣 含

このかうは丁子のふしなり、からあはとい
ふものゝ、やうなり

藿香※

南方草木物状曰、六月採曝⁹⁰⁶之、及ニ芬芳ニ可⁹⁰⁷ニ

以着ニ衣服中ニ長秀曰、八月採瀝⁹⁰⁸酒干納亦早

且採⁹⁰⁹之乍⁹¹⁰露干二朝、入ニ紙囊⁹¹¹不⁹¹²レ使ニ風氣

通一

安息 912

本草云、其味辛苦、平⁹¹³无⁹¹⁴毒主心腹惡氣

然^{ケイ}有疑云、安息^(ママ)香堅^キニ於石蜜一者、今案有下云ニ

悉香一者⁹¹⁵是今安息香、彙耳

此香は、たきものゝ、かれはみて、からき、やう⁹¹⁶
にそある⁹¹⁷

楓香脂: 919

一名白膠香^{カウ} 五月斫^クレ樹^イ為^テレ坎^{カシ}
十一月採^クレ脂

艾納 921

920 →

本草云、味甘温無^レ毒去^ニ惡氣一殺^レ蟲

松木皮上、綠衣、名⁹²²ニ艾納一合香中用⁹²³レ之取^ル云^ト

— 33 (70) 丁ウ

— 33 (70) 丁オ

908 西神羣乍鶴下杏乍一岩乍レ

其形※太糸長四五寸許、如蘭花干枯之物
黏ネリ着其筋上ニ方着ニ松樹之蔦也今925
724 檢シニ其

729 甲香 928

益芳932、独燒之則933自シ臭ク力
一名流螺、南州異物志云、可931合ニ衆香ニ燒之便

龍腦

本草云、其味辛苦微寒、出三波津国ニ形似934ニ白

松脂一作ニ杉木氣ニ明淨者善久、經三風日935或如ニ

雀矢一者不佳云、合936三稜灰相思子ニ貯之不レ耗

云々

青木香 937

本草云味辛温、C先无レ毒葉似ニ羊蹄ニ而長大、

花若938レ菊、其実黄思

白芷香

本草云、其味辛温939无レ毒、可940レ作ニ膏藥面脂ニ潤

澤ス顏、色941ニ一名942茶トウ果トウ、一名943苧トウ、一名苧離、一名澤芳、

一名芳香、生944ニ河東川谷可澤ニ二八月採根曝乾ス

「 34 (71) 丁ウ

「 34 (71) 丁オ

b 他本「如」

C 他本「无」

零陵香 946

證類云、味、甘平无_レ毒主_ニ惡氣心腹痛滿令_レ體香
和_ニ諸香_一作_ニ陽丸_一用_レ之得_レ酒良_シ、葉兩_レ相對_ニ基方也、

桂心香

949 陶云、葉似_レ栢非也、其色紫色、或謂_ニ之紫桂_一或

云_ニ箇桂_一一名_ニ箇薰_一、一名箇、香、一名葉使者、其

葉如_レ柿葉中有_ニ縱文_一三通_一云々

木蘭香

本草云、其味苦寒无_レ毒、去_ニ臭氣_一一名林蘭、

一名、⁹⁵⁶蘭、皮似_レ桂而香、又生_ニ太山_一

荳蔻香 ⁹⁵⁷

本草云、⁹⁵⁹荳蔻、味辛温无_レ毒、去_ニ口臭氣_一出_ニ

南海_一一名龍眼、一名益智、一名蒟_一綠

香附子

962 梵云、鼻沙慕薩多有_レ出_ニ西域_一生_ニ諸毛髮_一者

也、炮炙論云、於_ニ石_一白木杵_一搗勿_レ令_レ犯_レ鉄用_レ之

た_レのかうふしは、はまふてといふ物の、や

うにて、ちひさし、甘松のふしなり

— 35 (72) 丁ウ

— 35 (72) 丁オ

茅香 964

本草云、茅香花味苦温無毒、止嘔吐、六月採根
唐人說崑崙之⁹⁶⁷雪⁹⁶⁸山之⁹⁶⁵砌⁹⁶⁶多生此草、所謂

吉祥草、忍辱草等是也、當朝雖有⁹⁶⁵此草、其氣不似⁹⁶⁶被香一者也

白朮香

本草云、其味苦甘温无⁹⁶⁹毒主⁹⁷⁰風寒温痺⁹⁷¹

除⁹⁷²熱消⁹⁷³食⁹⁷³二⁹⁷³三⁹⁷³八⁹⁷³九⁹⁷³月採⁹⁷³根⁹⁷³曝⁹⁷³乾⁹⁷³

974

刑部卿範兼卿奉 勅抄集之也

長寛三年二月廿六日書写了

裏面⁹⁷⁶両方⁹⁷⁵校合了

36 (73) 丁才

36 (73) 丁ウ

977 裏書

G

劉夢得練甲香法曰

取濃米泔一斗(40)木一淨鑊以微糠火煮經二伏時

即換新泔一經三度即(41)漉(42)出泉、平割、去甲上

惡物(43)乾用白蜜三合水一斗、後煮都三伏

時、以香軟爛(44)即止(45)炭(46)火燒令熱即灑(47)漬酒(48)

潤鋪(49)甲地上、以故帛於其上、以盆合(50)上蜜

泥一伏(51)時、待(52)申冷硬(53)即取(54)木白杵(55)搗令爛

即入(56)沈香(57)二了麝香(58)二分(59)和合搗令入(60)都良

香(61)、成(62)以(63)瓷瓶(64)貯(65)之佳(66)更能埋經(67)久燒尤好

即燒(68)此香(69)漬(70)用(71)火(72)爐(73)傍(74)悉(75)煖(76)水(77)即(78)香氣

不(79)散(80)矣(81)云(82)、甲香(83)出(84)南方(85)大如(86)長(87)數寸(88)、

合(89)衆香(90)燒(91)皆(92)使(93)益(94)芳(95)獨(96)燒(97)則(98)臭(99)、一名(100)流

螺矣

H

極要方云

漬(101)酒(102)經(103)兩宿(104)割(105)去(106)肉(107)膜(108)清(109)淨(110)刷(111)之(112)、塗(113)好(114)白

蜜(115)掘(116)地(117)作(118)(53)燒(119)熱(120)、(54)抹(121)印(122)內(123)撫(124)中(125)蜜(126)蓋(127)、

久(128)着(129)火(130)氣(131)盡(132)土(133)冷(134)、出(135)云(136)曝(137)令(138)干(139)任(140)用(141)

— 37 (74) 丁ウ

— 37 (74) 丁オ

G 西神固無し

(40) 鶴米杏木岩木。羣半

(41) 鶴羣衆杏泉岩泉。

(42) 鶴平杏岩手羣午

(43) 鶴後杏岩羣復

(44) 鶴杏岩止羣山

(45) 鶴灰杏岩羣炭

(46) 鶴時待申杏時符申

(47) 羣鶴執良香杏岩執良香

(G') 他本「轆」

(48) 鶴美杏着岩着羣著

(49) 鶴々杏岩羣之

(50) 羣鶴鏡杏瓶岩瓶(頭書「瓶」)

羣

I

(H') ※
裏書

薰炉抄云承保三年九月十四日前少納言清房来予
 相談云、身病種、療治未レ得ニ其※⁽⁵⁵⁾驗者、清房答云、采
 女正惟宗、俊通、医道才人也、我病為ニ被療治、之⁽⁵⁶⁾得ニ⁽⁵⁷⁾
 平愈者、忽同乘到ニ俊通家ニ五条南鞆原 西⁽⁵⁸⁾最角
 也、先入前納暫云、依病不レ出ニ門外之由、以ニ下人ニ云出⁽⁵⁹⁾仍⁽⁶⁰⁾
 駕到會、悉ニ布直衣ニ⁽⁶¹⁾蝶⁽⁶²⁾臥⁽⁶³⁾遣戸⁽⁶⁴⁾肉⁽⁶⁵⁾一家⁽⁶⁶⁾牀三間許、
 立ニ文枕文書ニ甚多、以レ竹作⁽⁶⁷⁾籠子備⁽⁶⁸⁾レ之急事時速⁽⁶⁹⁾
 為ニ取出⁽⁷⁰⁾所⁽⁷¹⁾搆云、又入ニ鼓筒⁽⁷²⁾等⁽⁷³⁾間⁽⁷⁴⁾種⁽⁷⁵⁾療治⁽⁷⁶⁾所⁽⁷⁷⁾答⁽⁷⁸⁾
 有⁽⁷⁹⁾ニ才智⁽⁸⁰⁾次⁽⁸¹⁾問⁽⁸²⁾ニ文武火陰陽釜⁽⁸³⁾答曰、白石英方⁽⁸⁴⁾所⁽⁸⁵⁾レ云⁽⁸⁶⁾
 如⁽⁸⁷⁾之⁽⁸⁸⁾在⁽⁸⁹⁾者、余答云件方無⁽⁹⁰⁾ニ此事⁽⁹¹⁾、只春夏鑄⁽⁹²⁾為⁽⁹³⁾ニ陽釜⁽⁹⁴⁾
 以⁽⁹⁵⁾ニ秋冬⁽⁹⁶⁾鑄⁽⁹⁷⁾為⁽⁹⁸⁾ニ陰釜⁽⁹⁹⁾、又以⁽¹⁰⁰⁾レ探⁽¹⁰¹⁾レ木⁽¹⁰²⁾為⁽¹⁰³⁾ニ文武火⁽¹⁰⁴⁾、以⁽¹⁰⁵⁾レ探⁽¹⁰⁶⁾レ金石⁽¹⁰⁷⁾、為⁽¹⁰⁸⁾ニ武
 火⁽¹⁰⁹⁾者、俊通答云、更⁽¹¹⁰⁾不⁽¹¹¹⁾レ見⁽¹¹²⁾ニ此文⁽¹¹³⁾、但可⁽¹¹⁴⁾ニ勘送⁽¹¹⁵⁾ニ者俊通說⁽¹¹⁶⁾未⁽¹¹⁷⁾
 得⁽¹¹⁸⁾レ心見⁽¹¹⁹⁾ニ髓文⁽¹²⁰⁾之後可⁽¹²¹⁾レ⁽¹²²⁾信⁽¹²³⁾也⁽¹²⁴⁾
 同廿七日重問ニ俊通ニ其返状云、仰旨⁽¹²⁵⁾、跪⁽¹²⁶⁾奉⁽¹²⁷⁾レ之⁽¹²⁸⁾柙⁽¹²⁹⁾陰陽⁽¹³⁰⁾
 釜凡煮⁽¹³¹⁾レ藥其釜、覆⁽¹³²⁾レ蓋謂⁽¹³³⁾ニ之⁽¹³⁴⁾陰陽鼎⁽¹³⁵⁾練⁽¹³⁶⁾以⁽¹³⁷⁾ニ文武火⁽¹³⁸⁾
 凡練⁽¹³⁹⁾レ藥始用⁽¹⁴⁰⁾ニ猛火⁽¹⁴¹⁾、謂⁽¹⁴²⁾ニ之⁽¹⁴³⁾武火⁽¹⁴⁴⁾、次⁽¹⁴⁵⁾以⁽¹⁴⁶⁾ニ微火⁽¹⁴⁷⁾、謂⁽¹⁴⁸⁾ニ之⁽¹⁴⁹⁾文武火⁽¹⁵⁰⁾、非⁽¹⁵¹⁾
 猛⁽¹⁵²⁾非⁽¹⁵³⁾レ微⁽¹⁵⁴⁾謂⁽¹⁵⁵⁾ニ之⁽¹⁵⁶⁾文武火⁽¹⁵⁷⁾、研⁽¹⁵⁸⁾以⁽¹⁵⁹⁾ニ玉槌⁽¹⁶⁰⁾者⁽¹⁶¹⁾、如⁽¹⁶²⁾ニ水精⁽¹⁶³⁾、和⁽¹⁶⁴⁾以⁽¹⁶⁵⁾ニ左味⁽¹⁶⁶⁾之⁽¹⁶⁷⁾
 津⁽¹⁶⁸⁾、以⁽¹⁶⁹⁾ニ睡⁽¹⁷⁰⁾為⁽¹⁷¹⁾ニ左味⁽¹⁷²⁾、
 醉⁽¹⁷³⁾一和⁽¹⁷⁴⁾レ之⁽¹⁷⁵⁾也、或說⁽¹⁷⁶⁾、服⁽¹⁷⁷⁾以⁽¹⁷⁸⁾ニ乳牛⁽¹⁷⁹⁾之⁽¹⁸⁰⁾摩⁽¹⁸¹⁾一者⁽¹⁸²⁾、
 云粥⁽¹⁸³⁾也⁽¹⁸⁴⁾、
 唐韻⁽¹⁸⁵⁾

38 (75) 丁才

(H') 他本に無し

I 古 西 神 否 羣 (無し)

(51) 鶴 割 岩 刻

(52) 鶴 頤 岩 膜

(53) 鶴 垢 火 燒 熱 色 掃 印 内 撫 中 蜜 蓋 久 着

(54) 鶴 士 冷 出 云 岩 出 之 煮 中 藥、蓋 久 桑 (頭 書 「抗 垢」)

I 古 西 神 無 し

(55) 岩 鶴 種 種 否 種 種 種 種

(56) 鶴 之 否 岩 羣 已

(57) 鶴 岩 否 忽 羣 夕

(58) 鶴 否 岩 聚 羣 家

(59) 鶴 羣 仍 否 岩 則

K

J

(L) 裏書

合散之後不可⁽⁷⁷⁾飛⁽⁸⁰⁾風之時許⁽⁸¹⁾

師成卿云、金白口ニ張檀^(J)紙⁽⁷⁾ニテ杵⁽⁷⁾程ニ口⁽⁷⁾開

春ハ故実也但檀紙ハフリミテ其毛ヤ入⁽⁸²⁾

らむ猶不快之説也、以ニ練緝⁽⁸²⁾可⁽⁸³⁾漉⁽⁸³⁾歟、如レ是事只

出ニ自⁽⁸²⁾意略⁽⁸²⁾ニ云⁽⁸²⁾

※(k)

39 (76) 丁ウ

39 (76) 丁オ

(60) 鶴 芸 杏 岩 着 羣 着

(61) 鶴 羣 蝶 臥 杏 岩 特 臥

(62) 鶴 羣 以 杏 岩 似

(63) 鶴 羣 次 杏 岩 以

(64) 鶴 羣 面 杏 岩 西

(65) 鶴 のみ「以」

(66) 鶴 以採不為

羣 杏 岩 以^テ採^ル木^ヲ為

羣 以採 為

(67) 羣 鶴 杏 岩 俊通説未

(68) 羣 鶴 杏 岩 被 羣 取

(69) 羣 鶴 杏 岩 杏 岩 杏 岩 杏 岩

(70) 羣 鶴 柞 杏 羣 抑 杏 岩 柞

(71) 羣 鶴 杏 羣 鼎 杏 岩 削

(72) 羣 鶴 謂 杏 岩 謂

以微火謂之文火非猛非微 謂之文武火」無し

*(L)

右以寂蓮法師真跡書写畢

延享二年九月日

*(M)

清茂

40 (77) 丁ウ

40 (77) 丁オ

(73)

鶴 羣 杏 巖 無し
「非猛」有り
この語を含む一文「次
以微火謂之文武火」無し
謂之文武火」無し

(74)

鶴 羣 巖 微、杏 微、
この語を含む一文「次
以微火謂之文武火」無し
謂之文武火」無し

(75)

鶴 羣 巖 謂 杏 云
この語を含む一文「次
以微火謂之文武火」無し
謂之文武火」無し

(76)

鶴 羣 巖 杏 巖 無し
「文」有り 杏 巖 無し
この語を含む一文「次
以微火謂之文武火」無し
謂之文武火」無し

(77)

鶴 羣 巖 杏 巖 無し
「次以微火謂之文武火」有り
非微謂之文武火」有り
杏 有り 巖 有り 羣 無し

(78)

鶴 巖 杏 羣 酢

(I) 他本に無し

J 古西神 無し

(81) 鶴 羣 許 杏 許、**岩** 許、**岩** 許、**岩** 許、

(79) 羣 鶴 充 杏 見 **岩** 充
(一字空き有り)

(80) 鶴 杏 羣 風 **岩** **汎**_風

K 古西神 無し

(J) 他本「紙テ」

(82) 鶴 リ^ク 杏 **岩** 羣 ク

(83) 鶴 汝 杏 吹 **岩** 吹 羣 汝

(84) 岩 鶴 云、
云々、
羣 杏 云、
云云

(K) 鶴 ここに「尾張河村復太郎秀根蔵」と有り

(L) 鶴 ここに「原本 伏見宮御蔵本 寂蓮法師真蹟云（改行）寛政五年癸丑六月債入書写 益根」と有り

(M) 杏 岩 羣 無し

薰集類抄引用文献 索引と概説

〈凡例〉

一、西園寺文庫本『薰集類抄』上下巻、並びに河村文庫本の各巻裏書に引用される書名を、現代仮名遣いの五十音順に配列した。

一、口伝とされる場合も本索引の対象とした。

一、各書の所出箇所は、上下巻ないし上下巻奥書の別を記した上で、丁とその表裏並びに行を算用数字で示した。所出箇所を欄外とする場合、行数に続けてその一位置を記した。

(例) 上巻一丁表面の一行目、頭書↓【上】1才1頭書

一、索引の標目には書名の正式名称を用い、略称は参考のため所出箇所ごとに示した。例外も存する。

「本草」は、そのままの形で標目とし、同文を載せる『香字抄』『香要抄』に於いて特定の書名が挙げられている場合、参考としてそれを所出箇所毎に示した。

一、概説は、本草学、医学、音韻学方面の渡来の書や、文献の名目であることが先行研究により明らかにされ、或いは『薰集類抄』中の記述からそのように判断し得る出典先を対象とした。

〈索引〉

か 行

鑿（鑑） 灸方【下】 70ウ4

極要方【上】 37オ4 【下裏】 74ウ5

玉抄【上】 36オ6 頭書、36ウ2 頭書

薰爐抄【下裏】 75オ1

稽疑【下】 75ウ5、77ウ3

兼名苑【下】 70ウ4

廣韻【上】 36オ7 頭書

さ 行

最勝王經【下】 76オ4（「梵」『香

要抄』に「最勝王經」）、80ウ3（「梵」）

拾遺↓「拾遺本草」参照

拾遺本草【上裏】 37ウ2、3 【下】

75ウ3

聖徳太子傳曆【上裏】 36オ3

證類↓「證類本草」参照

證類本草【下】 64ウ6（「證類」）、

75オ6（「證類」）、76ウ4（「證類」）、

79ウ3（「證類」）

た 行

陶↓「陶引経」参照

唐韻【下】 57ウ6 【下裏】 76オ1

陶引経【下】 79ウ7

東宮切韻【下】 43ウ2

知章朝臣口伝【下】 57ウ7

な 行

内典【下】 70オ7（『香要抄』に「法

華玄賛」）

南州異物志【下】 78ウ2

南方草木物状（マヤマ）【下】 77オ4

は 行

白石英方【下】 42ウ1 【下裏】 75

ウ3

炮炙論↓「雷公炮炙論」参照

梵↓「最勝王経」参照

本草【下】 70ウ7、73ウ7（『香要

抄』に「本草圖経」）、77ウ2、78オ3、

78ウ5、79オ2、79オ5、80オ4、

80オ7、81オ1、81オ6

ま 行

雅忠朝臣勘文【下】 43オ6

や 行

陽成院書【下】 63オ4

ら 行

雷公炮炙論【下】 69オ5、71ウ1、

80ウ4（「炮炙論」）

劉夢得練甲香法【下裏】 74オ1

梁書【下】 75オ6

わ 行

和香方【下】 76オ3

〈概説〉

か行

鑑奂方 下巻「諸香」の項に「薰陸」の異称「乳頭香」の出典として挙がる（「一名乳頭香出鑑奂方」）。同じく「薰陸」の異称の出典先として挙がる「兼名苑」と同様の、物名の解説書か。「奂」を「奥」の誤写と仮定すれば、奥深い事を明らかにする書という意味か。河村文庫本は「鑑員方」と伝える。

極要方 上巻の「香粉方」、下巻「煎甲香」に対応する内容の裏書勘物の出典先として挙がる（「香粉方出極要方」、「極要方云」）。薰物の処方から原料となる香薬の製剤法まで記した渡来の合香の書か。

薰爐抄 承保三年（一〇七六）九月十四日、同二十七日の二日間の記事が下巻裏書勘物に見える。源清房、医師惟宗俊通との関わりが知られる。編著者未詳。

稽疑 本草か。下巻「諸香」の「蘇合香」「安息香」の項に「稽疑云」として各香薬の特徴が載り、『香字抄』『香要抄』の同文にも「稽疑云」「本草稽疑云」と見える。

兼名苑 唐の僧**近**年編著。類書形式で物名を注解する書で、二十巻本と十巻本が存したとされるが現存しない。『北戸録』『和名類聚抄』『妙法蓮華経积文』『香字抄』『香要抄』等我が国の抄書にその一部を知ることができる（李増杰・王甫『兼名苑輯注』参照）。

廣韻 『大宋重修廣韻』。五巻。隋の陸法言らによる勅撰書『切韻』を増補した孫愐の『唐韻』を、宋の陳彭年が真宗の命により増廣した切韻の書。大中祥符元年成立。

さ 行

最勝王経 『金光明最勝王経』。十卷。国家鎮護の三部経の一つとされる。
拾遺本草 『本草拾遺』か。十卷。唐の陳藏器撰。開元二十七年成立。

證類本草 三十卷。宋の唐慎微撰の『経史證類備急本草』(一〇八二頃完成)を祖とする
宋の艾晟撰『経史證類大観本草』(一一〇八)、金の曹孝等撰『経史證類政和本草』(一一
一六)、王継先等撰『経史證類紹興本草』(一一五九)の三系統に分化した。岡西為人氏
「綱目雑記」(『新註校訂国訳本草綱目』月報一)によれば、「慎微が資料蒐集に沈潜した
のは哲宋の元祐中(一〇八六・九三)で、完成は紹聖四年(一一〇九七)以後と思われるが、
最終的な整理を経ないままの稿本として残され、それを得た集賢孫公が刊行を志し、艾晟
が校刊を担当して大観二年(一一〇八)に完成して経史證類大観本草と名づけ、ついで政
和六年(一一一六)曹孝忠らが徽宋の詔をうけて大観本草を校訂刊行したのが政和本草で
ある」という。

た 行

陶 梁の陶弘景(四五六・五三六)撰による医書ないし本草書、或いは後人の撰による同
類の書に収められた陶弘景の解説を指すか。陶弘景は梁、秣陵の人。字通明、華陽隱居と
号し、著述を好み奇異を尚び、陰陽、五行、風角、星算、山川、地理、方図、産物、医術、
本草に尤も明通した。医術、本草方面の著述と伝わるものに『薬総訣』『陶弘景本草経集
注』がある。

唐韻 唐の孫愐撰。隋の陸法言等による『切韻』を訂正増補したもの。

東宮切韻 二十卷。菅原是善撰。十三家の切韻を集成、解説した書で、是善が東宮学士を務めた時の奉勅撰であったと推測される。岡井慎吾博士が、佚文百数十字を集成し切韻拾存を作成されたという（『大漢和辞典』六197頁参照）。
知章朝臣口伝 藤原知章の合香の説を口述筆記したものか。

な 行

南州異物志 未詳。南方諸国に産する珍奇な物品を解説した書か。
南方草木物状（ママ） 未詳。類似の名目を持つ史書『南方草木状』は三卷、晋の嵇含撰。嶺南産の草、木、果、竹について解説する。

は 行

白石英方 透明な水晶「白石英」の薬効と利用法を医書や本草書から集成し、解説した書か。本草によれば、「白石英」を細かく砕いたものや、牛乳、酒等と共に煮た汁を服用すると、主として肺の病に効果があると云う。

『薰集類抄』所掲の「白石英方」本文によれば、「甘葛」は「陰陽鼎」をもって煮、「文武火」を以って煎じる、草木により起こした火は「文火」になり、「金石」を用いれば「武火」となる、使用する鼎は、春夏鑄れば「陽鼎」となり、秋冬鑄れば「陰鼎」となる、という。「武火」を起こす「金石」とは、「白石英」を指して云われたのであろう。

ま 行

雅忠朝臣勘文 平安末期の勘文。丹波雅忠著。「文武火」の概念と利用法について述べられている。

や 行

陽成院書 未詳。陽成院の御記か。本康親王ゆかりの薫衣香の処方伝える。

ら 行

雷公ほうしや炮灸論 劉宋（四二〇・四七八）の時のらいこう雷敷の著。黄帝の臣雷公とは別人。上

中下の三巻から成り、性味、炮灸、熬煮、修事の法を解説する。

劉夢得練甲香法 「劉」氏による甲香の製剤法を記した書か。

梁書 五十六巻。唐、姚思廉、魏徵撰。貞観三年奉勅。本紀六巻、列伝五十巻から成る。

わ 行

和香方 未詳。『薫集類抄』下巻「諸香」の「甘松」の項に「出和香方」に至る一文が見える。香薬の製剤、調合法を記したのか。

薰集類抄 人名家名索引

凡例

一 西園寺文庫本『薰集類抄』上下巻、並びに河村文庫本の各巻裏書に登場する人名を、現代仮名遣いの五十音順に配列した。

二 各人名、家名の所出箇所は、表裏、上下巻、並びに上下巻裏書の別を記した上で、丁と行を算用数字で示した。

(例) 上巻一丁表面の一行目↓【上】1才1

三 索引の標目とした固有名詞以外の呼称が見られる場合、それぞれの所出箇所毎に示した。

あ 行

朝元↓「藤原朝元」参照

敦明↓「小一条院」参照

家譚↓「滋野家譚」参照

一条院【上】8才1（「一条院」）

因幡權守致貞↓「藤原致貞」参照

宇治関白↓「藤原頼通」参照

右大臣内膳（麻呂）↓「藤原内膳（麻呂）」参照

宇多天皇【上】20ウ5〜6（「亭子院」）

右大辨公忠↓「源公忠」参照

采女正惟宗俊通↓「惟宗俊通」参照

延喜↓「醍醐天皇」参照

円融院【上】8才1（「円融院」）

大江千古【上】32ウ7（「大江千古」）

太后↓「遵子」参照

小野宮↓「惟高親王」参照

尾張守家譚↓「滋野家譚」参照

か 行

戒源↓「戒源法橋」参照

戒源母【上裏】35ウ3（「戒源母」「故四条太后之侍女」）

戒源法橋【上裏】35ウ3（「戒源法橋」「戒源」）

賀陽宮↓「賀陽親王」参照

賀陽親王【上】4ウ3（「賀陽宮」「賀陽」）、14才7（「賀陽宮」）、21ウ5（「賀陽宮」）【下】41ウ2（「賀陽宮」）、42才

4（「賀陽宮」）、46才3（「賀陽宮」）、56才1（「賀陽宮」）、

63才1（「賀陽宮」）

寬（觀）教大僧都【上】26ウ6（「觀教大僧都」）、【下】

58才4（「大僧都寬教」）

閑院贈太政大臣↓「藤原冬嗣」参照

閑院大臣↓「藤原冬嗣」参照

桓武天皇【上】4ウ3

清房↓「源清房」参照

公任卿↓「藤原公任」参照

公忠↓「源公忠」参照

公忠朝臣↓「源公忠」参照

公忠弁↓「源公忠」参照

嚴子女王【上】25ウ7（「中務卿代明親王女」）

国紀↓「源国紀」参照

國幹↓「藤原國幹」参照

小一条院【上】9才4（「小一条院」「教明」）、9ウ2（「小

一条院」）、19才1（「小一条院」）、22才2（「小一条院」）

小一条皇后↓「藤原城子」参照

小一条大將濟時↓「藤原濟時」参照

皇后城子↓「小一条皇后」参照

故四条太后之侍女↓「戒源母」参照

光孝天皇【上】6ウ5（「仁和源氏」）

惟高親王【上】6才3（「小野宮」「惟高」）、16才2（「小野

宮」）、22ウ2（「小野宮」）

惟宗俊通【下裏】75才2、3（「采女正惟宗俊通」）、75才4

（「俊通家」）、75ウ6（「俊通」）、75ウ8（「俊通」）

さ 行

嵯峨天皇【上】5才6

前少納言清房↓「清房」参照

貞主↓「滋野貞主」参照

貞保【上】6ウ1（「染殿宮」「貞保」）、16才5（「染殿宮」）、

22ウ2（「染殿宮」）【下】56才6（「染殿宮」）、

參議師成↓「藤原師成」参照

三条院【上】8ウ2（「三条院」）、9才4（「三条院」）、26ウ

6（「三条院」）

三条院女御↓「小一条皇后」参照

三条関白頼忠↓「藤原頼忠」参照

滋野家譚【上】4ウ3（「尾張守家譚」）

滋野貞主【上】4ウ3（「滋宰相」）、5ウ6（「貞主」）、

14ウ1（「滋宰相」）、22才2（「滋宰相」）【上裏】35才1、2

（「滋宰相」）、36才1（「貞主」）【下】56才3（「滋宰相」）

滋野直子【上】6ウ5、15ウ7（「典侍滋野直子朝臣」）、

23才1、2（「典侍滋野直子朝臣」）【上裏】37才2（「典侍直子」）

【下】46才7（「典侍直子朝臣」）

滋野繩子【上】5ウ6

滋宰相↓「滋野貞主」参照

四条太后↓「藤原蓮子」参照

四条大納言↓「源定」参照

四条宮↓「藤原蓮子」参照

脩子内親王【上】14ウ1（「入道一品宮」）、22才2（「入

道一品宮」）

淳和院【上】31才4（「淳和院」）

聖德太子【上裏】36才3（「聖德太子傳曆」）、36才6「太

子」）、36才7「太子」）

承和↓「仁明天皇」参照

推古天皇【上裏】36才3（「推古天皇」）崇知大師【上】

40才3（「崇知大師」）

朱雀院【上】17ウ5（「朱雀院」）、24才5（「朱雀院」）【下】

56ウ7（「朱雀院」）

清楨公↓「藤原実頼」参照

清和天皇【上】6ウ1

詮子↓「藤原詮子」参照

染殿宮↓「貞保親王」参照

た 行

大将↓「藤原保忠」参照

醍醐天皇【上】7才6（「延喜御時」）、17才5（「延喜聖代」）

大唐僧長秀↓「唐僧長秀」参照

大納言公任↓「藤原公任」参照

大納言元方↓「藤原元方」参照

大非尊吉【上】39ウ7（「大悲尊吉」）

平隨時【上】31ウ1（「隨時朝臣」）【上裏】37才2（「隨時朝

臣」）、37才3（「隨時」）、37才8（「隨時」）、37ウ1（「隨時」）

37ウ3（「隨時」）【下】44才2（「隨時朝臣」）、46ウ7（「隨時

朝臣」）、60ウ4（「隨時朝卜」）

丹波雅忠【上】9ウ1（「典薬頭雅忠朝臣」）、19才4（「雅

忠朝臣」）【下】43才6（「雅忠朝臣勘文」）

丹陽公主【上】3ウ2（「丹陽公主」）、36才2（「丹陽公主」）

忠覚↓「忠覚入道」参照

忠覚入道（丹波忠明か）【上】9ウ2（「父忠覚入

道」）、9ウ3（「忠覚」）

長寧公主【下】42才2（「長寧公主」）、61ウ7（「長寧公主」）

経信卿↓「源経信」参照

常生↓「大和常生」参照

亭子院↓「宇多天皇」参照

典薬頭雅忠朝臣↓「丹波雅忠」参照

天曆↓「村上天皇」参照

陶隠居【下】79ウ7（「陶云」）※

※書名として見れば「陶引経」か。

唐僧長秀【上】30ウ3（「唐僧長秀」）【上裏】37ウ3（「大

唐僧長秀」）【下】45ウ7（「唐僧長秀」）、69才2（「唐僧長秀」）、

77才5（「長秀」）

時平↓「藤原時平」参照

俊通↓「惟宗俊通」参照

な 行

典侍滋野直子↓「滋野直子」参照

典侍滋野直子朝臣↓「滋野直子」参照

典侍直子↓「滋野直子」参照

直子↓「滋野直子」参照

中務卿代明親王↓「代明親王」参照

中務卿代明親王女↓「殿子女王」参照

二条関白↓「藤原教通」参照

入道一品宮↓「修子内親王」参照

入道一品宮女房陸奥↓「陸奥」参照

仁和↓「光孝天皇」参照

仁明天皇【上】5ウ6（「仁明天皇」）、15ウ6（「承和仰事」）

【下】62ウ5（「同（承和）御時」）

教通↓「藤原教通」参照

は 行

八条一品宮↓「本康親王」参照

八条式部卿↓「本康親王」参照

八条式部卿親王↓「本康親王」参照

八条大将↓「藤原保忠」参照

八条宮 ↓ 「本康親王」 参照

八条李部王 ↓ 「本康親王」 参照

東三條院 ↓ 「藤原詮子」 参照

肥前前司定成 ↓ 「藤原定成」 参照

枇杷左大臣 ↓ 「藤原仲平」 参照

邇 (劔) 王家 【上】 32ウ1 【下】 42才3、51ウ3

藤原朝元 【上裏】 35才5 (「朝元」)

藤原内膳 (麻呂) 【上】 4才2 (「右大臣内膳」)

藤原兼家 【上】 8才3 (「入道前太政大臣兼」)

藤原清経 【上】 21ウ3 (「清経」)

藤原公任 【上】 8ウ2 (「大納言公任」)、22才2 (「公任卿」)

【上裏】 35ウ1 (「公任卿」)、35ウ5 (「公任卿」)、35ウ7 (「納言」)

言」)

藤原國~~禰~~ 【上】 24ウ1 (「藤原國~~禰~~」) 【下】 44才3 (「國~~禰~~」)、

47才4 (「國~~禰~~」)、52ウ2 (「國~~禰~~」)、53ウ4 (「國~~禰~~」)、55

ウ5 (「國~~禰~~」)、58才2 (「國~~禰~~」)、60ウ6 (「國~~禰~~」)

藤原定成 【上裏】 35才5 (「肥前前司定成」)

藤原実頼 【上】 20ウ4 (「清慎公」) 【上裏】 35ウ2 (「清慎

公」)

藤原遵子 【上】 25ウ7 (「四条宮」「太皇太后宮遵子」) 【上

裏】 35ウ3 (「故四条太后」)、35ウ4 (「太后」)、35ウ5 (「太

后」)、35ウ6 (「太后」)

藤原城子 【上】 8ウ2 (「小一条皇后」「城子」)、9才4 (「皇

后城子」)、9ウ4 (「小一条皇后」)、22才2 (「小一条皇后」) 【上

裏】 35才1 (「小一条皇后」「皇后」)、35才3 (「小一条皇后」)

【下】 57才7 (「小一条皇后」)

藤原詮子 【上】 8才3 (「東三條院」「詮子」)、17ウ5 (「東

三條院」)、24才5 (「東三條院」) 【下】 47ウ2 (「東三條院」)、

57才2 (「東三條院」)、61才2 (「東三條院」)

藤原時平 【上】 7ウ4 (「左大臣時平」)

藤原知章 【上】 27才2 (「藤原知章」) 【下】 53才1 (「知章

朝臣」)、54才1 (「知章朝臣」)、55才8 (「知章」)、57ウ7 (「知

章朝臣」口伝)、61才4 (「知章朝臣」)、63ウ3 (「知章朝臣」)

藤原仲平 【上】 20ウ5 (「枇杷左大臣」)

藤原長良 【上】 21ウ3 (「長良」)

藤原濟時 【上】 8ウ2 (「小一条大将濟時」)、11才4 (「小

一条大将濟時」) 【下】 43才4 (「小一条大将」)

藤原教通 【上】 10ウ1 (「二条関白」「教通」)、19才8 (「二

条関白」)、28才2 (「二条関白」) 【下】 55才1 (「二条関白」)

藤原冬嗣【上】4才2（「閑院大臣」「冬嗣」）、14才4（「閑院大臣」）、21ウ3（「閑院大臣」）、27才2（「閑院贈太政大臣」）

藤原通任【上】11才4（「中納言通任」）

藤原道長【上】10ウ1（「道一」）、10ウ7（「道一」）

藤原元方【上】18才7（「大納言元方」）、25ウ3（「大納言元方」）

藤原致貞【上】9ウ4（「因幡權守致貞」）

藤原致忠【上】18才7（「藤原致忠」）、18ウ3（「致忠」）、25ウ3（「藤原致忠」）【下】61才2（「致忠朝臣」）、63ウ1（「致忠朝臣」）

藤原元名【上】21ウ3（「元名」）

藤原師成【上】11才4（「參議師成」）、20才2（「參議師成」）、22才2（「參議師成」）【上裏】35才1（「師成」）【下】43才3（「師成卿」）、43才4（「件卿」）【下裏】76才2（「師成卿」）

藤原保忠【上】7ウ4（「八条大将」「藤原保忠」）、17才7（「八条大将」）、17ウ3（「大将」）、24才1（「八条大将」）【上裏】35ウ1（「八条大将」）【下】44才1（「八条大将」）、56ウ5（「八条大将」）

藤原保昌【上】18ウ3（「藤原保昌」）、27才6（「藤原保昌」）

藤原頼忠【上】25ウ7（「三条関白頼忠」）【上裏】35ウ1（「藤原頼忠」）

藤原頼通【上】17才7（「宇治関白」）【下】53才6（「宇治関白」）

藤原頼宗【上】10ウ7（「堀川右大臣」「頼宗」）、19ウ5（「堀川右大臣」）、28才7（「堀川右大臣」）

冬嗣↓「藤原冬嗣」参照

ま 行

雅忠朝臣↓「丹波雅忠」参照

道↓「藤原道長」参照

陸奥【上】14ウ1（「入道一品宮女房陸奥」）、22才2（「入道一品宮女房陸奥」）【上裏】35才3（「陸奥」）、35才5（「女房陸奥」）

源清房【下裏】75才1（「前少納言清房」）、75才3（「清房」）

源公忠【上】6ウ5（「右大辨公忠」）、12ウ1（「公忠朝臣」）、16ウ3（「公忠朝臣」）、17才5（「公忠朝臣」）、23ウ1（「公忠朝臣」）、26ウ6（「公忠弁」）、29才5（「公忠朝臣」）、31才4（「公忠朝臣」）【上裏】37才2（「公忠朝臣」「公忠」）、37才4（「公忠朝臣」）、37ウ2（「公忠」）【下】42才5（「公忠朝臣」）、

42ウ7 (「公忠」)、46ウ4 (「公忠朝臣」)、52才3 (「公忠朝臣」)、53ウ2 (「公忠朝臣」)、55ウ3 (「公忠朝臣」)、56ウ1 (「公忠朝臣」)、60ウ2 (「公忠朝臣」)、63才5 (「公忠朝臣」)

源国紀【上】6ウ5 (「国紀」)

源定【上】5才6 (「四条大納言」「源定」)、22ウ2 (「四条大納言」「源(定)」「」)、32ウ7 (「四条大納言家」【下】47ウ5

(「四条大納言」※)、52ウ4 (「四条大納言」※)、53ウ6 (「四

条大納言」※)、55才4 (「四条大納言」)、57才4 (「四条大納

言」※)

※↓上巻と時代順異なる。

源経信【下】42ウ6 (「経信卿」)、42ウ7 (「件卿」)

村上天皇【下】18才1 (「天曆御時」)

本康親王【上】5ウ6 (「八条宮」「本康」)、7ウ4 (「本

康親王」)、15才4 (「八条宮」)、17ウ3 (「八条式部卿親王」)、

22ウ5 (「八条宮」)、29才1 (「八条宮」)、31ウ5 (「八条宮」)、

33ウ7 (「八条一品宮」【上裏】37才3 (「八条李部王」)【下】

43ウ7 (「八条宮」)、46才5 (「八条宮」)、63才3 (「八条式部

卿宮」)

本康親王女↓「廉子女王」参照

師成卿↓「藤原師成」参照

文徳天皇【上】6才3

や 行

山田尼【上】9ウ4 (「山田尼」「山田中務」)、13才1 (「山

田尼」)、19才4 (「山田尼」)、27ウ5 (「山田尼」)、27ウ8 (「尼」

【下】41ウ4 (「山田尼」)、44才4 (「山田尼」)、48才2 (「山

田尼」)、53才4 (「山田尼」)、54才3 (「山田尼」)、58才6 (「山

田尼」)、61才6 (「山田尼」)、63ウ5 (「山田尼」)

山田中務↓「山田尼」参照

大和常生【上】7才6、16ウ6 (「大和常生」)、17才4 (「藤

人所小舎人大和常生」)、17才5 (「常生」)、23ウ5 (「大和常生」)、

【下】52才5 (「大和常生」)、58ウ2 (「ことねり常生」)

隨時↓「平隨時」参照

隨時朝臣↓「平隨時」参照

代明親王【上】25ウ7 (「中務卿代明親王」)

姚家【下】42才1 (「姚家」)、45ウ2 (「姚家」)、51ウ7 (「姚

家」)、60才7 (「姚家」)、62才2 (「姚家」)

陽成院【下】63才4 (「傳得陽成院書」)

ら 行

雷敷【下】69才5（「雷公炮灸論」）、71ウ1（「雷公炮灸論」）

落梅公主【上】3ウ2（「落梅公主」）、35才5（「落梅公主」）

廉義公 ↓ 「藤原頼忠」参照

廉子女王【上】7ウ4（「本康親女王從四位上廉子女王」）

薰集類抄の同文一覧 一 『香字抄』

凡例

- 一 「本草」の引用については総じて『新修本草』に於ける同文、類文所出箇所を示すが、『香字抄』『香要抄』で特定の書名が記されている場合、参考のためその書名を丸括弧内に挙げた。
- 一 異同の見られる箇所については、本文の右側に算用数字で通し番号を示し、傍線を引いた。
- 一 同文中、或いは同文に続けて『薰集類抄』に無い記事が見られる場合、「中略」「下略」に代えて「…」と記した。

参考図書

- 『香字抄』 続群書類従本（巻第八五四所収）
- 『香要抄』 天理図書館善本叢書本
- 『證類本草』 四庫全書本（子部医家類 七四〇—一）
- 『新修本草』 中国古典医学叢刊本
- 『梁書』 四庫全書本（史部正史類 二六〇—一八）

諸香

沈

(7)

①

證類云置水中則沈故曰沈香次不沈者曰本草也

淺香 似雞骨為雞骨香似馬蹄¹為馬蹄

②

香枝條細實為青桂云々

③

或書曰此木出日南欲取當先斫樹著地積外

皮自朽爛其心至堅者置水則沈名沈香其

次在心皮之間不甚堅之置水不沈不浮與水

平者名曰淺香其最小麋白者曰槩香葉

似冬青樹形崇竦

ちむのかうハしきひとつはハちすのかす二ハ

きくのはなのかするゑくけれとよしう

しの矢のかするいとあしむけのをとりは

わらあくたのかすひとつ沈にもかたく

かうはしきくさきかたあるをよくとりま

はしつゝ火にたきてみてよきかたをわり

をれ沈のわるきハいとあしきなりくち

(65才)

(64ウ)

(7)

③ 『香字抄』

・ 南州異物志云。 沈香。 其次在心白間。 不甚置之水中。 不浮不沈與水平者名淺。

(上 p474 下段)

・ 文籍之中。 説沈香曰。 此木。 出日南。 欲取當先斫樹着地積。 外皮自朽爛。 其心至堅者。 置水則沈。 名之曰沈香。 其次在心白之間。 不甚堅精。 置之水不沈不浮與水平者。 名曰淺香。 其最小麋白者。 曰槩香也。 沈木葉似冬青樹形崇竦。 又云。 木極高大也。 (上 p475 下段、p477 上段)

たるところなどハたけすてつくへし
沈ハくろくおもきをよきにす又くろくおも
けれともわろきありすこしたきて心みる

へしいるへきかすにいま一二兩許くはへ
てつくへしかはのやうなるもの又むしの

すのやうにてちりはみたるものまし
りたるをよくゑりてかたなしてこまかに

わりくたきてつくへしいとよきはしる
めきいミあひてよくもつかれすさらは

わろき沈をすこしくはへてつくへし
かなうすにふたをおほひてやをらつく

へしふるふにもやをらふるふへしすこ
しつゝふるひてあまたたひつくへしま

つふるひたるをよきにす

(イ)

①

造沈香法

先取香稻米斗以六月上午日淨洗合炊入女

菊六升和合之入水六升着一新瓶中口封

閉遇三其限漉取其汁酢也

以粟二升熬合黑色
生絹裏淹酢中煖而

用之

即取入又作如前法也必至三度可用之然後

(65ウ)

(66オ)

(66ウ)

(イ) ①

造沈香法。

先取香稻米一斗。以六月上午日。淨洗合炊。

入女菊六升。和合之。入水六升。着一新瓶中。

口封閉。遇三其漉取其斗酢。

以粟二升熬合黑色。
生絹裏淹。酢中而後

用之

即取又作。如前法。必至三度可用之。然後取

取青桐木沈削去泥土令淨隨多少着其酢
封閉瓶口埋土中不可令知其日可換至
三度其後出青桐曝干了者亦別取新瓶
隨木多少蜂蜜淹瓶中隨木厚薄可用
蜜成三周或七周必成上品沈香也
生師口傳

香稻和名 女菊和名加 過三其限過三 放栗手也

用伏 淹栗 无出 必至三度 作酢以初酢汁作之又以其
久栗 期 汁重作如此至三度之後用之

青桐木 葉體如青桐但葉邊花形深入耳不花不實不高大但
經橫延蔓枝條遠至以朽老枯槁者為好其朽爛之中

心至堅者及節目 埋土中 過瓶口上文 至期日 其期也
黑堅者為尤佳 七八分許

換汁至三度 九十日一度換 經用出木 以紙數籠盛青桐又
汁如此三度

隨木厚薄 用蜜欲 不可令知 不令人知
過多耳 其處所

又法 楓香水 一斤 沈香 一兩 白檀 一兩 藿香 一兩

梨蘆根 一兩 香稻米酢 三升 芋汁 二升一合

カナクソノ出水也
鐵醬 一升五合已上用藥升但
大豆汁濃煮加淹之

右一瓶淨淹楓香水切以乍七種其入之口封閉
土中埋之百日以來流水五升煎減四升入酢少

(67ウ)

(67才)

青木沈。削去泥令淨。隨多少着其酢。封閉瓶
口土中。不可令知人。每其日可換汁至三度。
其度後出青桐曝干了者。亦別取新瓶。隨木多
少蜂蜜淹瓶中。隨木厚薄可用蜜。成三周或五
周也。必成上品沈香也。
生師口傳。

香裊不名 女菊和言加 過三其限過三斗也

殺栗。用伏 淹栗。无出 必至三度。 作酢必瓶作計
久栗 期 之。以其汁重作

之。如此至三 青桐木。 葉體如例青桐。但葉邊花深入也。
度之後用之。 不花不實不高口但從橫延近蔓枝條

遠至以朽拓槁者為好妨。其朽烟之中。中心
堅。堅者及節目黑。堅者為尤佳也。

埋土中 過瓶上 至期口。其期
七八分許。

換汁至三度。九十日一度 經周出木 以紙數籠。
汁如此三度。 盛青桐。又

以紙張籠。
上久塗干。

隨木厚薄。用蜜欲過 不可令知。不令人知
多耳 其處所。

又法。 楓香水。一斤。 沈香。一兩。 白檀。一兩。

霍香。一兩。 梨蘆根。一兩。 香裊。 米酢。三升。

芋汁。二升一合。 鐵將首。一升五合已上藥升。但

又道入一瓶以土封閉經三七日取出曝干而後
隨木厚薄蜜中淹之若日取出曝三周若五
周若七周即成上品沈香也

三七日廿一日 曝干同上 蜜中淹欲蜜多過 楓香水

葉體等例但願葉邊有花 取之 鐵醬以盛盛釜若鼎埋土中其上燃火若

埋竈下欲常熱也經一計歲取出見之皆悉朽損如塊形形破即取入水令咄噓氣如此數度常換水令告塩

氣取管者無塩氣即止欲任用即春篩若乍本體淹用也與大豆汁平升法而和合云也

右二方唐僧長秀所秘藏也以方造進公宗之

沈香其香甚好天曆十一年三月廿五日傳承之

耳

丁子

① 雷公炮炙論云丁子有雄雌雄顆小雌顆大似櫻棗

核方中多使雌力大故膏煎中用雄若欲使雄

須去丁蓋子ミミ發人皆靡也

② 試丁子法以齒嚼有音辛物是為上不然者

朽古者也

丁子乃えたいとわるしおほきにてしと

(69 才)

(68 才)

(68 才)

大豆汁濃煮加淹之。

右一瓶淨淹楓香水切。以七種其入之口封

閉。土中埋之百日。以東流水五升煎。減四升。

入醉少々又返入一瓶。以土封閉。經三七日取

出。曝干而後。隨木厚薄蜜中淹之。若三周若

五周若七周即成。上品沈香也。

三七日廿一日 曝干同上 蜜中淹欲蜜過多

楓香水。見上 取之 鐵醬以盛盛釜若鼎埋土其上燃火。

若埋形竈下欲常燃也。經許歲取出見之。皆悉朽損如塊。形

脆破即取入火。含吐塩氣如數度。常換水令失塩氣。取掌者

元塩氣即土欲任用即春篩。若乍本體淹

用之與大豆汁平升法而和合之。

右二方大唐僧長秀所秘藏也。所獻上於聖上。以此

方造。進公家。号口沈香。其香甚已好。

天曆十一年三月廿五日傳承之耳。

(475、476 頁)

① (ウ) 炮炙論云。雄顆小。雌顆大。似椽葉椽方中多使雌。

力大。膏煎中用雄。若欲使雄。須去丁蓋子。丁蓋子發

(オ)	(エ)
④ ③ ② ①	①
<p>一名沈油</p> <p>一名滴乳香 一名膠香 一名白乳香 一名雲華</p> <p>其形如白膠出天竺單于二國 一名乳頭香</p> <p>本草云微温治療風水毒腫去惡氣伏尸</p>	<p>白檀</p> <p>内典云梅檀白謂之白檀</p> <p>白檀はかたくてきなるをよきにする</p> <p>わかき木ハやはらかにてかろくそある</p> <p>うはかは少しけつりすて、つくへし</p>
<p>① 薰陸 一名膠香 一名白乳香 一名乳頭香 出天竺單于</p> <p style="text-align: right;"><small>日上一名出</small></p>	<p>やかなるをよきにすふるくなりたるものはにてしるつかひたるはかろくて口にくみみるにからくていとかうはし花といひてまるなるものとくきとてくろみたるものとハよきなりしろミてものすちのやうなる物ましりたるわろしえりすつへきなりこれもやをらつきてまつふるはれたらむをよきにすへしよきハさひたるやうにそある</p>

(70ウ)

(70オ)

(69ウ)

(オ) 兼名苑注曰(以下引用は上記と異なる)

① 本草云。微温。悉療風水毒腫。去惡氣。其形如白膠。

② 出天竺單于二國。一名乳頭香。一名滴乳香云々。

③ (薰陸香の条 p473)

(エ) 法華玄贊。第二。…白謂白檀之屬云々。

(裏書) 白檀香の条 p516

人背癰也。

(丁香の条

p478)

(カ)

如本
 くろくはにたるものおほかりよくみしるへし
 わろきは乳頭といひてしるきものまし
 りたるよきはひかりきハみてらふいろに
 そあるくろミたるものやいしやなとまし
 りたるをえりてすてつくへし

麝香

雷公炮炙論云麝香多有偽者不如用

其香有三等一者名遺香是鹿子臍閉

満タリ 其鹿自於石上用蹄尖彈落ラ落

者落處一黒草木不生並ニ鹿ニ黄人若

得此香價與明珠同也二名臍香採得

其堪用三名心結香被大獸驚心破了

因ツムサキ該狂走雜諸群中遂乱投水被人収

得ツムサキ擊破見心ツムサキ流在脾上結作一大乾血塊可ツムサキ障

山潤早聞之香是香中之次也凡使麝香並

用當子日開之不用子ムコロニ丁カニ細敷苦納研用云々

さかうハくしりたるにはひしれたるやう

なるハわろしくしりあつめてかはや毛など

のましりたるをよくえりて茶碗のつき

(71ウ)

(71オ)

(カ)

炮炙論云。

麝香多有偽者。不如不用。其香多有偽者。

不如不用。其香有三等。一者名遺香。是鹿子臍閉満。

其鹿自於石上用蹄尖。彈臍落者。落處一黒草木不生。

並ニ鹿ニ黄人若収得口香。價與明珠同也。二名臍香。採得

甚堪用。三名心結香。被大獸驚心破了。同ツムサキ該狂走雜諸

群中。遂乱投水。被人収得。擊破見心。心流在脾上。

結作一大乾血塊。可隔山潤早聞之香。是香中之次瑤也。

凡使麝香並用子。曰。開之不用。若細研用。

(麝香の条)

p471

などに入れていしのすりこぎなくハやな
きのきのかれたるしてすりくたきてふ

るひて香ともみなあはせふるひてうへに

かきまする人もありされともことものとも

あまつらにひちくりてすこしつきて

のちにちいさくひききりつゝまさなきた

とひなれ^{とも}もちるとてくふものゝあれに

さすやうにさしあつめておしまろかして

のちにつきあはすへしいたくつきあらか

すれはかうすといふ香なきさかうをは

水にひたして久しからすしてくちな

はのかは^皮をもちてまきつゝみてきよき

つちをはらひてさかうをおきてそのうへに

ちいさき茶碗をうつふせてところくくに

火ををきてひさしからすしてとりすてゝ

すなはちあたゝかなるわたにつゝミてこれを

おさむれはかをます

ねちけたれ共くろほうはさかういれすゝめる

いとよいし侍従はよしとておほくいれたるい

れたるハなかくあし

(73才)

(72ウ)

(72オ)

蔗糖香

(キ)

本草云微温其樹似橘矣煎枝葉為香
似糖而黑去伏尸病出交廣以南又出晉
安岑州真淳者難得多以其皮及拓ト
矣唯輕者為佳

せむたうはかたいしほのいろにてそのしほの

かはのやうにてうすひらにそあるまつ

煎しとりてつくこの香はなハたかき

かたし此香のなかにあかきけあるは

かうはしいろくろきハ劣なり

鬱金

(ク)

嶺南者有實似山ト菘ト不堪嗽之有青
鬱金又有熟鬱金者其中有以五種香
芳造之又只以一種造之

この香はさまざまあり熟鬱金といふハむ

らさきのりのくちたるやうにていとかうはし

きなる鬱金はまろたちてするのみのい

るなり 青鬱金といふハはしかみをほし

たるさまにてわりたれはきくちのはの

ふかくつしみたるやうにそある

(73ウ)

(74オ)

(74ウ)

詹糖香。

微温。其樹似橘矣。煎枝葉為香。似糖而里去伏口病。
出交廣以南。久出晉安岑州。真涼者難得。多以其皮及
松虫矢。唯輕者為佳。
(詹糖香の条 p472)

(ク)

開宝重定神農本草云。 ∴ 嶺南者有實。似卜豆菘不堪
嗽之。又云。又有青鬱金。又熟鬱金者。其中有以五種
香等造之。又有以一種造之香矣。(鬱金香の条 p469)

蘇合香

(ク)

① 證類云梁書云中天竺國出蘇合香是諸香

汁煎之非自然物也

② 又云此香從西域及崑崙來紫赤色重實

如燒之灰白者好云師子矢者此是胡人誰

言 拾遺云獅子矢赤黑色燒之去鬼氣蘇合

③ 色黃白二物相似而不同是西國草木皮汁

所爲胡人將來欲貴之飭其名耳云々晉

④ 疑云似玉壺丸年久者此色有赤脉胡人

遂此法不言其術也云々

甘松

(コ)

① 其躰種々也或如荊安草或本刈又如蒿筋又苗豆或本無此字

出和香方 本草云味甘温无毒主惡氣卒

心腹脹滿令人身香叢生葉細出姑臧 梵

③ 云那羅馱

このかうはねを多りすててつちなとましり
たるをハとりすてゝやをらつくへしあかみ
てすきたるハわかくさはしろくてかは
らけたちたるそよかりける

(75才)

② 本草云。 又云。此香從西域及崑崙來。紫赤色。重實

如石。燒之灰白者好。云師子矢者。此是胡人誰言...

(蘇合香の条 p468)

③ 拾遺云。 獅子矢赤黑色。燒之去鬼氣。蘇合色黃白二

物相似而不同。是西國草木皮汁。所爲胡人將來欲買人

飭其名耳。(蘇合香の条 p468)

④ 稽疑云。 似玉壺丸。年久者此紫色。有赤脉胡大匿。

此法不言其術矣。(蘇合香の条 p469)

(75ウ)

(コ)

② 本草云。 味甘温無毒。主惡氣。卒心。腹痛。痛滿。

廣志云。甘松香出姑臧。(甘松香の条 p492)

② 本草抄云。 味甘温無毒。主惡氣。卒心。腹脹滿。令

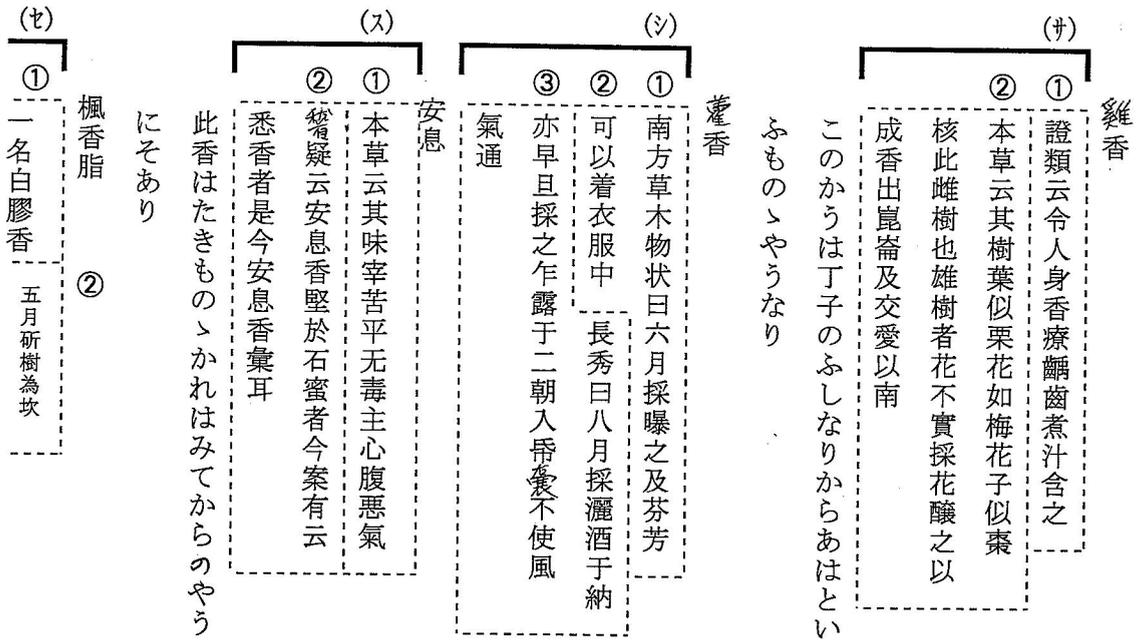
人身香。叢生葉細。出姑臧。

③ 梵云。 那羅馱。

① 或抄云。 甘松香其體種〔々也。〕或如能艾安草。又

如蒿筋。又... (甘松香の条 p492)

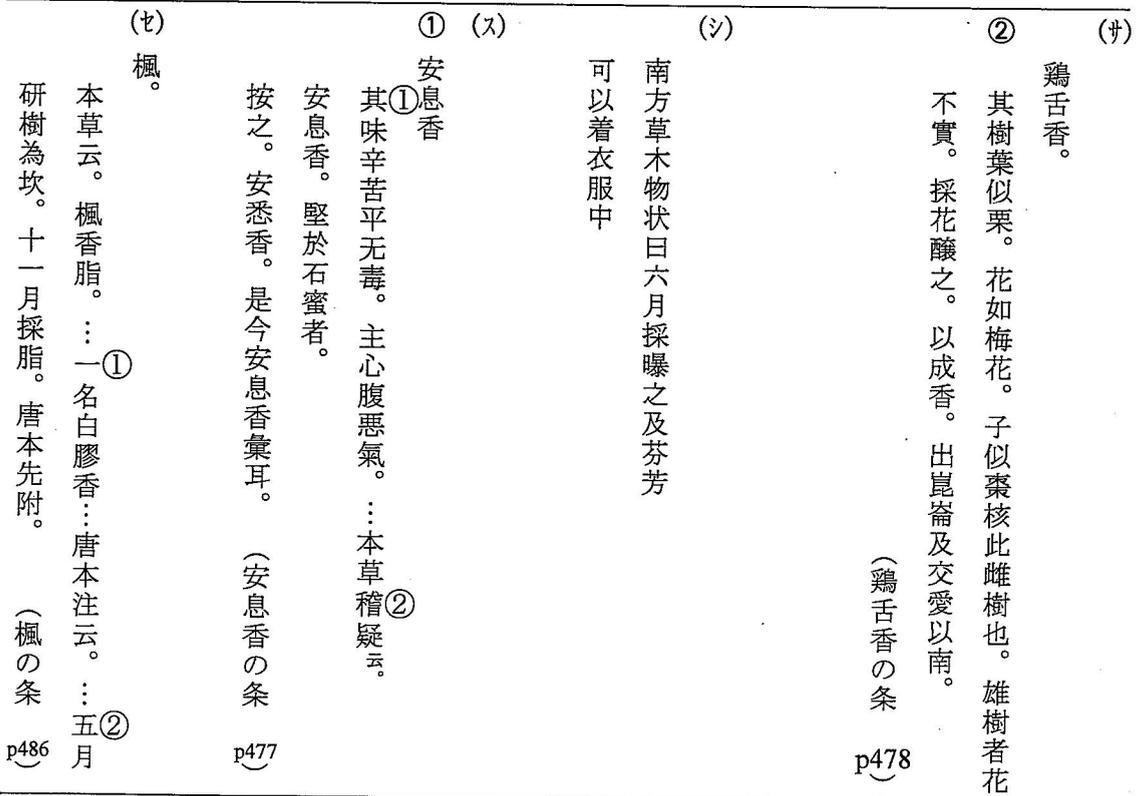
(76才)



(77ウ)

(77オ)

(76ウ)



<p>(7)</p> <p>① 本草云其味辛温无毒 可作膏藥面脂潤澤顏色 一名蒼<small>影皮</small>一名兔一名苻離一名沢</p> <p>白芷香</p>	<p>(7)</p> <p>② 若菊其實黃黑</p> <p>① 本草云味辛温无毒 葉似羊蹄而長大花</p> <p>青木香</p>	<p>(7)</p> <p>龍腦</p> <p>本草云其味辛苦微寒出波津國形似白松脂作杉木氣明淨者善久經風日或如雀矢者不<small>佳</small>云合粳灰相思子貯之不耗云</p>	<p>(7)</p> <p>甲香</p> <p>一名流螺南州異物志云可合衆香燒之便益芳獨燒之則臭</p>	<p>(7)</p> <p>艾納</p> <p>① 本草云味甘温無毒去惡氣殺蟲</p> <p>松木皮上綠衣名艾納合香中用之取之</p> <p>② 其形如太糸長四五寸許如蘭花干枯之物黏着其筋上方着松樹之蔦也今捨其說相似之云</p> <p>十一月採脂</p>
--	--	--	--	---

(78ウ)

(78カ)

<p>(7)</p> <p>本草云。 其味辛温无毒。 可作膏藥。 面脂潤澤顏色。 ② 一名芳香。 一名白菴。 一名藺。 一名沢芳。 出 河東川谷下澤。 二月八月採根曝乾。(白芷香の条 p481)</p>	<p>(7)</p> <p>青木香。 ① 味辛温無毒。 ② 葉似羊蹄長大。 花若菊。 其實黃黑。 (青木香の条 p478)</p>	<p>(7)</p> <p>本草云。 其味辛苦微寒。 出波津國。 形似白松脂。 作松木氣。 明淨者善。 久經風日。 或如雀屎者不佳。 但云。 (龍腦香の条 p479、480)</p>	<p>(7)</p> <p>本草云。 唐本注。 唐本先附。 一名流螺。 南州異物志云。 可合衆香燒之。 便益芳獨燒之。 則臭。 (甲香の条 p497)</p>	<p>(7)</p> <p>① 本草云。 味甘温無毒。 主惡氣殺蟲。(艾納香の条 p489) 或抄云。 松木皮上綠衣名艾納。 和合香中用之。 其形如太糸。 長四五寸許。 如蘭花。 干枯之物黏着。 其筋上方着松樹之蔦也。 檢其說相似之。(艾納香の条 p490)</p>
---	---	---	---	---

<p>(ネ)</p> <p>① 梵云憂沙慕薩多有出西域主諸毛髮者也 ② 炮炙論云於石臼木杵擣勿令犯鐵用之 たのかうふしははまふてといふ物のや</p> <p>香附子</p>	<p>(ヌ)</p> <p>① 本草云荳蔻味辛温元毒去口臭氣 ② 出南海 一名龍眼 一名益智 一名訶梨 荳蔻香</p>	<p>(ニ)</p> <p>① 本草云其味苦寒无毒去臭氣 一名林蘭 ② 一名牡蘭皮似桂而香又生太山 木蘭香</p>	<p>(ナ)</p> <p>① 陶云葉似栝 非也其色紫色或謂之紫桂 ② 或云箇桂 一名箇薰 一名箇香 一名藥使者 ③ 葉如梯葉中有縱文三通云々 其</p> <p>桂心香</p>	<p>(ト)</p> <p>① 證類云味甘平无毒主惡氣心腹痛滿令體 香和諸香作陽丸用之得酒良 葉而々相對 ② 莖方也 零陵香</p>	<p>② 芳一名芳香 生河東川谷可澤二八月採 ③ 根曝乾</p>
---	---	---	--	--	--------------------------------------

(80才)

(79才)

(79才)

<p>(ヌ)</p> <p>① 本草抄云。 穴荳蔻味辛温无毒。去口臭氣。出南 或抄云。 木蘭。 一名林蘭。 一名牡蘭。 。</p> <p>(木蘭香の条 p488)</p>	<p>(ニ)</p> <p>① 本草云。 其味苦寒無毒。皮似桂而香。生零陵山 谷及太山。 。</p> <p>(桂心香の条 p485)</p>	<p>(ナ)</p> <p>① 柿葉。 中有縱文三道。 。</p> <p>① 陶引經云。 似栝葉。 。</p> <p>(桂心香の条 p484)</p> <p>② 或抄云。 或謂之筒桂。 今陶云。 葉似非也。 其色紫 色。 或謂之紫桂。 其葉如柿葉。 中有縱文三通云。 或 云箇桂。 一名箇薰。 一名箇香。 一名藥使者。</p>	<p>(ナ)</p> <p>① 經云。 桂葉如栝葉如沢黒。 唐本經云。 箇桂葉似 栝葉。 中有縱文三道。 。</p> <p>(零陵香の条 p482)</p>	<p>(ト)</p> <p>① 本草云。 味甘平無毒。 主惡氣。 瘥心。 服痛滿。 。</p> <p>令體香。 和諸香。 作陽丸用之。 得酒良。 。</p> <p>(白芷香の条 p481)</p>	<p>本草云。 依有相違重入之。 味辛温無毒。 可作膏藥。 血 脂潤澤顏色。 一名白芷。 一名藟。 一名符離。 一名沢芥。 生河東川谷下澤。 二八月狩根曝乾。</p>
---	--	---	--	--	---

うにてちひさし甘松のふしなり

茅香

① 本草云茅香花味苦温無毒心嘔吐ムカツク六月

採 唐人説フモト論之フモト雪山之砌多生此草

② 所謂吉祥草忍辱草芳是也當朝雖

有此草其氣不似被香者也

白朮香

本草云其味苦甘温無毒風寒温痺

除熱消食二三八九月採根サランホス曝乾

(80ウ)

海。一名龍眼。一名益智。一名藟綠。

(荳蔻香の条)

p493

(ネ)

① 梵云。鼻沙慕薩多。有毒。出西域。生諸毛髮者也。

② 炮炙論云。於石臼木杵搗。勿令犯鐵用也。

(香附子の条)

p495

(ノ)

① 本草云。花味苦温無毒。胃止嘔吐。：

(茅香の条)

p499

② 唐人説。崑崙之趾。雪山之山多生此草。所謂吉祥草。

忍辱草等是也。當朝雖有此草。其氣不似彼香者也。

(茅香の条)

p499

(ハ)

白朮香

其味苦甘温無毒。主風寒。温脾。除熱。消食。二三八

(茅香の条)

p503

九月採根曝乾。：

薰集類抄の同文一覧 二 『香要抄』

凡例

- 一 「本草」の引用については総じて『新修本草』に於ける同文、類文所出箇所を示すが、『香字抄』『香要抄』で特定の書名が記されている場合、参考のためその書名を丸括弧内に挙げた。
- 一 異同の見られる箇所については、本文の右側に算用数字で通し番号を示し、傍線を引いた。
- 一 同文中、或いは同文に続けて『薰集類抄』に無い記事が見られる場合、「中略」「下略」に代えて「…」と記した。

参考図書

- | | |
|--------|---------------------|
| 『香字抄』 | 続群書類従本（巻第八五四所収） |
| 『香要抄』 | 天理図書館善本叢書本 |
| 『證類本草』 | 四庫全書本（子部医家類 七四〇—一） |
| 『新修本草』 | 中国古典医学叢刊本 |
| 『梁書』 | 四庫全書本（史部正史類 二六〇—一八） |

諸香

沈

(7)

① 證類本草也云置水中則沈故曰沈香次不沈者曰

淺香

似雞骨為雞骨香似馬蹄為馬蹄

②

香枝條細實為青桂云々

③

或書曰此木出日南欲取當先斫樹著地積外

皮自朽爛其心至堅者置水則沈名沈香其

次在心皮之間不甚堅之置水不沈不浮與水

平者名曰淺香其最小淺白者曰槧香葉

似冬青樹形崇竦

ちむのかうハしきひとつはハちすのかす二ハ

きくのはなのかする多くけれどよしう

しの矢のかするいとあしむけのをとりは

わらあくたのかすひとつ沈にもかたく

かうはしきくさきかたあるをよくとりま

はしつゝ火にたきてみてよきかたをわり

をれ沈のわろきハいとあしきなりくち

(65 木)

(64 ㄗ)

(7)

③

南州異物志曰木香出日南欲取當先斫懷樹著地積又外自朽爛甚心至堅者置水則沈名曰沈香與水平者名曰淺香其最

小淺白者名曰槧香

笠法真登羅山疏曰沈香葉似冬青樹形崇竦(本 沈香 p26)

文籍之中説沈香此木出日南欲取當先斫樹着地積外皮自

朽爛其心至堅者置水則沈名之曰沈香其次在心白之間不

甚堅精置之水不沈不浮與水平者名曰淺香其最小淺白者曰

槧香也葉似冬青樹形崇竦又云木極高大也

(本 沈香 p32、33)

たるところなどハたけすてつくへし
沈ハくろくおもきをよきにす又くろくおも

けれともわろきありすこしたきて心みる

へしいるへきかすにいま一二兩許くはへ

てつくへしかはのやうなるもの又むしの

すのやうにてちりはみたるものまし

りたるをよくゑりてかたなしてこまかに

わりくたきてつくへしいとよきはしる

めきいミあひてよくもつかれすさらは

わろき沈をすこしくはへてつくへし

かなうすにふたをおほひてやをらつく

へしふるふにもやをらふるふへしすこ

しつゝふるひてあまたたひつくへしま

つふるひたるをよきにす

造沈香法

先取香稻米斗以六月上午日淨洗合炊入女

菊六升和合之入水六升着一新瓶中口封

閉遇三其限液取其汁酢也

以粟二升熬合黑色
生絹裏淹酢中燂而

用之

即取入又作如前法也必至三度可用之然後

(65ヲ)

(66才)

(66ヲ)

(イ)

造沈香法

先取香稻米一斗以六月上午日淨洗合炊入女

菊六升和合之入水六升着一新瓶中口封閉遇三液取

其斗酢

以粟二升熬合黑色生
絹裏淹酢中後用之

三度可用之然後取青木沈削去泥令淨隨多少

着其酢封閉瓶口土中不可令人每其日可換

取青桐木沈削去泥土令淨隨多少着其酢封閉瓶口埋土中不可令知其日可換至

三度其後出青桐曝干了者亦別取新瓶

隨木多少蜂蜜淹瓶中隨木厚薄可用

蜜成三周或七周必成上品沈香也

生師口傳

香稻 和名 女菊 和名加 過三其限 過三 放栗 手也

用伏 淹栗 無出 必至三度 作酢以初酢汁作之又以其汁重作如此至三度之後用之

青桐木 葉體如青桐但葉邊花形深入耳不花不實不高大但經橫延蔓枝條遠至以朽老枯槁者為好其朽爛之中

心至堅者及節目 埋土中 過瓶口上文 至期日 其期也 黑堅者為尤佳 七八分許

椴汁至三度 九十日一度椴 經用出木 以紙敷籠盛青桐又 以紙張籠上之塗干

隨木厚薄 用蜜欲 不可令知 不令人知 其處所 過多耳

又法

楓香木 一斤 沈香 一兩 白檀 一兩 蘆香 一兩

梨蘆根 一兩 香稻米酢 三升 薑汁 二升 一合

カナクソノ出水也

鐵醬 一升五合已上用藥升但大豆汁濃煮加淹之

右一瓶淨洗淹楓香木切以乍七種其入之口封閉

土中埋之百日以來流水五升煎減四升入酢少

(67才)

(67ウ)

斗至三度其後出青桐曝干了者亦別取新瓶隨

木多少蜂蜜淹瓶中隨木厚薄可用密成三周

或五周也必成上品沈香也

生師口傳

香稻 不名 女菊 和言加 過三其限 過三 放栗 用伏久

淹栗 無出 必至三度 作酢以初酢汁作計之以其汁重之如此至三度之後用之 青桐

木 葉體如例青桐但葉邊花深入耳不花不實不高大但從橫延蔓枝條遠至以朽枯槁者為好其朽爛之中

心至堅者及節目 埋土中 過瓶口上文 至期日 其期也 黑堅者為尤佳也 七八分許

日 換汁至三度 九十日一度換 經周出木 以紙敷籠盛青桐又以紙張籠

上又 隨木厚薄 用蜜欲 不可令知 不令人知 其處所 塗干 過多耳

又法

楓香木 一斤 沈香 一兩 白檀 一兩 蘆香 十兩 利蘆根 一兩

香稻米酢 三升 薑汁 二升 一合 鐵醬 一升五合已上用藥升但大豆汁濃煮加淹之

右一瓶淨洗淹楓香木切以七種具入之口封閉土

中埋之百日以來流水五升煎減四升入酢少々返入

一瓶以土封閉經三七日取出曝干而後隨木厚薄

密中淹之若三周若五周若七周即成上品沈香也

三七日 廿一日 曝干 同上 密中淹欲蜜 楓香木 見上

又道入一瓶以土封閉經三七日取出曝干而後

隨木厚薄蜜中淹之若日取出曝三周若五

周若七周即成上品沈香也

三七日廿一日曝干同上蜜中淹欲蜜楓香木

葉體等例但頗多過鐵醬以盛盛釜若鼎埋

葉邊有花取之塊形既破即取入水令咄塊形既破即取入水令咄塊形既破即取入水令咄

氣取嘗者無塩氣即止欲任用即春篩若作本體淹用也與大豆汁平升法而和合云也

右二方唐僧長秀所秘藏也以方造進公宗之

沈香其香甚好天曆十一年三月廿五日傳承之

耳

丁子

(ウ)

①

雷公炮炙論云丁子有雄雌顆顆小雌顆顆大似椶棗核方中多使雌力大故膏煎中用雄若欲使雄

須去丁蓋子ハハハ發人皆癩也

②

試丁子法以齒嚙有音辛物是為上不然者朽古者也

丁子乃えたいとわるしおほきにてしと

やかなるをよきにすふるくなりたるもし

(69才)

(68ウ)

(68才)

薯汁搗絞取之

鐵醬以塩盛釜若鼎埋土其上口火若埋形竈

下欲常燻也經一計歲取出見之皆悉朽損如

塊形脆破即取入火会吐塩氣如數度常擗水

令告塩氣取嘗者無塩氣即上欲任用即春

篩若作本體淹用也與大豆汁平升法而和合之

右二方大唐僧長秀所秘藏可獻上於聖上以此方造

進公家号借沈香其香已好天曆十一年三月廿五日

傳承之耳

(本 沈香の条

p28 33)

(ウ)

①

雷公炮炙論云丁子有雄雌顆顆小雌顆顆大似椶棗核方中多使雌力大故膏煎中用雄若使雄須

去丁蓋子ハハハ發人皆癩也(本 丁子香の条

p53 54)

試丁子法

以齒ハシ試有音辛物是為上不然者是朽古者也

(本 丁子香の条

p55)

(エ) ① 内典云梅檀白謂之白檀
 白檀はかたくてきなるをよきにする
 わかき木ハやはらかにてかろくそある
 うはかは少しけつりすて、つくへし

白檀
 ① 内典云梅檀白謂之白檀

はにてしるつかひたるはかるくて口にくゞみみるにからくていとかうはし花といひてまるなるものとくきとてくろみたるものとハよきなりしるミてもものすちのやうなる物ましりたるわろしえりすつへきなりこれもやをらつきてまつふるはれたらむをよきにすへしよきハさひたるやうにそある

(オ) ④ 一名沈油
 ③ 一名滴乳香 一名膠香 一名白乳香 一名雲華
 其形如白膠出天竺單于二國 一名乳頭香
 ② 本草云微温主療風水毒腫去惡氣伏尸
 ① 薰陸 一名膠香 一名白乳香 一名乳頭香 出鑿象方

如本

已上三名出

(70ウ)

(70オ)

(69ウ)

(オ) 薰陸香 梵云 君杜膏 (ここに梵字)
 本草云微温悉療風水毒腫去惡氣伏尸其形如白膠出天竺干二國一名乳頭香一名滴乳香一名膠香一名白乳香一名雲華一名沈油 (本 薰陸香の条)

(エ) ① 法華玄贊第二云：白謂白檀之属 (本 白檀香の条)

p42

p35

(カ)

くろくはにたるものおほかりよくみしるへし
わろきは乳頭といひてしろきものまし
りたるよきはひかりきハみてらふいろに
そあるくろミたるものやいしやなとまし
りたるをえりてすてゝつくへし
麝香

雷公炮炙論云麝香多有偽者不如用
其香有三等一者名遺香是鹿子臍閉
滴タリ其鹿自於石上用蹄尖彈ヲ落
者落處一黒草木不生並ヒ煇ヒ黃人若
得此香價與明珠同也二名臍香採得
其堪用三名心結香被大獸驚心破了
因茲狂走雜諸群中遂乱投水被人收
得擊破見心ツムサキ流在牌上結作一大乾血塊可隣
山澗早聞之香是香中之次也凡使麝香並
用當子日開之不用子ムコロニ丁カニ細敷苦納研用云々

さかうハくしりたるにはひしれたるやう
なるハわろしくしりあつめてかはや毛など
のましりたるをよくえりて茶碗のつき
なとにいれていしのすりこきなくハやな

(71 才)

(71 ㊦)

(72 才)

(カ)

炮炙論云麝香多有偽者不如用其香有三等一
者名遺香是鹿子臍閉滴其鹿自於石上用蹄尖彈
臍落者落處一里草木不生並ヒ煇ヒ黃人若收得此價
與明珠同也二名臍香採得其堪用三名心結香被大
獸心驚破了因茲狂走雜諸群中遂乱投水被人收
得擊破見心ツムサキ流在牌上結作大乾血塊丁隣山澗早
聞之香是香中之次イナシ也凡使麝香並用子日開之不用
苦細研用

(本 麝香の条

きのきのかれたるしてすりくたきてふ
るひて香ともみなあはせふるひてうへに
かきまする人もありされともこともものとも
あまつらにひちくりてすこしつきて

のちにちいさくひききりつゝまさなきた
とひなれ^{とも}もちるとてくふものゝあれに
さすやうにさしあつめておしまろかして
のちにつきあはすへしいたくつきあらか

すれはかうすといふ香なきさかうをは

水にひたして久しからすしてくちな

はのかは^皮をもちてまきつゝみてきよき

つちをはらひてさかうをおきてそのうへに

ちいさき茶碗をうつふせでところくくに

火をきてひさしからすしてとりすてゝ

すなはちあたゝかなるわたにつゝミてこれを

おさむれはかをます

ねちけたれ共くろほうはさかういれすゝめる

いとよいし侍従はよしとておほくいれたるい

れたるハなかくあし

麿糖香

(73オ)

(72ウ)

(キ)

① 本草云微温其樹似橘矣煎枝葉為香
 似糖而黑去伏尸病出交廣以南又出晉
 安岑州真淳者難得多以其皮及拓ト
 矣唯輕者為佳

せむたうはかたいしほのいろにてそのしほの
 かはのやうにてうすひらにそあるまつ
 煎しとりてつくこの香はなはたかき
 かたし此香のなかにあかきけあるは
 かうはしいろくろきハ劣なり

(74才)

(ク)

鬱金
 ① 嶺南者有實似山薑シヤン液不堪シヤン嗽之
 有青鬱金②又有熟鬱金者其中有以五種香
 芳造之又只以一種造之

この香はさまざまあり熟鬱金といふハむ
 らさきのりのくちたるやうにていとかうはし
 きなる鬱金はまるたちてするのみのい
 ろなり 青鬱金といふハはしかみをほし
 たるさまにてわりたればきくちはの
 ふかくつしみたるやうにそある

(74ウ)

蘇合香

(73ウ)

(キ)

本草云微温其樹似橘矣煎枝葉為香似糖而
 異去伏尸病出交廣以南又出晉安岑州真淳者難
 得多以其皮及拓ト矣唯輕者為佳

(本 摩糖香の条 p10)

(ク)

① 唐本注云：嶺南者有實似小豆シヤン液不堪シヤン嗽之

(本 鬱金香の条 p12)

② 又有青鬱金黃鬱金

(本 鬱金香の条 p17)

③ 造熟鬱金法大唐僧長秀所勸進也

黃鬱金小十兩 麝香小七兩 沈香小七兩

紫檀小十兩四分 唐青木小七兩

右五種物搗篩和合暖納之瑠璃壺

(本 鬱金香の条 p17)

(ケ) (以下 順序を変えず本文のままに引用)

② 又云此香從西域及崑崙來紫赤色重實如燒之

(7)

① 證類云：梁書云：中天竺國出蘇合香，是諸香汁煎之，非自然物也。

② 又云：此香從西域及崑崙來，紫赤色重實。

如燒之灰白者，好云：師子矢者，此是胡人誰

言：拾遺云：獅子矢赤黑色，燒之去鬼氣，蘇合

③ 色黃白二物相似而不同，是西國草木皮汁。

所為胡人將來欲貴之，饒其名耳云々。

④ 疑云：似玉壘丸，年久者此色有赤脉，胡人

遂此法，不言其術也云々。

(コ)

① 其躰種々也，或如或本列甘松或本無此字，又如蒿筋，又苗豆。

② 出和香方：本草云：味甘，温，无毒，主惡氣，卒

心腹脹滿，令人身香，叢生，葉細，出姑臧。

④ 云那羅馱。

このかうはねをゑりすててつちなとましりたるをハとりすて、やをらつくへしあかみてすきたるハわかくさはしろくてかはらけたちたるそよかりける。

雞香

(75才)

灰白者好云：師子矢者，此是胡人誰言：

③ 拾遺云：獅子矢赤黑色，燒之去鬼氣，蘇合色黃白二

物相似而不同，是西國草木皮汁，所為胡人將來欲貴

之饒其名耳云々。

：(一行)：

④ 疑云：似玉壘丸，年久者此色有赤脉，胡人遂此

法，不言其術也云々。

：(一行)：

① 證類云：梁書云：中天竺國出蘇合香，是諸香汁煎之，非

自然物也。

(本 蘇合香の条

p. 8, 9)

(75り)

④ (コ) 梵云那羅馱。

② 重定本草第九云：甘松香味甘，温，無毒，主惡

氣，卒心腹脹滿，兼用合諸香，叢生，葉細。

③ 廣誌云：甘松香出姑臧。

① 或云：甘躰種々，或如耗菴安草，又如蒿筋，又如

田豆，出和香方。

(本 甘松香の条

pl. 68)

(76才)

<p>(七)</p> <p>① 一名白膠香 五月斫樹為坎 十一月採脂</p> <p>② 楓香脂</p> <p>にそあり</p>	<p>(ス)</p> <p>① 本草云其味辛苦平無毒主心腹惡氣</p> <p>② 饗疑云安息香堅於石蜜者今案有云 悉香者是今安息香象耳</p> <p>此香はたきものゝかれはみてからのやう</p>	<p>(シ)</p> <p>① 南方草木物状曰六月採曝之及芬芳</p> <p>② 可以着衣服中 長秀曰八月採灑酒于納</p> <p>③ 亦早且採之乍露于二朝入帟囊不使風氣通</p> <p>安息</p>	<p>(サ)</p> <p>① 證類云令人身香療齟齬煮汁含之</p> <p>② 本草云其樹葉似栗花如梅花子似棗核此雌樹也雄樹者花不實採花釀之以成香出崑崙及交愛以南</p> <p>このかうは丁子のふしなりからあはといふものゝやうなり</p> <p>藿香</p>
---	---	--	---

(77ウ)

(77オ)

(76ウ)

<p>(七)</p> <p>① 本草云楓香：一名白膠香： (本 楓桂の条)</p> <p>② 唐本注云：五月斫樹為坎十一月採脂 (本 楓香の条)</p> <p>p102p100</p>	<p>(ス)</p> <p>① 本草云其味辛苦平無毒主心腹惡氣： (本 安息香の条)</p> <p>② 本草饗疑云安息香堅於石蜜者：一名安悉香同也 (本 安息香の条)</p> <p>p56</p>	<p>(シ)</p> <p>① 南方草木状云藿香味辛搽生吏氏自種之五六月採暴之乃芬芳： (本 藿香の条)</p> <p>南州異物志曰藿香出典遜海邊國也屬扶南香</p> <p>形如都梁可以着衣服中 (本 藿香の条)</p> <p>p225</p>	<p>(サ)</p> <p>② 本草図經曰鷄舌香出崑崙及交愛以南枝樹葉及枝似並栗花如梅花子似棗核此雌者也雄者</p> <p>著花不實採花釀之以成香： (本 鷄舌香の条)</p> <p>p46</p>
--	--	--	---

(7)	(7)	(7)	(7)	(7)
<p>① 本草云其味辛温无毒 可作膏藥面脂潤澤顏色 一名蒼<small>蒼髮</small>一名莞一名苻離一名沢</p>	<p>白芷香</p> <p>② 若菊其實黃黑</p>	<p>青木香</p> <p>① 本草云味辛温无毒 葉似羊蹄而長大花</p>	<p>龍腦</p> <p>① 本草云其味辛苦微寒出波津國形似白松脂作杉木氣明淨者善久經風日或如雀矢者不佳云合粳灰相思子貯之不耗云々</p>	<p>艾納</p> <p>① 本草云味甘温無毒去惡氣殺蟲</p> <p>② 松木皮上綠衣名艾納合香中肯之取之</p> <p>③ 其形如太糸長四五寸許如蘭花干枯之物黏着其筋上方着松樹之蔦也今檢其說相似之云々</p>
			<p>甲香</p> <p>一名流螺南州異物志云可合衆香燒之便益芳獨燒之則臭</p>	

(7)	(7)	(7)	(7)	(7)	(7)
<p>① 本草云白芷味辛温無毒：可作膏藥面脂潤澤顏色 一名芳</p>	<p>② 唐隱居云：葉似羊蹄而長大花如菊實黃黑： (本青木香の条 p70)</p>	<p>① 本草云木香辛無毒： (本青木香の条 p67)</p>	<p>佳云糯<small>糯</small>一作米炭相思子貯之不耗 (本龍腦香の条 p59、60)</p>	<p>① 本草云其味辛苦微寒：出波津國形似白松脂作杉木氣明淨者善久經風日或如雀屎者不</p>	<p>① 重定本草第九云艾納香味甘温無毒去惡氣殺蟲： 廣誌曰： 又有松樹皮綠衣亦名艾納可以和合諸香： 或云其形如太糸長四五寸許如蘭花干杜之物黏着其筋上方着松樹之蔦也今檢其說相似之云々</p>
				<p>① 南州異物志曰甲香：掩雜衆香燒之便益<small>芳</small>獨燒則一名流螺 (末甲香の条 p198、199)</p>	<p>(本艾納香の条 p165)</p>

<p>(ネ)</p> <p>① 梵云憂沙慕薩多有出西域注諸毛髮者也 ② 炮炙論云於石臼木杵擣勿令犯鐵用之 たのかうふしははまふてといふ物のや</p>	<p>(ヌ)</p> <p>① 本草云荳蔻味辛温无毒去口臭氣 出南海 ② 一名龍眼 一名益智 一名薊綠 香附子</p>	<p>(ニ)</p> <p>② 一名牡蘭皮似桂而香又生太山 ① 本草云其味苦寒无毒去臭氣 一名林蘭 荳蔻香</p>	<p>(ナ)</p> <p>④ 葉如梯葉中有縱文三通云々 ③ 或云箇桂一名箇薰一名箇香一名藥使者 其 ① 陶云葉似栢 非也其色紫色或謂之紫桂 桂心香</p>	<p>(ト)</p> <p>② 莖方也 ① 證類云味甘平无毒主惡氣心腹痛滿令體 香和諸香作陽丸用之得酒良 葉兩々相對 零陵香</p>	<p>③ 根曝乾 ② 芳一名芳香 生河東川谷可澤二八月採 零陵香</p>
--	---	---	--	--	--

(80才)

(79ウ)

(79カ)

<p>② 一名龍眼 一名益智 一名薊綠(以上 末荳蔻香 p170)</p>	<p>(ネ)</p> <p>① 本草云完荳蔻味辛温无毒 去口臭氣</p>	<p>(ヌ)</p> <p>② ……去臭氣皮似桂而香……又生太山……(以上 本木蘭香 p122)</p>	<p>① 本草云其味苦寒无毒</p> <p>② 一名。蘭 一名杜蘭</p>	<p>(ニ)</p> <p>④ 又云箇桂葉似栢葉中縱文三道……(本桂心香 p97)</p> <p>③ 或云箇桂一名箇薰一名箇香一名藥使者……(本桂心香 p97)</p>	<p>④ 葉如梯葉中有縱文三通云々</p> <p>③ 陶云小桂或言葉小者陶引經云似栢葉……(本桂心香 p93)</p> <p>① 經云桂葉如栢葉……(本桂心香 p92)</p>	<p>(ナ)</p> <p>② 凶經曰……兩兩相對莖方……(本零陵香 p85)</p> <p>① 重定本草第九云零陵香味甘平無毒主惡氣疰心腹痛滿下氣冷體香和諸香作陽丸用之得酒良……(本零陵香 p84)</p>	<p>(ト)</p> <p>② 芳一名芳香 生河東川谷可澤二八月採 根曝乾 零陵香</p>	<p>③ 一名薊切 一名莞 一名苻 離 一名沢芬……生河東川谷 下澤二月八月採根曝乾……(本白芷香の条 p76、77)</p>
---------------------------------------	--------------------------------------	--	---------------------------------------	--	--	--	---	---

うにてちひさし甘松のふしなり

茅香

(/)

①

本草云茅香花味苦温無毒止嘔吐ムカク 六月
採唐人說魏論之フモト雪山之砌多生此草

②

所謂吉祥草忍辱草芳是也當朝雖
有此草其氣不似被香者也

白朮香

(ハ)

本草云其味苦甘温無毒主風寒温痺
除熱消食二三八九月採根曝乾サラシホス

(80ウ)

(ネ)

① 梵云白卑沙慕薩多鼻イ

(末) 香附子

P186

生諸毛髮有毒出西域

(末) 香附子

P186

(/)

② 炮炙論云：於石白木杵擣勿令犯鐵用也

(末) 香附子

P186

(/)

① 本草云茅香花味苦温無毒：止嘔吐ムカク：六月採(末)茅香

p216
217

(ハ)

② 唐人說魏論之フモト雪山之巔多生此草所謂吉祥草忍辱等草是也當朝雖有此草其氣不似被香者也(末)茅香

p220

(ハ)

本草云木味苦甘温無毒主イ風寒温濕イ痺：除熱消食：二月三月

(末) 白朮香

八月九月採根曝乾

(末) 白朮香

p241

薰集類抄の同文一覧 三 本草書

凡例

- 一 「本草」の引用については総じて『新修本草』に於ける同文、類文所出箇所を示すが、『香字抄』『香要抄』で特定の書名が記されている場合、参考のためその書名を丸括弧内に挙げた。
- 一 異なる見られる箇所については、本文の右側に算用数字で通し番号を示し、傍線を引いた。
- 一 同文中、或いは同文に続けて『薰集類抄』に無い記事が見られる場合、「中略」「下略」に代えて「…」と記した。

参考図書

- 『香字抄』 続群書類従本（巻第八五四所収）
- 『香要抄』 天理図書館善本叢書本
- 『證類本草』 四庫全書本（子部医家類 七四〇―一）
- 『新修本草』 中国古典医学叢刊本
- 『梁書』 四庫全書本（史部正史類 二六〇―一八）

諸香

沈

(7)

① 證類云置水中則沈故曰沈香次不沈者曰

本草也

② 淺香 似雞骨為雞骨香似馬蹄¹為馬蹄

③ 香枝條細實為青桂云々

或書曰此木出日南欲取當先斫樹著地積外

皮自朽爛其心至堅者置水則沈名沈香其

次在心皮之間不甚堅之置水不沈不浮與水

平者名曰淺香其最小淺白者曰槩香葉

似冬青樹形崇竦

ちむのかうハしきひとつはハちすのかす二ハ

きくのはなのかするゑくけれとよしう

しの矢のかするいとあしむけのをとりは

わらあくたのかすひとつ沈にもかたく

かうはしきくさきかたあるをよくとりま

はしつゝ火にたきてみてよきかたをわり

をれ沈のわるきハいとあしきなりくち

(65才)

(64ウ)

(7)

① 置水中則沈故名曰沈香次不沈者曰淺香…

〔證類本草〕沈の条「通典」引用 p616 下段〜 p617 上段

② 似雞骨為雞骨香似馬蹄者為馬蹄香…枝條細實者為青桂…

(同右 沈の条「海藥」引用 p616 下段)

(4)

たるところなどハたけすてゝつくへし
沈ハくろくおもきをよきにす又くろくおも
けれともわろきありすこしたきて心みる

へしいるへきかすにいま一二両許くはへ
てつくへしかはのやうなるもの又むしの

すのやうにてちりはみたるものまし
りたるをよくゑりてかたなしてこまかに

わりくたきてつくへしいとよきはしる
めきいミあひてよくもつかれすさらは

わるき沈をすこしくはへてつくへし
かなうすにふたをおほひてやをらつく

へしふるふにもやをらふるふへしすこ
しつゝふるひてあまたたひつくへしま

つふるひたるをよきにす

造沈香法

先取香稻米斗以六月上午日淨洗合炊入女

菊六升和合之入水六升着一新瓶中口封

閑遇三其限液取其汁醉也

以粟二升熬合黑色
生絹裹淨醉中煖而
用之

即取入又作如前法也必至三度可用之然後

(66ウ)

(66オ)

(65ウ)

取青桐木沈削去泥土令淨隨多少着其酢

封閉瓶口埋土中不可令知每其日可換至

三度其後出青桐曝干了者亦別取新瓶

隨木多少蜂蜜淹瓶中隨木厚薄可用

蜜成三周或七周必成上品沈香也

生師口傳

香稻

和名 香乃

女菊

和名加 錢多知

過三其限

過三 手也

放栗

用伏 久栗 淹栗 无出 期 必至三度 作酢以初酢汁作之又以其 汁重作如此至三度之後用之

青桐木

葉體如青桐但葉邊花形深入耳不花不實不高大但 經橫延多枝條遠至以朽老枯槁者為好其朽爛之中

心至堅者及節目 黑堅者為尤佳

埋土中

過瓶口上丈 七八分許

至期日

其期也

椴汁至三度

九十日一度 椴汁如此三度

經用出木

以紙數籠盛青桐又 以紙張籠上之塗干

隨木厚薄

用蜜欲 過多耳

不可令知

不令人知 其處所

又法

楓香木 一斤

沈香 一兩

白檀 一兩

藿香 一兩

梨蘆根 一兩

香稻米酢 三升

薯汁 二升一合

カナクソノ出水也

鐵醬

一升五合已上用藥升但 大豆汁濃煮加淹之

右一瓶淨淹楓香木切以乍七種其入之口封閉

土中埋之百日以來流水五升煎減四升入酢少

(67ウ)

(67才)

(7)

丁子

>

又道入一瓶以土封閉經三七日取出曝干而後
隨木厚薄蜜中淹之若日取出曝三周若五
周若七周即成上品沈香也

三七日廿一日曝干同上蜜中淹欲蜜多過楓香木

葉體等例但類葉邊有花秋薯汁搗絞鐵醬以塩盛釜若鼎埋
土中其上煨火若

埋竈下欲常熱也經一計歲取出見之皆悉朽損如
塊形沉破即取入水令啞塩氣如此數度常水令告塩

氣取嘗者無塩氣即止欲任用即春篩若乍本
體淹用也與大豆汁平升法而和合云也

右二方唐僧長秀所秘藏也以方造進公宗之

沈香其香甚好天曆十一年三月廿五日傳承之

耳

①

雷公炮炙論云丁子有雄雌雄顆小雌顆大似櫻棗

核方中多使雌力大故膏煎中用雄若欲使雄

須去丁蓋子々々々發人皆靡也

②

試丁子法以齒嚼有音辛物是為上不然者

朽古者也

(69 才)

(68 才)

(68 才)

① (7)

雷公云

子發人
背癩也

凡使有雄雌雄顆小雌顆大似櫻棗核方中多
使雌力大膏煎中用雌若欲使雄須去丁蓋乳

『證類本草』卷十二 丁子の条

(オ)

- ④ 一名滴乳香 一名膠香 一名白乳香 一名雲華
- ③ 其形如白膠出天竺罽二國 一名乳頭香
- ② 本草云微温主療風水毒腫去惡氣伏尸
- ① 薰陸 一名膠香 一名白乳香 一名乳頭香 出鑿象方

うはかは少しけつりすて、つくへし
 わかき木ハやはらかにてかるくそある
 白檀はかたくてきなるをよきにす

(エ)

内典云梅檀白謂之白檀

白檀

丁子乃えたいとわるしおほきにてしと
 やかなるをよきにすふるくなりたるもし
 はにてしるつかひたるはかるくて口に
 くゞミみるにからくていとかうはし花と
 いひてまるなるものとくきとてくるみ
 たるものとハよきなりしろミてものゝ
 すちのやうなる物ましりたるわろし
 えりすつへきなりこれもやをらつきて
 まつふるはれたらむをよきにすへし
 よきハさひたるやうにそある

(70ウ)

(70オ)

(69ウ)

(オ)

薰陸香微温療風水毒腫去惡氣伏尸
 ②
 〔證類本草〕卷十二 薰陸香の条
 沈香薰陸香鷄舌香薝香詹糖香楓香並微温悉療風水毒腫
 ②
 p617

一名沈油

如本
くろくはにたるものおほかりよくみしるへし
わるきは乳頭といひてしろきものまし
りたるよきはひかりきハみてらふいろに
そあるくろミたるものやいしやなとまし
りたるをえりてすてつくへし

麝香

雷公炮炙論云麝香多有偽者不如用

其香有三等一者名遺香是產子臍閉

滴タリ其產自於石上用蹄尖彈脛ヲ落

者落處一黑草木不生並焦黃人若

得此香價與明珠同也二名臍香採得

其堪用三名心結香被大獸驚心破了

因茲狂走雜諸群中遂乱投水被人收

得ツムサキ擊破見心ツムサキ流在臍上結作一大乾血塊可降

山潤早聞之香是香中之次也凡使麝香並

用當子日開之不用子ムコロニ丁カニ細敷苦納研用云く

さかうハくしりたるにはひしれたるやう

なるハわろしくしりあつめてかはや毛など

(71り)

(71才)

去悪氣伏尸…薰陸香形似白膠出天竺單二国…
③

〔新修本草〕沈、薰陸など六種の香の条

p108

109

雷公云

凡有偽者不如不用其香有三等一者名

遺香是臍子臍閉滴其產自於石上用蹄尖彈

臍落處一里草木不生並焦黃人若取得此香價與明

珠同也二名臍香採得甚堪用三名心結香被大獸驚

心破了因茲狂走雜諸羣中遂乱投水被人取得擊破

見心流在臍上結作一人乾血塊可隔山潤早聞之香

是香中之次也凡使麝香並用子

日開之不用若細研篩用之也

〔證類本草〕卷十六 麝香の条

p751

のましりたるをよくえりて茶碗のつき
なとにいでていしのすりこきなくハやな
きのきのかれたるしてすりくたきてふ

(72 才)

るひて香ともみなあはせふるひてうへに
かきまする人もありされともことものとも
あまつらにひちくりてすこしつきて

のちにもいさくひきまりつゝまさなきた
とひなれ^{とも}もちゑとてくふものゝあれに

さすやうにさしあつめておしまろかして

のちにつきあはすへしいたくつきあらか

すれはかうすといふ香なきさかうをは

水にひたして久しからすしてくちな

はのかは^皮をもちてまきつゝみてきよき

つちをはらひてさかうをおきてそのうへに

ちいさき茶碗をうつふせてところゝくに

火をきてひさしからすしてとりすてゝ

すなはちあたゝかなるわたにつゝミてこれを

おさむれはかをます

(73 才)

ねちけたれ共くろほうはさかういれすゝめる
いとよし侍従はよしとておほくいれたるい

(72 才)

れたるハなかくあし

麝糖香

(キ)

本草云微温其樹似橘矣煎枝葉為香
似糖而黒去伏尸病出交廣以南又出晉
安岑州真淳者難得多以其皮及拓た也
矣唯輕者為佳

(73ウ)

せむたうはかたいしほのいろにてそのしほの

かはのやうにてうすひらにそあるまつ

煎しとりてつくこの香はなハたかき

かたし此香のなかにあかきけあるは

かうはしいろくろきハ劣なり

鬱金

(ク)

嶺南者有實似山豆蔻不堪嗽之有青
鬱金又有熟鬱金者其中有以五種香
芳造之又只以一種造之

(74オ)

この香はさまざまあり熟鬱金といふハむ

らさきのりのくちたるやうにていとかうはし

きなる鬱金はまるたちてするのみのい

るなり 青鬱金といふハはしかみをほし

たるさまにてわりたればきくちはの

(74ウ)

(キ)

詹糖香微温…詹糖出晉安岑州上真淳者難得多以其皮及蠹
虫…唐本注云詹糖樹似橘煎枝為香似沙糖而黒出交廣以南
…生晉安

〔證類本草〕卷十二 詹糖香の条

p619

沈香薰陸香鷄舌香た詹糖香楓香並微温悉療風…詹糖出
晉安岑州上真淳沢者難得多以其皮及拓虫矢雜之唯輕者為
す佳…詹糖樹似橘煎枝葉為香似糖而黒出交廣以南…

〔新修本草〕詹糖香の条

p109、110

(ク)

唐本注云…嶺南者有實似小豆蔻不堪用…

〔證類本草〕卷九 鬱金の条

p430

ふかくつしみたるやうにそある

蘇合香

(ケ)

① 證類云梁書云中天竺國出蘇合香是諸香汁煎之非自然物也

② 又云此香從西域及崑崙來紫赤色重實

如燒之灰白者好云師子矢者此是胡人誰

言拾遺云獅子矢赤黑色燒之去鬼氣蘇合

③ 色黃白二物相似而不同是西國草木皮汁

所爲胡人將來欲貴之饒其名耳云々從省

④ 疑云似玉壘丸年久者此色有赤脉胡人

遂此法不言其術也云々

甘松

(コ)

① 其躰種々也或本刈或如茺安草又如菁筋又苗豆或本無此字

出和香方本草云味甘温無毒主惡氣卒

② 心腹脹滿令人身香叢生葉細出姑臧梵

③ 云那羅馱

このかうはねをゑりすててつちなとましりたるをハとりすてゝやをらつくへしあかみてすきたるハわかくさはしろくてかは

(75才)

(ケ) ① 梁書云天竺出蘇合香是諸香汁煎之非自然一物也

〔證類本草〕卷十二 蘇合香の条

p616

② 唐本注云此香從西域及崑崙來紫赤色：重如石燒之灰白者好云是獅子屎此是胡人誰言：

〔證類本草〕卷十二 蘇合香の条

p620

蘇經云此香從西域及崑崙來紫色：堅實：如石燒之灰白者好：

〔證類本草〕卷十二 沈香の条

p616

(コ) ③ 陳藏器云按獅子屎赤黑色燒之去鬼氣：蘇合香色黃色二物相似而不同人云獅子屎是西國草木皮汁所爲胡人將來欲人貴之饒其名爾

〔證類本草〕卷十二 蘇合香の条

p620

(ケ) ② 甘松香味甘温無毒主惡氣卒心腹脹滿：叢生葉細：出姑臧

〔證類本草〕卷九 甘松の条

p450

(ケ) ① 藥性論云：令人身香：

〔證類本草〕卷十二 鷄舌香の条

p617

外臺秘要

療齲齒方煮鷄舌香汁含之差

(76才)

(75ウ)

らけたちたるそよかりける

鶏香

(サ)

- ① 證類云令人身香療齟齬煮汁含之
- ② 本草云其樹葉似栗花如梅花子似棗

核此雌樹也雄樹者花不實採花釀之以成香出崑崙及交愛以南

このかうは丁子のふしなりからあはといふものゝやうなり

菴香

(シ)

- ① 南方草木物状曰六月採曝之及芬芳
- ② 可以着衣服中長秀曰八月採灑酒于納
- ③ 亦早且採之乍露于二朝入昏爰不使風

氣通

安息

(ス)

- ① 本草云其味辛苦平無毒主心腹惡氣
- ② 證類云安息香堅於石蜜者今案有云

悉香者是今安息香象耳

此香はたきものゝかれはみてからのやうにそあり

楓香脂

(76ウ)

(77カ)

(77ウ)

〔證類本草〕卷十二 鶏舌香の条 p617

② 鶏舌香樹葉及皮並似栗花如梅花子似束核此雌樹也…雄樹着花不實核花釀云以成香出崑崙及交愛以南…

〔新修本草〕沈香の条 鶏舌香 p109、110

圖經云：廣志云：鶏舌香出崑崙及交愛樹以南枝葉及皮並似栗花如梅花子似棗核此雄者也…雄者著花不實採花釀之以成香…

〔證類本草〕卷十二 鶏舌香の条 p616

唐本注云鶏舌樹葉及皮並似栗花如梅花子似棗核此雄樹也…雄樹雖花不實採花釀之以成香出崑崙及交愛…

〔證類本草〕卷十二 鶏舌香の条 p616

(シ) ※①『南方草木状』に無し。『香要抄』等の引用に在り。

(ス)

① 安息香味辛苦平無毒主心腹惡氣…

〔證類本草〕卷十三 安息香の条 p668

安息香味辛苦平無毒主心腹惡氣

〔新修本草〕安息香の条 p145

<p>(7)</p> <p>① 本草云其味辛温无毒 可作膏藥面脂潤</p>	<p>(7)</p> <p>② 白芷香</p> <p>① 本草云味辛温无毒 葉似羊蹄而長大花 若菊其實黃黑</p>	<p>(7)</p> <p>青木香</p> <p>松脂作杉木氣明淨者善久經風日或如雀矢者不成云合粳灰相思子貯之不耗云々</p>	<p>(7)</p> <p>龍腦</p> <p>一名流螺南州異物志云可合衆香燒之 便益芳獨燒之則臭</p>	<p>(7)</p> <p>甲香</p> <p>② 其形如太糸長四五寸許如蘭花干枯之物 黏着其筋上方着松樹之蔦也今捨其 說相似之云々</p> <p>① 本草云味甘温無毒去惡氣殺蟲 松木皮上綠衣名艾納合香中消之取之</p>	<p>(7)</p> <p>艾納</p> <p>① 一名白膠香 五月斫樹為坎 ② 十一月採脂</p>
---------------------------------------	---	--	---	--	--

(78ウ)

① (7) 木香味辛温無毒…『證類本草』卷六 青木香の条 p259

(78オ)

(7) 龍腦香及膏香味辛苦微寒…出波律國形似白松脂作杉木氣明淨者善久經風日或如雀屎者不佳云合糲一作粳米炭相思子貯之則不耗… 『證類本草』卷十三 龍腦香の条 p644

※『新修本草』も同文。

(7) 艾納香味甘温無毒去惡氣殺蟲…松樹皮綠衣亦名艾納可以 和合諸香燒之…『證類本草』卷九 艾納香の条 p449、450

(7) 楓香脂…一名白膠香… 『新修本草』楓香の条 p99

① 楓香脂… 『證類本草』卷十一 楓香の条 p609

② 南方草木状曰…楓實…其脂為白膠香五月斫為坎十一月採之… 『證類本草』卷十二 楓香の条 p609

<p>(ネ)</p> <p>① 梵云憂沙慕薩多有出西域主諸毛髮者也 ② 炮炙論云於石臼木杵擣勿令犯鐵用之</p>	<p>(ヌ)</p> <p>① 本草云豆蔻蔻味辛温無毒去口臭氣 ② 出南海一名龍眼一名益智一名縮綠</p>	<p>(ニ)</p> <p>① 本草云其味苦寒無毒去臭氣 一名林蘭 ② 一名牡蘭皮似桂而香又生太山</p>	<p>(ナ)</p> <p>① 陶云葉似栢<small>本草也</small>非也其色紫色或謂之紫桂 ② 或云箇桂一名箇薰一名箇香一名藥使者 ③ 葉如梯葉中有縱文三通云々</p>	<p>(ノ)</p> <p>① 證類云味甘平無毒主惡氣心腹痛滿令體香和諸香作陽丸用之得酒良 ② 莖方也</p>	<p>(ハ)</p> <p>① 澤顏色 一名紫<small>許駟</small>一名芫一名苻離一名沢 ② 芳一名芳香 生河東川谷可澤二八月採 ③ 根曝乾</p>
--	---	---	---	---	--

(80 才)

(79 才)

(79 才)

<p>(ヌ)</p> <p>① 豆蔻味辛温無毒去口臭氣出南海 〔證類本草〕卷二十三 荳蔻の条 p935</p>	<p>(ニ)</p> <p>① 木蘭味苦寒無毒去臭氣一名林蘭一名牡蘭皮似桂而香生零陵山谷及泰山 〔證類本草〕卷十二 木蘭の条 p611</p> <p>※『新修本草』に同文有り。</p>	<p>(ナ)</p> <p>① 陶引經云似栢葉 〔證類本草〕卷九 零陵香の条 p437</p> <p>② 唐本注箇桂葉似柿葉中有縱文三道 〔證類本草〕卷十二 桂香の条 p437</p>	<p>(ノ)</p> <p>① 零陵香味甘平無毒主惡氣心腹痛滿令體香和諸香作陽丸用之得酒良 〔證類本草〕卷九 零陵香の条 p437</p> <p>② 圖經曰葉如麻兩兩相對莖方 〔證類本草〕卷九 零陵香の条 p437</p>	<p>(ハ)</p> <p>① 澤二月八月採根曝乾 〔證類本草〕卷八 白芷の条 p370</p>	<p>(ヘ)</p> <p>① 白芷味辛温無毒可作面脂潤澤顏色一名芳香一名白芷一名芫<small>許駟切</small>一名苻離一名沢芳生河東川谷下 〔證類本草〕卷六 青木香の条 p259</p>	<p>② 陶隱居云唐本注云葉似羊蹄而長大花如菊花其實黃黑 〔證類本草〕卷六 青木香の条 p259</p>
---	--	--	---	--	--	--

たゝのかうふしははまふてといふ物のや
うにてちひさし甘松のふしなり

茅香

(ノ)

①

本草云茅香花味苦温無毒ムカツク嘔吐

六月

採唐人說魂嶺之フモト雪山之砌多生此草

所謂吉祥草忍辱草芳是也當朝雖

有此草其氣不似被香者也

白朮香

(ハ)

本草云其味苦甘温無毒主風寒濕痺

除熱消食二三八九月採根サラシホス曝乾

(80ウ)

(ノ) 茅香^①花味苦温無毒…止嘔吐…

〔證類本草〕卷九 茅香の条

p456

(ハ) 朮味苦甘温無毒主風寒濕痺…除熱消食…二月三月八月九

月採根暴乾

〔證類本草〕卷六 朮香の条

p238

源氏物語古注積書と類聚雜要抄

所引の薰物資料と薰集類抄

凡例

一、天理図書館善本叢書本『河海抄』に見える薰物資料、薰物についての注釈を基準とし、源氏物語大成本『原中最秘抄』、京都大学国語国文資料叢書『紫明抄』、川本重雄、小泉和子氏『類聚雜要抄指図巻』並びに西園寺文庫本『薰集類抄』のテキストと対応、重複する部分に通し番号を附した。

一、底本の誤脱、誤写と見受けられる箇所については原本のまま記し、他本の本文を脚注に示した。

一、歴史的仮名遣いに一致しない箇所、各種記号や符号の類も、底本のままに記した。

一、異体字は、原則として通行の字体に改めた。また、ある語句に用いる漢字について、字体の統一が成されていない場合は、最も通字に近いものに統一した。

一、通し番号は主として算用数字を用い、一つの重複箇所にもその他の薰物資料との関連も認められる場合はアルファベットを用いた。

末摘花

えひのかいとなつかしく

衣¹被香 又¹毫衣被^{ヨロコソツトム}毫衣

東宮切韻

(209 頁)

蓬生

むかしのくのえかう

薰衣香

親行云為家卿申されしは源氏物語にはくんゑかうとのゐ

物の袋為殊難義敷全分不覚悟云々

薰衣香は黒方の一名ともいへり又⁴は薰物の惣名也云々

然而各別方在之注梅枝卷

(401 頁)

絵合

くさくの御たき物ともくんえかう又なきさまに

水原抄云くさくのたきものとは沈丁子等一種つゝにて未合を

為名敷 百歩外とは百歩を指敷 一步は六尺也 百歩為畝 見論語 然

百歩は六十丈也

案⁶之くさくとは種々の薰物也合香方に梅花^{○・A} 荷葉^{○・B} 菊花^{○・C}

落葉^{○・D} 黒方^{○・E} 侍従^{○・F} 供養香^{○・G} 薰衣香^{○・H} 補闕方^{○・I} 百和香^{○・J} など

て数多方あり 又⁷百歩外とは承和百歩方の心也件方云

瓷中盛埋経三七日焼百歩之外聞香云々梅枝卷に勘之 (412 413 頁)

初音

よしある火をけにしゅうをくゆらかしてものことにしめたるに
えひかうのかのまかへる

(中 略)

8 袷衣香方 零陵香七分 沈香二分 丁子二兩 蘇香二兩

篋唐二兩 霍香三兩 鬱金一兩 麝香半分

右六種各別搗為散和合唯蘇合篋唐以手援碎和且好 一9

說衣比香 麝香異名也見延喜式云々或衣被 浥衣香¹⁰

千金翼方 沈香 苜蓿香各五兩 丁香 甘松香

藿香 青木香 蒟納方 薬名賦可尋薬ニハ非ス
長朝臣説

鷄舌香 雀惱香各一兩 射香半兩 白檀香三兩 零陵香十兩

又¹¹古老ノ尼君ノ秘事トテ申ハ衣被香ハ麝香半分

沈香 ^{三分} 白檀 ^{三分} 何モ最上品ヲ取合テ少シナマセンシナ

ル甘葛ニテ合云々此分二檳榔子ヲ少シ粉ヲ入云々冷キ匂ノ

増也云々最少分可加云々 譬ハ当時三草ト云薰ノ

同類也 (540 541 頁)

野分

しゅうのかにことに匂ふかうのかほりも

侍¹ 従² 薰物一方 かうのかほりは麝香の事也

(25 頁)

御幸

からのたきもの心ごとにかほりふかく

薰¹物³方自唐土御故此敷又唐にて合たる薬も

有之見梅枝卷

(39 頁)

梅枝

かなうすのをと

鉄¹白⁴ 香細搗着^ア和供入鉄白搗五百杵云々
茅山太平観記

そむ王の御いましめのふたつのほうをいかてか御みゝには

つたへ給けん

(中 略)

合¹香⁵秘方曰烏方

沈大四両 丁子二両 白檀大一分 丁香大一分 或大二分
加之云々

麝香大一分 薰陸大一分

拾¹遺⁶方

沈大四両 丁子大二両 甲香大一両 甘松一両

熟鬱金小一両 一説入麝香
一説用黄鬱金 占唐一分

蜜和研合搗三千坏炮甲香以和蜜塗之令黒黄

不得過黒此兩種方不傳男耳是承和仰事也延

喜六年二月三日故典侍滋野直子朝臣献方也

八条の式部卿の御ほうをつたへて

17 本康親王

一品式部卿 号八条宮 仁明天皇第七御子
母從四位下 紀種子 名虎 延喜元年薨高名薰物合也

18 黒方

沈四兩 丁子二兩 甲一兩 薰二兩 鬱金二兩

19 亦侍從

沈四兩 丁子二兩 甲一兩 麝二分 薰陸二分

甘松二分 件二方故八条宮方云々

この夕くれのしめりにこゝろみむときこえ給へれば

20 薰物はしめりにほひまさる物也云々 仍或は水辺にうつみ

或花木花の下の土に埋此故也

わか御ふたくさはいまそとうてさせ給右近陣のみか御溝水は水の
ほとりになそらへて西のわたとのゝしたよりいつるみきはち
かうゝつませ給へるを

(中 略)

22 承和御時右近陣の御溝の辺地にうつまる後代相伝し

て其所をたかへす云々

23 埋薰物日数事

24 長寧公主三日 姚家七日 極要方盛白瓷中

地ヲ掘事三尺以上用水辺地得朝陽埋之

公忠朝臣方云黒方侍従春秋者五日夏三日冬
七日埋樹下云々 致忠朝臣日合香之後物に入
て花木の下の土の中の高所に埋之 知章朝臣²⁹

日埋五葉松下春秋七日夏五日冬十日

たいのうへの御は三くさある中にはい花のはなやかにいま
めかしくかすくにもたちいてすやとけふりをさへ思ひきえ
給へる御心にてたゝ荷葉をくさははせ給へり

(中略)

すこしはやき心しらひをそへてめつらしきかほりくはれり

梅花方³⁰

沈香八両二分 占唐一分三朱 甲香三両一分甘松一分

白檀二分三朱 丁子二両二分麝香二分 薰陸一分

已上小十五両三分

(中略) 心しら

ひをそへてかほりくはれりとは寛教僧都説云春は³¹

丁子加増あるへしと見たれはか様の香をのこされたる歟³²
荷葉方³³

甘松一分 沈七両二分 甲二両二分 白檀二朱 或三朱

熟金二分 代麝 藿香四朱 或一分 丁子二両二分 或安息香一分 或一説三両三分

已上

天慶六年二月廿一日甲午公忠朝臣所献云々

ときくによれる匂のさたまれるにけたれんもあやなし

合香³は四季にかたとる方ある也

春³は梅^A・花^A方 紫上春の御方のすくれたるとみたり仍この比の風
にたくへんさらにこれまさるにほひあらしとあり

夏³は荷^B・葉^B方 花散里上夏御方 合之

秋³は菊^C・花^C方 又侍³・徒^D

冬³は落^E・葉^E方 又黒³・方^F

寛教³大僧都記曰春之丁子夏秋之沈冬之

薰陸隨季三朱許可加敷 合香古方

く^{薰衣香}のえかうのほうのすくれたるはさきの朱雀院のをう

つさせ給ひて公忠朝臣のことにえらひつかふまつられ

し、^百白ふのほうなどおもひえて

おもひえてとは今の薰衣香百歩方などにかよ

ひて思よそへらるゝといふ也

千金翼方曰薰衣香⁶

薰陸香八兩 藿香 覽探各三兩 甲香二兩

依唐五兩 青桂皮五兩 料理畧之

薰衣香方⁷

沈三兩 甲一兩二分 檀二分 青木香二分 丁子一兩
占一分二朱 麝 以上大

凡香附子代以鷄舌香若華拔芻納香代青木香 麝代
白檀
件方故式部卿親王上

亦³方⁸ 此方一名 體身香

丁子 藿香 零陵 青木 甘松 各三兩

白芷 當歸 桂心 濱椰子各一兩 麝香一分

右十物細搗篩為粉以蜜和搗一千坏然後出

之丸如棗核口含咽汁晝一夜三日別含十二丸

當日自覺口香五^日自覺體香十日衣被亦香廿

日逆風行他人聞香廿五日洗手面水落落地香一月

以後抱兒々亦香唯忌蒜及五辛等耳但口香體

潔而已蓋亦

治万病 一方有香附子一兩

承和百步香方³⁹

甲香小八兩 蘇合小一斤 占唐小一斤 白檀小八兩

零陵香小八兩 藿香小四兩 甘松花小四兩 乳頭香小五兩

白膠小二兩二分 麝香小四兩 鬱金小二兩二分

右十一種搗蜜和之於瓷器盛埋經三七日取燒百步之

外聞香件方出自四條大納言家大江千古所上耳

又

沈⁴ 小四兩二分 薰⁴ 小一分 檀⁴ 小一部 丁⁴ 小二兩

甲⁴ 小一兩 麝⁴ 小一分四朱

沈⁴ 小四兩 丁⁴ 小二兩 甲⁴ 小一兩 甘⁴ 小一分三朱

簪⁴ 小一分三朱 已上朱雀院御方也

薰⁴ 衣香² 一名黒方

沈⁴ 大四兩 丁⁴ 大二兩 甲⁴ 大一兩二分 薰⁴ 大一分

百⁴ 和香³ 字侍従

沈⁴ 四兩 丁⁴ 二兩 甲⁴ 一兩 已上大 金⁴ 一兩廿一兩 已上小

已上仁和元年三月四日抄三増損

さきの朱雀院

(中略)

承平⁴ 御代合香をしめ

給よし古方⁴ 等々みたり

公⁴ 忠⁵ 朝⁴ 臣⁵ 号滋野井弁 右大弁 從四位下 天曆二年十月廿八日卒 光孝天皇御孫 大藏卿国紀子 六十

高⁴ 名⁶ 薰⁴ 物⁴ 合⁴ 好⁴ 手⁴ 也云々 延喜⁴ 天⁷ 慶⁴ 間⁴ 右⁴ 大⁴ 弁⁴ 公⁴ 忠⁴ 朝⁴ 臣⁴

藏⁴ 人⁴ 所⁴ 小⁴ 舎⁴ 人⁴ 大⁴ 和⁴ 常⁴ 生⁴ 相⁴ 並⁴ 奉⁴ 合⁴ 香⁴ 之⁴ 役⁴

	1	2	35 4	5
先行する注釈書	<p>(前略) えひかうのか (中略)</p> <p>衣被香事 <small>色衣香</small> <small>色衣</small> 在東宮切韻 <small>色衣被香</small></p> <p>(『紫明抄』末摘花巻 141頁)</p> <p>一 えひのか (中略)</p> <p>或衰衣香也 或衰衣也 <small>衰</small> <small>東切韻云</small> <small>衰</small> <small>宮音也</small></p> <p>(『原中最秘抄』若紫巻 550頁)</p>	<p>一 さふらひにとのゐ物の袋おさく 見えす (中略)</p> <p>親行いはく為家卿被申侍しは源氏にはとのゐ物袋候敷元香ことなる難儀敷全分不覚悟云々</p> <p>(『原中最秘抄』若紫巻 556頁)</p> <p>一 (中略) くんえかう (中略)</p> <p>親行云為家卿被申侍しは源氏にはとのゐ物の袋</p> <p>くむえ香の事殊なる為難儀敷全分不覚悟云々 (下略)</p> <p>(『原中最秘抄』若紫巻 562頁)</p>	<p>一 (中略) くんえかう (中略)</p> <p>くむえ香とは合薫物の惣名なり (下略)</p> <p>(『原中最秘抄』若紫巻 562頁)</p>	<p>※ 『水原抄』に代えて『原中最秘抄』より引用。</p> <p>一 くさく のたき物とも (中略) 百歩のほかをおほく過にほふまで</p>

39	7	6
<p>乳頭 五 麝香 一斤 各 沈 占 唐 蘇香 白檀 零陵 各 甘松 四兩 白膠 麝金 三兩</p> <p>一 (中略) 百歩のほかをおほく過にほふまで 又或人云薰物の百歩の方の事也云々 行阿云百歩方 四条大納言 公任卿秘香也</p>	<p>たき物の方</p> <p>・ 梅花^A 春方・荷葉^B 夏方・侍従^F 秋方・黒方^E 冬方</p> <p>・ 又百歩方・又菊花^C 秋方也・又薰衣^H香</p> <p>(『紫明抄』梅枝卷 24頁)</p> <p>くさく のたき物ともくんえかう (中略)</p> <p>行阿云薰衣^H香 一名云 沈 丁子 零陵 青木 躰身香</p> <p>甘松 藿香 各 白芷 當帰 桂心 濱榔子 三兩</p> <p>香附子 各 麝香 二分</p> <p>(下略)</p> <p>(『原中最秘抄』絵合卷 562 563頁)</p>	<p>しうくゆらかして (中略)</p> <p>・ 侍従 薰物方也</p> <p>春梅花^A 夏荷葉^B 秋侍従^F 冬玄方^E</p> <p>(『紫明抄』初音卷 336頁)</p> <p>くさく のたき物とは沈丁字等一種つゝにて いまた合ぬ名也 (中略) 百歩のほかを過にほ ふとは教隆卿説云百歩をさすか但本文可レ勘レ 之一步は六尺敷然者六十丈にあたるか (下略)</p> <p>(『原中最秘抄』絵合卷 562頁)</p>

	9	12	16
<p>右 上 種 を こ ま か に 春 て 篩 て 以 り 蜜 合 丸 し て し ら ち の 杯 を 蓋 覆 に し て 三 七 日 水 辺 の 土 中 に ほ り 埋 て 後 と り 出 し 可 焼 之 云々 (『原中秘抄』繪合卷 562 563 頁)</p>	<p>え ひ か う の か (中 略) ・ 衣^{エヒ} 比^{カウ} 香^{カウ} 麝 香 異 名 云々 見 延 喜 式 又 衣 被 香 と も か け り (『紫明抄』初音卷 336 頁)</p>	<p>し ー う の か^香 に ・ 侍 従 の 香 薰 物 也 か う の か ほ り ・ 香 麝 香 也 (『紫明抄』野分卷 8 頁)</p>	<p>孫 王 の 御 い ま し め の ふ た つ の 方 を い か て か 御 み ー に は つ た へ 給 け む (中 略) 両 方 の 事 一 方 は 侍 従 方 と 見 え た り (中 略) 拾 遺 方 沈 四 兩 丁 子 甘 松 熟 薝 金 甲 香 各 一 兩 藿 香 二 分 占 唐 一 分 一 説 に は 麝 香 を 一 分 さ す 一 説 に は 黄 芩 を 一 分 入 る 伝 云 蜜 和 す り て 合 春 事 三 千 杵 甲 香 を 例 の こ と く し て 蜜 を 竿 あ ま た し ほ ぬ れ 黒 く あ ふ る 事 な か れ 承 なる 秘 香 た る よ し 承 和 の 勅 な り 若 此 方 等 孫 王 御 相 伝 敷 又 云 延 喜 六 年 二 月 三 日 典 侍 シケノナヲコ 滋 野 直 子 朝 臣 の 献 す る 方 と 云々 醍 醐 天 皇 御 事 敷</p>

(『原中最秘抄』梅枝卷 570 571 頁)

17

八条の式部卿の宮(中略)

・本康親王 仁明天皇第七御子母從四位下紀種子 名虎
一品式部卿号八条式部卿官延喜元年薨 女

(『紫明抄』梅枝卷 24 頁)

孫王(下略)

承和の帝の御孫敷可レ勘レ之(中略)

八条式部卿親王 本康 仁明第七皇子母名虎女

此李部王非レ王猶可レ考レ之

(下略)

(『原中最秘抄』梅枝卷 570 頁)

※花鳥余情は、本康親王を「仁明天皇の第五子母は從四位上滋野温子參議貞主女也」(237 頁)とする説をとる。

18

※河海抄等と処方の異なる八条官の黒方有り。

一孫王の御いましめのふたつの方をいかてかおんみにはつたへ給けむ

承和の帝の御孫敷可レ勘レ之 二の方とは梅

花黒方関院公世卿記云此両方云々行阿云八条式部

卿宮の兩種の方に小一条院に伝申さるゝ梅

花黒方合する日記

梅花方

沈 八兩二分 丁子 三兩三分 甲香 三兩三分
二兩二分共

白檀 三兩二分 薰陸 一分 麝香 二分
三朱共 六朱共

従（拾遺）掲載。
孫王の御いましめのふたつの方をいかてか御みよ
にはつたへ給けむ

（中略）

両方の事一方は侍従方と見えたり（中略）

拾遺方

沈 四兩 丁子 甘松 熟藜金 甲香 各一兩

藿香二分 占唐一分

一説には麝香を一分さす一説には黄芩を一分入
る伝云蜜和すりて合春事三千杵甲香を例のこと
くして蜜を竿あまたしほぬれ黒くあふる事なか
れ^{シケノナラコ}天なる秘香たるよし承和の勅なり若此方等孫

王御相伝歟又云延喜六年二月三日典侍

滋野直子朝臣の献する方と云々醍醐天皇御

事歟

（『原中最秘抄』（源氏物語大成）梅枝卷 570 571 頁）

『原中最秘抄』、処方異なる八条宮の梅花を掲載。
孫王の御いましめのふたつの方

（中略）

行阿云八条式部卿宮の両種の方に小一条院に
伝申さるゝ梅花黒方合する日記

（中略）

梅花方

沈 八兩二分 丁子 三兩三分 甲香 三兩 白檀

三兩二分 薰陸 一分 麝香 二分 川當帰 一分

二朱共 六種共 四朱共

黒方
(18 に処方既出)

八条式部卿親王 本康 仁明第七皇子母名虎女此

李部王非レ王猶可レ考レ之

又云梅花 八条大將家之方
承和方ニ同

(処方略)

黒方 子細梅花に同之

(18 に処方既出)

右兩種の方は八条式部卿親王の孫左大將保忠
御被二相伝一之方也然者彼幕下は竹園之孫也
云々(下略)

(『原中最秘抄』梅枝巻 570 571 頁)

※同じことわりの記された薰衣香の引用が原中最
秘抄に有り。

くさくのたき物ともくんえかう(中略)

行阿云薰衣香H一名云 躰身香 沈 丁子 零陵 青木

甘松 藿香 各 三両 白芷 當帰 桂心 濱榔子

香附子 各 一両 麝香 二分

右十二種お搗篩和合して蜜お入て合春事一千
杵取出て菜の実はかり丸して瓷器二を合て盛
レ之春は七日夏は三日秋は五日冬は七日水辺
の土中にうつむ此日数を過して掘出して一日
の中に十二丸を服すへし当日此薰物のめる者
の自身の口かうはし 五日に身躰かうはし十

<p>45 44 41 34</p>	<p>33</p>	
<p>「寛教大僧都」原中最秘抄の「薰物合高名人 数」に名前有り。</p> <p>薰物合高名人数</p> <p>仁明帝<small>承和御門是也</small> 朱雀院 白河院</p> <p>八条式部卿宮 同孫子左大将保忠</p> <p>四条大納言公任 右大辨宰相公忠</p> <p>内蔵頭兼房朝臣 大江千里</p> <p>故皇后宮<small>九条右大臣女</small> 典侍滋野直子朝臣</p> <p>藏人所小舎人大和常生 寛教大僧都</p>	<p>※先行する注釈書には落葉についての引用無し。</p> <p>たき物の方</p> <p>梅花^A 春方 荷葉^B 夏方 侍従^D 秋方 黒方^F 冬方</p> <p>又百歩方 又菊花^C 秋方 也 又薰衣香</p> <p>(『紫明抄』梅枝巻 24頁)</p> <p>・侍従 薰物方也</p> <p>春梅花^A 夏荷葉^B</p> <p>秋侍従^D 冬玄方^F</p> <p>(『紫明抄』初音巻 336頁)</p>	<p>日に着たる衣装かうはし廿日に風に向て行に たちそひてゆく人の前かうはし二十五日に手 顔あらふ水又土におちたるかうはし身躰のか うはしきのみにあらず万病を治すこれをのめ る者の徳如此況於ニ焼レ之句一哉天慶六年二月 廿一日<small>甲申</small> 依レ勅公忠朝臣所ニ合献上 也云々</p> <p>(『原中最秘抄』絵合巻 562 563頁)</p>

(『原中最秘抄』繪合卷 56: 56: 頁)

公忠朝臣 大藏卿國紀子 光孝天皇御子也 延喜十一

年三月昇殿十八年正月 [] 助三月藏人卅二廿

一年修理亮延長二年正月五位三年十月內藏 [] 助

六年正月 [] 七年正月右少弁四十一承平

三年 [] 右中弁 号滋井弁高名薰物合也

(『紫明抄』梅枝卷 24 5 26 頁)

類集雜要抄 (川本重雄、小泉和子編『類集雜要抄指図卷』 215 5 219 頁)

蘇合香 味甘温無毒 主擊惡氣殺鬼精物 忌蠱通神明 久服輕身延年是 師子矢云々 此香從崑崙來 又出大秦國 合諸香煎 其汁謂蘇合云々

白膠香 味甘平温無毒 或辛苦 主腰痛勞 羸瘦神養氣 久服レハ身輕延年 一名鹿角膠羅樹汁云々 又楓木脂也 真非作物敷

甘松香 如前 沈香 同前 白檀香 薰衣香入之

麝香 治万病不近鬼神 五香湯入之 薰陸香 如前

熟鬱金 味辛苦寒無毒 主惡々淋 其形似薑黃也 生西戎 又馬藥用故云馬木之 其類多々也 難知真 熟鬱金色紫云々

蔞糖 其樹似橘矣煎枝葉為香 似糖而黑 去邪鬼病 出交 廣以南 真者難得云々

薑香 療風水毒腫 治霍乱心痛 利小便 養氣力 其類多々也 出破律国

香附子 生諸毛髮者也 凡採得後張于 於石白木杵擣之 勿令鐘用也

已上香薰衣香用之

黒方一劑 香共ヲ合言也 同半臍 同三半臍 同小半臍

黒方 坎方 同 又坎半臍 又四半之半

侍從 拾遺 補闕 同 又 梅花 半臍 三半臍 小半臍

荷葉 同半 落葉 菊花

薰衣香方 甲香一兩 丁子香一兩 蘇合香一兩 白膠香一兩 甘松香一兩 沈香一兩 白檀香半兩 麝香半兩 薰陸香半兩 右九種 並須好者 各自別用 龜羅篩 以和使乾 香均即成

黒方一劑 実名薰衣香云々 沈四兩 丁子二兩 甲香一兩二分 薰陸一分 白檀一分 麝香二分 已上大目八兩二分

(半臍、三半臍、小半劑处方 略)

或説先和沈丁子次合甲香次白檀最後和麝香薰陸一度

合之云々 尚自小可及多為令決和合也

皇后宮御方 但八条式部卿官方同之

烏方 沈大四兩 丁子大二兩 白檀大一分 甲大一分 或本全加二分吉説也 麝香大二分 薰陸大一分 已上大目八兩 小廿四兩

坎方 沈大四兩 丁子大二兩 麝香大二分 甲大一分 白檀大一分 薰陸大一分 已上大目九兩一分 小廿七兩 此方同承和秘方

(坎方の別劑四種 略)

侍從 沈大四兩一分 或二分 丁子大二兩二分 甲香大二兩 甘松小一兩
熟鬱金小一兩

右二方是八条大将家方也 彼大将 大納言保忠是也父時平 故八条式部
卿親王之孫也然則伝来方同承和方而有相誤甚可疑之
大臣母本康親王女也

拾遺 沈大四兩 丁子大二兩 甲大一兩 甘松小一兩 熟鬱金小一兩 占唐小一分

今尋一説入麝香一説用黄鬱金或本占唐十之又云

若无鬱金者其代 麝香小二分 加 或又占唐小三分 加之

或口伝云蜜和研合搗三千杵炮甲香以和蜜塗之合黒黄

不得過黒此兩種方不伝男児是承和仰事也

延喜六年二月二日 故典侍典侍滋野口子朝臣所献方也 或宜子是公忠 朝臣女也

補闕方 沈大四兩 丁子二兩 甲大一兩 鬱大一分 甘松大一兩

同 沈小四兩 丁子小二兩 甲小二兩 或一兩 鬱小二分 若无以麝香代之耳

又 沈四兩 丁二兩 甲二分 甘二朱 麝二朱

右六方之是藏人所小舍人大和常生之秘方也件常生延木
聖代与公忠朝臣同時相並奉合香之役

梅花方 一劑 沈八兩二分 占唐一分三朱 甲香三兩一分 甘松一分
白檀二分三朱 丁子二兩二分 麝香二分 薰陸一分
已上小十六兩一分

(半劑、三半劑、小半劑 略)

荷葉方 甘松一分 沈七兩二分 甲二兩二分 白檀二朱 或三朱 熟金二分
麝香四朱 或一分四朱 丁子二兩二分 或安息一分一説三兩二分 代麝香

天慶六年二月廿一日甲午公忠朝臣所献 云々

(半劑 略)

落葉方 沈九兩 丁子四兩 甲一兩二分 麝二分 香附子三分

菊花方 沈四兩 丁二兩 甲一兩二分 蘇合一兩 麝六兩一分 麝二分

黑方 字治殿御方 沈四兩 丁二兩 甲一兩二分 麝一分 白檀一分

黑方、烏方、坎方、崑崙方 皆是一名也 云々

或云崑崙仙人所伝仍曰崑崙方後人因之通音稱之 云々

侍從、拾遺、補闕方 皆一名耳

塵穴(唐宋)拾遺本朝侍從也仍所方敷

梅花、荷葉方 皆象彼芬芳所名也

煎蜜法 以蜜入器 埋火居之 常檢器 頭適寒温 微々煎 同石鍋間用蓋ニハ綿ヲ

甲香 清美酒 經一宿取出 削去內外膚 更煎甘葛煎 塗甲香 焮火令色黄 但於甘葛煎 以微火煎之 上白有皮之時用之 一劑六合 甘葛煎用堅美焮

薰陸 皮并白物不用之 有光用之 春篩 同上

白檀 以刀子削春篩 同上

丁子 春篩 同上

已上物以甘葛煎和合 春二千杵 入茶垵物埋五粒松下冬十日夏五日 春秋七八日埋時不觸手 可清淨之

合次第

黑方 一沈 二甲 三薰陸 四白檀 五丁子 六麝香

侍從 一沈 二甲 三甘松 四鬱金 五丁子

梅花 一沈 二甲 三薰陸 四甘松 五白檀 六丁香 七麝香
有人口伝云

香共ヲ春調テ次第ニ合天先弘塗物蓋若ハ茶碗ノ弘
物ノ蓋雖无度ニ沈ヲ普ク能薄書弘ケテ圍碁局ノ

目ノ程ニシルシヲ書破其ノ上コトニ同程ニ次第ニ普ク入ニ

加ハ重テ一度ニ押合テ後煎シタル甘葛ヲ合スルニ能々

程ニ入テ香共ノ兩爪ニ随テ入ト云々本モアリ手ヲ能洗ヒ爪ヲ

切押合書マロカシ天金柏ニ入テ合セ春也杵ノ員ハ方ニ

隨書注シタリ合セ春ノ後方ノコトク埋ム日員ノ早ニ随フナリ

加宇鞆ヲ別々ニ天作ヲクハノ柏ノ内弘テコホレケレハ皮ノ蓋ヲ

シテ杵カヨフ許ノ穴ヲアケ天柏ノ下ニモ皮ナドヲ敷テ

加春也木ヲ恵利タル蓋者能甘葛ハ香共ヲ多ク

又輕々モ惡呂シセ 香共ヲ一度ニ懸テ皆ナカラ兩

爪ノ同兩爪甘葛ヲ可入

甘葛煎方

器用石鍋又銅物是等ニ入テ固炭ヲオコシ天灰ニ埋

テ口小ヲ開テ火ヲユルニシテハヤカラス寒カラス品同程ニ天

夜日七日許煎之其間アハヲ立テ随出天取スツル也

鍋蓋ニハ綿ヲ敷ラカニ張之出毛ヲ出テ塵ヲイレシ料

也金輪用之

7	12 6	
<p>承和百步香 此方出自四條大納言家大江千古所上耳</p> <p>甲香八兩 蘇合一斤 占唐一斤</p> <p>白檀八兩 零陵八兩 藿香四兩</p> <p>甘松花四兩 乳頭香五兩 白膠二兩二分</p> <p>麝香四兩 蘇金二兩二分 已上小</p> <p>甲香一分 蘇合二分 占唐二分</p>	<p>諸方 傳方之人依時代立次第</p> <p>梅花^A 荷葉^B</p> <p>侍從^F 從^I ※ 菊花^C</p> <p>落葉^D 黑方^E 付洛陽薰衣香</p> <p>坎方 薰衣^H 會昌薰衣香</p> <p>增損化度寺 裏衣香 增損薰衣香</p> <p>百步香 承和 百和^J 香 付化度寺百和香</p> <p>令人體香 浴湯香 丹陽公主</p> <p>潤面膏 落梅公主</p> <p>建醫師衣香 甲煎 香粉</p> <p>燒香 印香</p> <p>供養^G香 金剛頂經香</p> <p>觀世音菩薩留濕香</p> <p>※侍從 亦名拾遺 補闕</p> <p>(上卷 3 丁才、ウ)</p> <p>(上卷 14 丁才)</p>	<p>薰集類抄</p>

14	8	
<p>供養香</p> <p>沈九兩</p> <p>薰陸一兩</p> <p>麝香二分</p> <p>右香細搗着蜜和供入鐵臼搗五百杵如彈丸供養如來</p> <p>天寶七載六月師主景尊干時在茅山太平觀記之十二載八月寫取日本國使永生府</p> <p>丁子二兩</p> <p>蘇合一兩</p> <p>代甘松</p> <p>白檀一兩</p> <p>茅香二兩</p> <p>同錢重</p> <p>代黃麝金</p>	<p>春香</p> <p>邠王家</p> <p>邠王家</p> <p>唐以手按碎和亦好</p> <p>案之雖梅花烏方可准知歟</p> <p>（下卷 51 丁ウ）</p> <p>零陵七兩</p> <p>蘇合二兩</p> <p>鬱金一兩</p> <p>右八種各別搗為散和合但蘇合占唐以手按碎和之</p> <p>（上卷 33 丁才）</p> <p>沈二兩</p> <p>占唐二兩</p> <p>麝香二兩</p> <p>丁子二兩</p> <p>藿香三兩</p>	<p>白衣香</p> <p>邠王家</p> <p>零陵一分</p> <p>乳頭四朱半</p> <p>白膠二朱</p> <p>藿香三朱</p> <p>甘松三朱</p> <p>白檀二分</p> <p>右十一種搗篩蜜和之於瓷器中盛埋經三七日取燒百步之外聞香</p> <p>（上卷 32 丁ウ）</p> <p>（33 丁ウ）</p> <p>麝金二朱半</p> <p>已上為試四分之</p> <p>一所分出也</p>

21	17	16	15
<p>22 5 29 参照 ※28 に似るが、左記「山田尼」説にも類</p>	<p>八條宮 本康 一品式部卿 仁明天皇第五親王 母從四位上滋野繩子 貞主女也 (上卷 5 丁ウ)</p>	<p>侍從 亦名拾遺 補闕 (中略) 八條宮 沈四兩 丁子二兩 甲香一兩 甘松一分二朱 沈四兩 丁子二兩 甲香一兩 甘松一兩 熟鬱金一兩 已上小 甲香一兩 已上大 一説入麝香一説黃鬱金 或加占唐小一分 合六種而此本無之和蜜合搗三千許杵 此二者不傳男是承和仰事也延喜六年 二月三日典侍滋野直子朝臣所獻也 (上卷 15 丁才、ウ)</p>	<p>兵曹參羊崔殺祐 (上卷 39 丁才、ウ) 黒方<small>或鳥</small> 又薰衣香此説誤歟 冬凍氷時深有其匂不被封寒 (中略) 八條宮 沈四兩 丁子二兩 白檀一分 甲香一兩二分 或大 麝香二分 或一 薰陸一分 已上大 一兩 或云至要方也延喜六年二月三日典侍滋 野直子朝臣所獻也 (上卷 22 丁才、ウ、23 丁才)</p>

埋 ² 日 ³ 數 ⁴ 付埋所	長 ² 寧 ⁴ 公 ^主	姚 ² 家 ⁵ 埋 ³ 日	極 ² 要 ⁶ 方 ⁷ 日	盛 ² 白 ³ 瓷 ⁴ 中 ⁵ 掘 ⁶ 地 ⁷ 三 ⁸ 尺 ⁹ 以 ¹⁰ 上 ¹¹ 用 ¹² 水 ¹³ 邊 ¹⁴ 之 ¹⁵ 地 ¹⁶ 得 ¹⁷ 朝 ¹⁸ 陽 ¹⁹	洛 ² 陽 ³ 薰 ⁴ 衣 ⁵ 香 ⁶ 方 ⁷	入 ² 瓷 ³ 器 ⁴ 埋 ⁵ 水 ⁶ 邊 ⁷ 陽 ⁸ 氣 ⁹ 地 ¹⁰ 深 ¹¹ 八 ¹² 寸 ¹³ 七 ¹⁴ 箇 ¹⁵ 日 ¹⁶ 之 ¹⁷ 後 ¹⁸	出 ² 用 ³ 之 ⁴	承 ² 和 ³ 百 ⁴ 步 ⁵ 香 ⁶ 方 ⁷	同 ² 御 ³ 時 ⁴	被 ² 埋 ³ 右 ⁴ 近 ⁵ 陣 ⁶ 御 ⁷ 溝 ⁸ 邊 ⁹ 地 ¹⁰ 後 ¹¹ 代 ¹² 相 ¹³ 傳 ¹⁴ 不 ¹⁵ 變 ¹⁶ 其 ¹⁷ 處 ¹⁸	云 ² 々 ³ 或 ⁴ 記 ⁵ 云 ⁶ 右 ⁷ 近 ⁸ 陣 ⁹ 御 ¹⁰ 溝 ¹¹ 蔭 ¹² 下 ¹³ 壇 ¹⁴ 上 ¹⁵ 云 ¹⁶ 々 ¹⁷	賀 ² 陽 ³ 宮 ⁴	用 ² 唐 ³ 瓷 ⁴ 器 ⁵ 掘 ⁶ 露 ⁷ 地 ⁸ 深 ⁹ 三 ¹⁰ 尺 ¹¹ 許 ¹² 埋 ¹³ 之 ¹⁴	八 ² 条 ³ 式 ⁴ 部 ⁵ 卿 ⁶ 宮 ⁷	公 ² 忠 ⁷ 朝 ⁸ 臣 ⁹	一 ² 宿 ³ 埋 ⁴ 馬 ⁵ 矢 ⁶ 下 ⁷ 件 ⁸ 方 ⁹ 傳 ¹⁰ 得 ¹¹ 陽 ¹² 成 ¹³ 院 ¹⁴ 書 ¹⁵ 云 ¹⁶ 々 ¹⁷	黑 ² 方 ³ 侍 ⁴ 從 ⁵ 春 ⁶ 秋 ⁷ 五 ⁸ 日 ⁹ 夏 ¹⁰ 三 ¹¹ 日 ¹² 冬 ¹³ 七 ¹⁴ 日 ¹⁵ 埋 ¹⁶ 之 ¹⁷	似の表現が用いられている。このため、特定の記事や口伝の写しというよりも、一般論として見るべきか。
---	--	---	---	--	--	---	--	--	--	---	--	--	---	--	--	--	--	--

致² 梅樹下
忠⁸ 朝臣

知² 合香天後物ニ入テ花乃木ノ下土中に高埋之
章⁸ 朝臣

山 田 尼
五葉ノ松下ニ可埋春秋七日夏五日冬十日

茶 坑 の つ ほ も し ハ つ き な ど に い れ て ふ た よ く

お っ い て そ く ひ し て か み お し て よ く み つ

い る ま し く 封 し て 梅 樹 の も と に う つ む

へ し そ れ あ め な と い り て な か る っ も あ し

か り ぬ へ し 花 の 木 の し た の つ ち を も の

に か き い れ て う つ み た る い と よ し 又 水 の

ほ と り み ち の つ し む ま の や の な か に も も の

に し た か ひ て う つ む へ し あ る い は 十 日

も し ハ 廿 日 な と う つ め く ろ ほ う 梅 花 な ど に

木 の し た に う つ み て 春 秋 は 五 日 夏 ハ
三 日 冬 ハ 七 日 あ り て と る へ し つ ち を ほ る
こ と 二 尺 許 な り
(上卷 61 丁ウ 64 丁ウ)

参 議 師 成 從 二 位 小 一 條 大 將 濟 時 孫 中 納 言 通 任 男

沈 香 八 兩 二 分 或 本 二 分 可 用 心 占 唐 一 分 三 朱 甲 香 三 兩

甘 松 一 分 白 檀 二 分 三 朱 丁 子 二 兩 二 分

麝 香 二 分 薰 陸 一 分 已 上 小 十 五 兩 三 分

沈 香 四 兩 一 分 占 唐 四 朱 餘 甲 香 一 兩 一 分 三 朱

甘 松 三 朱 白 檀 一 分 一 朱 餘 丁 子 一 兩 一 分

麝 香 一 分 薰 陸 三 朱 已 上 小 八 兩

(上卷 11 丁オ、ウ)

麝香二分

右十物細搗絹篩爲粉以蜜和搗一千杵然後出之丸如棗核口含咽汁盡一夜三日到含十三丸當日自覺口香五日自覺躡香十日衣被亦香廿日逆風行他人聞香廿五日洗手而水落地香一月已後袍兒亦香唯忌蒜及五辛等不只口香體潔兼亦治万病

一方有香附子

唐僧長秀四作薰衣香用蜜和合是劣方也

作瓷盆

但盆下若煙處塗丹燒調

穿其底重日五口許

其最上盆出小烟之孔穿五處以垵或時蓋

寒或時取去以薰爐居盆下割沈香燃之

其煙多着盆裏而或如露落爐邊其時止也

出爐而居外取筑以木倍良判取其脂入一

器之中取諸香任法春篩和件沈脂而盛

温器之內納量取之任用其香極芬芳也

(上卷 29 丁ウ、30 丁才、ウ、31 才)

承和百步香此方出自四條大納言家大江千古所上耳

甲香八兩

蘇合一斤

占唐一斤

白檀八兩

零陵八兩

藿香四兩

甘松花四兩

乳頭香五兩

白膠二兩二分

麝香四兩

麝金二兩二分已上小

甲香一分

蘇合二分

占唐二分

白檀二分

零陵一分

藿香三分

甘松三朱

乳頭四朱半

白膠二朱

43	42	44 41	44 40	
<p>百和香</p> <p>沈四兩 丁子二兩</p> <p>熟麝金一兩 甘松一兩 已上少</p> <p>甲香一兩 已上大</p>	<p>※ 黒方^{或馬} 又薰衣香此說誤歟 冬凍氷時深有其句不被封寒</p> <p>※ 処方的一致する黒方は無し。</p> <p>(上卷 21 丁ウ)</p>	<p>朱雀院東三条院用之</p> <p>沈四兩 丁子二兩</p> <p>甘松一分三朱 藤藹一分三朱 已上小</p> <p>右方自天曆御時所令傳給也取煎蜜微火 以春篩占唐入蜜且煎且攪撥合之後入諸 搗香以匙調和先以目^下計搗香程調占 唐之蜜、程多於香少於香尤為拙以能 均成爲巧合了搗三千六百杵畢取出作丸 斤量之後入瓷壺埋水邊得陽氣之地</p> <p>(黒方 上卷 17 丁ウ、18 丁才)</p>	<p>朱雀院東三条院同之</p> <p>沈四兩二分 薰陸一分 白檀一分</p> <p>丁子二兩 甲香一分 麝香一分四朱 已上小</p> <p>(黒方 上卷 24 丁才、ウ)</p>	<p>麝香三朱 麝金二朱半 已上為試四分之 一所分出也</p> <p>右十一種搗篩蜜和之於瓷器中盛埋經 三七日取燒百步之外聞香</p> <p>(上卷 32 丁ウ、33 丁才、ウ)</p>

寛平六年九月十日八条一品宮於御前寫

(上卷 33 丁ウ、34 丁才)

右大辦公忠

從四位下 大藏卿國紀男仁和源氏也
母典滋野直子也仍傳之

沈八兩 或八兩二分

占唐一分三朱

甲香二兩二分 或三兩一分

甘松一分

白檀二分三朱

丁子二兩二分

麝香二分

薰陸一分

沈四兩一分

占唐四朱半

甲香一兩三朱

甘松三朱

白檀一分一朱半

丁子一兩一分

麝香一分

薰陸三朱 已上小定

占唐代入麝香案之麝香本自在合種、
中而其代入之者可加增麝香分數

大和常生 延喜御時藏小舍人也

沈四兩一分

丁子一兩一分三朱

占唐四朱半

甲香一兩一分

甘松三朱

白檀一分一朱半

麝香一分

薰陸三朱 (上卷 6 丁ウ、7 丁才、ウ)

大和常生

沈四兩

丁子二兩

甲香二兩 或本一兩

麝金二分 若無以麝代之

甘松二分一朱 已上小

沈四兩

丁子二兩

甲香二分

甘松二朱

麝香二朱

右二方是藏人所小舍人大和常生之秘方也

件常生延喜聖代與公忠朝臣同時相並事

合香之事者也

(上卷 16 丁ウ、17 丁才)

第一章

人物研究篇

第二章 第一節

源公忠の家系と薫物（上）

— 滋野貞主から滋野直子へ —

序

光孝天皇一世源氏国紀を父に、「滋野朝臣直子」を母として生まれた源公忠は、「滋野」或いは「滋野井」と号した。前者は母方の姓に由来することが明らかで、公忠と母方との血脈、家系面での繋がりや強さを想像させるため、公忠について源姓でなく滋野姓を採る『姓氏家系大辞典』のような先行研究も見られた。後者の「滋野井」とは、嗟峨、仁明、文徳朝の寵臣滋野貞主邸の敷地にあつた名井のことで、転じて貞主ゆかりの邸宅をも意味する。「滋野井」の号が正しければ、後世この邸を伝領した藤原公季流の人々のように、公忠は滋野井第を住いとしたので其の名を号したと推定される。

滋野井第の伝領を可能にした要因として、貞主と直子が近親者であつたことが想像されてきたが、史実や史伝に二人の關係は明かでない。血脈關係の不確かさについては公忠が所有した薫物の処方についても同様で、公忠が母直子ないしその近親者と推定される貞主ゆかりの処方を伝えたことについては古くから指摘されてきたが、貞主、直子、公忠らがどのように薫物に関わっていたか、また、彼らにゆかりの薫物がどのように後世に受け継がれていったのか、そうした問題点が論の主題として考察されてきたことは無かつた。

左記にまず、直子から公忠、その子息觀教の職歴と関連事項を略述した年譜を示す。本節と続節では、この年譜を傍らに置きながら、公忠の母直子と貞主との關係、滋野氏と公忠の薫物とそれを通じた皇統、撰閲家との関わり、並びに公忠子息子女への薫物の相承と

その影響について論じる。

天皇		年		月日		〔滋野直子、觀教略年譜〕	
天長十年 (八三三)	五月某日	〔関連〕	繩子所生の皇子、六歳で薨去。 (続)				
承和三年 (八三六)	四月二十九日	〔関連〕	繩子、無位から正五位下に叙される。 (続)				
四年 (八三七)	未詳	滋野直子誕生。	(略 参照)				
九年 (八四二)	秋	〔関連〕	滋野貞主、参議に任ぜられる。 (文)				
十年 (八四三)	未詳	〔関連〕	貞主、このころ遣唐使として渡海か。 (百 参照)				
十一年 (八四四)		※本年譜保延二年項参照					
嘉祥二年春 (八四九)	春	〔関連〕	貞主、尾張守の時、大宰府吏の良からざる者多き事を上表。 (文)				
仁寿二年 (八五二)	二月八日	〔関連〕	参議従四位下兼宮内卿相模守滋野朝臣貞主薨去。六十八歳。 (文) (補)				
貞観四年 (八六二)	十二月廿二日	〔関連〕	従四位上滋野朝臣貞雄薨去。 (三)				
仁和二年 (八八六)	九月卅日	光孝天皇更衣滋野朝臣直子、斎王繁子内親王の伊勢下向に供奉。伊勢国鈴鹿頓宮で火災、直子の車に内親王をお乗					

〔源公忠略年譜〕

醍醐				宇多		光孝	
(九〇八) 八年	(九〇六) 六年	(九〇五) 五年	(九〇四) 四年	(九〇一) 延喜元年	(八九七) 寛平九年	(八八八) 寛平年中	(八八七) 三年
三月廿日	二月三日	八月某日(國本に十五日)	未詳	十二月十四日		未詳	八月廿六日
	典侍滋野直子朝臣、本康親王の薫物「侍従」「黒方(或は「至要方」)」を献ず。 (薫)			【関連】一品式部卿本康親王薨。 (日)	東宮宣旨滋野、寛緩和柔の人なり。息所菅氏ともどもおのが身を激励し勤仕す。 (寛)	直子、この年源公忠を生むか。五十二歳。	せし頓宮を出る (三) 【関連】光孝天皇崩御。 (三) 【関連】斎王繁子内親王退下 (一) ※更衣滋野朝臣直子、内親王とともに帰京し、光孝天皇第一源氏国紀の妻となるか。
藤壺の藤花宴で歌を詠む。 (公西6御6) ※正「延長八三月廿三日」冷「延喜九年三月廿二日」とし、同じ歌が続く。年代については、書写誤りや異伝と見るには異同がはなはだしく、公忠はいずれの藤		八月十五夜を詠ず。 (公西34正35御36冷ナシ)	中宮藤原穩子(同年二十歳)御屏風に歌を献ず。 (公西38正39御39冷ナシ)			寛平御時歌合に出詠。 (公西17正17御19冷ナシ)	(歌・河・日 参照)

醍	醐	
(九一二) 十二年	(九一九) 十一年 (九一二) 十一年	九年 (九〇九)
十月某日	正月廿二日	三月廿二日
<p>醍醐天皇の菊花宴で歌を詠む。 <small>(公西15正15御17冷13)</small> (新勅)</p> <p>※冷・御の詞書に「人の為に作る」、冷の詞書に「きくのえんのまたのひ」とある。萩谷朴氏『平安朝歌合大成』は本歌の詠まれた醍醐天皇御時菊合を延喜二十一年・二十二年迄に開催と推定、山口博氏『王朝歌壇の研究』は、公忠ら出詠者と出仕者とは最も多く一致する延喜十八年の開催と見る。</p>	<p>源公忠等殿上人及び所々別当を定む(貞)</p> <p>源朝臣公忠大藏卿国紀二男、光孝天皇孫、延喜十一年正月廿二日昇殿廿三 <small>(歌)</small></p>	<p>花宴でも歌を詠み、そのうち一首が仔細不明のまま伝わったと見るべきか。また、延喜八、九年の飛香舎を壺とした人物については明かでないが、公忠集には、延喜十七年に藤壺尚侍と呼ばれる満子らしき女性が登場している。満子は出仕当初梨壺を在所としたらしく(貞・延喜七年二月八日条)、延喜十七年までの間に藤壺に移転したと考えられるが、出仕の翌年であったかは不明。 <small>(公冷5)</small></p> <p>藤壺の藤花宴で歌を詠む。</p>

<p>十三年 (九一三) 四月十五日</p>	<p>十五年 (九一五) 正月十九日</p>	<p>十七年 (九一七) 十月廿五日 (五日イ)</p>	<p>十八年 (九一八) 三月十四日 (藏・十七日)</p>	<p>十九年 (九一九) 某日 (三月とも)</p>
<p>(延喜) 十三年四月、任掃部助、 (歌)</p>	<p>典侍正四位下滋野朝臣直子卒。七十九。 (日)</p> <p>正廿日、典侍有子卒、贈従三位、東宮宣旨、給葬料、施卍疋、調布五百端、商布二百端、遣民部大輔良幹就後家宣命口追福日、遣使有御諷誦、使少將、 (西)</p>	<p>廿四日 詔贈三故典侍正四位下滋野朝臣直子従三位。賜三絹布等。 (日)</p>	<p>掃部助、藏人の頃、藤原季繩の文を醍醐天皇に奏上。 (大)(新)(古)(宇)</p>	<p>とも</p>
<p>【関連】四月十五日、除目。 (貞・補・西)</p>	<p>(延喜) 十五年正月十九日昇殿。 (歌)</p>	<p>藤壺尚侍満子の御屏風、或いは菊花宴に歌を献ず。 (公西¹⁴正¹⁴御¹⁶冷¹²) (続後)</p> <p>※冷本詞書は「延喜十七年十月十五日御前のきくのえのひ」と、続後も「延喜十七年十月、御前の菊の宴の日」とし、公忠集の他本と同じ歌が続く。満子はこの年従二位に昇進。延喜十三年には満子の四十賀が行われ、醍醐天皇の仰せで御屏風も作成されている(貫之集²³)。</p>	<p>(延喜) 十八年三月十四日、補藏人、卅一、 (歌)</p>	<p>※古、宇は奏上未詳、名のみ。『大和物</p>

<p>廿年 (九二〇)</p> <p>某日</p>		<p>『語』諸本勘物に季繩は延喜十九年卒と、『本朝通鑑提要』には延喜十九年三月卒とされる。</p> <p>近江大掾 (蔵)</p>
<p>廿一年 (九二一)</p> <p>六月三日</p>		<p>兼近江権大掾、 蔵人掃部助源公忠 三月日任修理亮(蔵) (歌)</p>
<p>廿三年 (九二三)</p> <p>三月某日</p>		<p>廿一年三月十三日任修理権亮(歌) 【関連】右大弁公忠(談・公忠弁)頓滅、三日後蘇生。夢告を醍醐天皇に奏上、後に延長と改元 (往)(談)</p>
<p>延長元年 (九二四)</p> <p>閏四月十一日以前</p>		<p>【関連】蔵人修理亮源公忠宿直夜、夢中、菅御殿門、奉三書文於帝釈宮一給 (北) 【関連】洪水、疫病により延長と改元。 (日)</p>
<p>二年 (九二五)</p> <p>五月廿九日</p>	<p>大江千古没。</p>	<p>(勅)(大)</p>
<p>三年 (九二六)</p> <p>正月七日</p>	<p>※勅は延喜二年没とするが、貞・延喜十九年六月十九日条に千古が給を給うとある。大江氏系図は延長二年二月没とする。</p>	<p>叙従五位下、蔵人勞、本官如元 【関連】節会・叙位如例 (貞)(歌)</p>
<p>六年 (九二八)</p> <p>正月廿九日</p>		<p>任内蔵権助 (歌)</p>
<p>七年 (九二九)</p> <p>正月廿九日</p>		<p>補蔵人 (歌)</p>
<p>二月廿五日</p>		<p>任右少弁 (歌)</p> <p>東大寺俗別当となる。 (大)</p>

朱 雀					
(九三二) 九年				(九三〇) 八年	
廿日	二月七日	正月廿一日	正月某日	十一月十八日	九月某日
三月廿三日					
藤壺（中宮藤原穩子在所か）の藤花宴に歌を献ず。 （公正6）	※延喜八、九年藤花宴での献歌参照	【関連】延長四年十二月十九日、中宮東宮遷御飛香舎 （貞）	（延長）八年九月、停藏人、依昇駕也、（歌）	【関連】九月廿二日、壬午、天皇逃位、譲於皇太子寛明親王、 （日）	【関連】おりのぼるみるかひもなし白雲の山と頼みし君もなければこの歌延喜の御門かくれ（させ）給ひて、殿上もせざりけるほどに、山に雲のかゝりたりけるをみやりてよめる （公西35正36御37冷ナシ）
右少弁従五位下源公忠 延長八十一十八補、先朝藏人、 （藏）	（延長）十一月十八日、補藏人、 （歌）	※新・公正保本 承平八年につくる。	朱雀院の御遊で歌を詠ず。（公西1正1御1冷ナシ） ※新・公正保本 承平九年につくる。	藤原忠平、海賊の文を公忠朝臣に付す。 （貞）	公忠朝臣、太宰大貳源等赴任の由を奏す。 （貞）
加賀解文四枚を多治助繩に給う。官奏有り、公忠朝臣、去年依念用所仰国々、在					

	三月五日	十五日	廿五月	四月三日	七日
<p>下絹布宣旨、不待民部勘、見物可行状、公忠朝臣申仰了、 (貞)</p>	<p>左金吾(藤原恒佐)来、左大弁・左中弁(紀淑光)・右少弁(源公忠)等申政、大藏幄・主殿班不可借諸家宣旨、仰左中弁、 (貞)</p>	<p>有官奏、公忠朝臣、又給雜宣旨、以平原為興福寺別当、以仁敏為角寺別当宣旨、 (貞)</p>	<p>秘樹申文・公文勘文合四枚、令公忠朝臣出陣定申、左金吾・右大弁等定日、赦後給装束、及依病假百廿日可免遣者、依議免了、有官奏・直物・内印等、直物廿四人 (貞)</p>	<p>有官奏、公忠朝臣、左大弁来、有伊豫調(綱力)丁事・賀茂社修理等事、又太宰春米可給責符事 (貞)</p>	<p>史経行・勘解由主典益国可令直式所事仰、奏成選短冊事、行久永宿祢、院(宇多法王)召少将、仰云、信濃諸牧別当邦行任可延二年者、仰公忠朝臣、但先可勘四年為限官符、又可勘依三合給官符、又可給諸司仕丁・采女・内教坊等一月新、女官・主殿・縫殿等半月新以穀可給、仰同弁、(※宇多法王から直接ではなく忠平を介して) (貞)</p>

朱 雀						
(九三二)		二年	承平元年 4/26 改元 (九三二)			
十一日	六月八日	正月七日	十一月八日	八月八日	閏五月七日	五月廿日
御調度什作物可令作、是先例也者、依請、	公忠朝臣来云、檢前例、諸神々宝・宇佐守宝、同日奉遣者、依例可行、又初齊院	<p>公忠朝臣来、令見讚岐介泚茂臨時交易絹・春米違期納過状、仰云、仰官与傍国司過状取集、可令法家勘申所当罪者、(貞)</p> <p>公忠朝臣来云、檢前例、諸神々宝・宇佐守宝、同日奉遣者、依例可行、又初齊院御調度什作物可令作、是先例也者、依請、</p>	<p>有官奏、公忠朝臣、仰木工寮可令作醍醐寺事、同弁、但明日可仰、令戸部定賑給使兼施米、民部省奏封宛文、便付内侍返給、(貞)</p> <p>有官奏、公忠朝臣、便仰正倉垣破事、依霖雨久降、諸人多愁、令占若有崇敷、占申云、依穢良坤方神社所致敷者、遣檢非違使令見檢、(貞)</p> <p>有官奏、公忠朝臣、比江社祢宜・祝等罪状可令勘事、(貞)</p> <p>兩太上皇崩後、御封返納之年可令勘申状、仰公忠朝臣、(貞)</p>	<p>承平二年正月七日、叙從五位上 (歌)</p> <p>【関連】「節会如例、但不卷御簾、御弓付内侍所例、公頼、伊望朝臣、又兼忠加階、今日加入、」</p> <p>(貞・承平二年正月七日条)</p>		

	三年 (九三三)		
十一月五日	正月十三日	二月十三日	八月二十七日
<p>賀茂社有御幣、使公忠朝臣也、戸部云、幣使不受宣命文参向、仍差小舎人召返給之、 (貞)</p>	<p>(承平)三年正月十三日、兼山城守(歌) 【関連】承平三正七貞信公内弁、同元日御記、心身不調、不行内弁事、候簾中云々、同十三日、任公卿、貞信公為内弁、 (西・八 院宮 摂政)</p>	<p>藤原仲平任「大臣」の大饗に列席、「おそくとく」の一首を詠ず。(大)(新)(鏡) ※公忠集冷本は、承平七年任左大臣の大饗の際に、藤原敦忠、忠平詠歌に続けて仲平が右の歌を詠じたと伝える。</p>	<p>康子内親王御裳着(北宮裳着)の御屏風に歌を献じ(「ゆきやらて…」公西₈御₇冷₈)、 賀歌一首を詠ず(「皆人の…」新勅)。 【関連】(八月)廿七日辛未。先帝第十二康子内親王於三常寧殿一初筭。即叙三品一。 ※冷本詞書に、本屏風は「せわうのみやすところにおはしまいしないしのかみ」が奉ったとされる。尚侍は故保明親王御息所藤原貴子か。大鏡忠平伝に、貴子を「先坊のみやす所」と称す。 ※康子内親王裳着を祝し、他にも内侍の</p>